

# マギアレコード実況プレイ 皇帝ルート

yukinko\_kuru

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

b i m兄貴リスpektですがRTAでは無いです。

なのでレギュレーションは存在しません。

—注意事項—

この小説は実況プレイ風小説です。苦手な方はブラウザバックを。

執筆ペースが遅いので更新頻度は遅いです。ご了承ください。

小説を書くのは初めてなので文章が少々見苦しいかもしれません。

作者はアニメ勢で、アプリ版を最近になってプレイし始めました。

その為所々原作と差異があるかも知れません。ご了承ください。

勿論原作の原作のまどマギは叛逆まで視聴済みです。

(淫夢要素は) ないです。

追記

CHARAT GENESISで作った結川リンネのイメージ画像(私服)です。

# 目次

ほんへ

Part. 8	魔法少女マジカルかり	143
Part. 7	幸福な者と絶望する者	117
Part. 6	一狩り行こうぜ!	97
Part. 5	創成の魔女	78
part. 4	衝撃の邂逅	56
Part. 3	好感度のガバ	38
part. 2	始まり	21
part. 1	ニューゲーム	1

side | No. All | 芸術、天才、外人、狂気

Part. 9	ガバ中のガバ	175
Part. 10	病院送り	208
Part. 11	Q. なんでガバに気づかないんですか?	233
Part. 12	何者かもわからない	262
side   No. A2	独自性喪失	290
Part. 13	第一回神浜マギウス会議	299
Part. 14	CROSS CON	





ほんへ

## part. 1 ニューゲーム

はい、よーいスタート。

神浜の魔法少女を支配する実況プレイ、はーじまーるよー。

という訳で皆さんこんにちは。今回プレイしていくのは皆さんご存知『マジアレコード』20XX年発売。6980円。Steam、PS、Xboxで好評発売中！買え。です。

ソシャゲの方ではなく、それから派生したアクションゲームの方です。ゲームの内容としては、原作のマジレコの世界に自分のキャラを投入して原作の物語に干渉できるといった感じですよ。

それでは早速ニューゲームを押ししてスタートします。

ゲームを始めるとまず難易度設定が表示されますがここはもちろんハード難易度はカジュアル、ノーマル、ハードの3種。難易度による違いは戦闘の難易度上昇の他、ハードではイベントの成否判定やキャラクターの行動パターンが完全ランダムとなる。を選択。当たり前だよなあ!?

難易度を決めたらお次はキャラクターです。

一応全部ランダムに設定することも出来ませんがそんな事したら（進行計画が）死んじやうだろ！いい加減にしろ！

まあRTAでもないので急ぐ必要はないです。ちゃんと凝ったキャラクターを作って行きましょう。

：と行きたいところですが私にキャラクターの才能はなかったので容姿はゲームにお任せしましょう。ランダムでも結構いい感じの子が生まれてくれるので。

次に開始時期の選択ですがこちらは無難に1年前この場合、手っ取り早く色々なイベントに介入できるのでオヌヌ。を選択します。

次に名前の入力ですがここは入力速度を考慮：：する必要は無いので普通に『結川<sup>ゆいかわ</sup>リンネ』にします。略してゆりちゃんです。



ゆりⅡ百合ⅡレズⅡ同性愛者Ⅱホモ  
やっぱりホモじゃないか(困惑)

次は出身校の設定ですね。

ここも無難に神浜市立大附属学校でいいでしょう。

学年は高校2年生で年齢は17歳。

魔法少女歴はランダムでも問題無いです。

お次は願いの設定です。

こちらは自由入力にします。内容は「彼らに地獄を見せる」です。なんかすごい不穏な願いですが一体何があったんでしようかね?(すつとぼけ)

この願いになると、高確率で経歴がヤバイ事になります。かわりに本プレイで役に立つ「幻錯」の固有魔法を使えます。ただし時々別の固有魔法になるのでその場合リセットです。(1敗)

次に性格ですが、これは「合理的」と「お人好し」にします。理由は後で解説します。

最後に特質の設定です。こちらは所謂性質みたいなものです。「本好き」なら本に関する知識を持っていたり、本を読むことでS・Gソウルジェムの穢れを抑制できたり、「リーダーシップ」なら他のキャラの信頼度を上げやすかったり、統率を取りやすかったりします。勿論メリットだけではないですが、基本的にゲームを有利に進めることができるようになるものが多いです。

今回は……まあ基本なんでもいいです。(適当)  
ですが今回は「アーティスト」にしておきます。

特質がアーティストの場合、「アリナ・グレイ」に狙われにくくなる隠し効果があります。今回のプレイではアリナとある程度交友関係を築いておきたいのでこれにします。

残りはランダムでパパパツと決めて、終わり！

キャラクリが終わったら次はステータスの設定です。

取り敢えず基本ステータスを決めます。

基本ステータスは体力、攻撃力、防御力、魔力、速力の5つが有り、その5つに最初に与えられたランダムなポイントこのポイントは魔法少女歴や経験、因果律等によって変動する。最大値は50。を振り分けていきます。ちなみにそれぞれの最大値は10

です。

で、このポイント、今回は30は欲しいです。じゃあそれ未満だったらリセットするのかもしれない、ご安心下さい。ここにあるボタンを押すと数値の再抽選ができます。

つまり我々はもう某レゲーのようにステータスリセマラをする必要が無くなり、このボタンを腱鞘炎になるぐらい押しつづけるだけでよくなったのです。結局地獄では？

て事で目的の数値が出るまで114倍速。

(倍速中)

14<sup>五七</sup>…低すぎるツピ！

次だ次だ次だ！

来た28！30にギリギリ届いてないけどまあ誤差だよ誤差！たった2ポイントなんて必要ねえんだよ！

そしたらこのポイントを振り分けます。念の為に説明しておくところこのポイントはあくまで成長率を決めるものであって、実際のステータスではないです。

そしたらポイントを以下のように振り分けます。

体力——4

攻撃力——8

防御力——3

魔力——7

速度——6

耐久系のステータスに関しては当たらなかつたら極論1でもいいです。攻撃は上げておかないと色々面倒なのでこの値。魔力は幻錯の消費魔力が割と多いので多めにふつてます。

それじゃあステータスの次は属性を決めます。

属性火、木、水、光、闇、無の6属性存在する。有利不利は原作と同じ。に関しては聞一方的に有利な属性も不利な属性も無いので使いやすい属性。同じ様な光属性もあるが、本作は性格なども属性に影響しており(主人公のみ)、本プレイ的に光だと面倒な事になる可能性があるため。一択です。

そしたらステータス決めは終わり！閉廷！以上！

ここからクソ長&スキップ不可のOPが始まりますがこんな動画を見に来ている人は皆さん既プレイヤーだと思われるので見飽きているでしょう。なので：. . .  
みなさまのため

今回のプレイの概要と固有魔法について解説します。

このマジアレコードにはそれはもう大量のエンディングが用意されているのですが、今回目指すエンディングはズバリ、『皇帝エンド』です。

この皇帝エンドですが、条件が非常にシンプルかつ難しいです。

その内容とは、「4人以上が所属している力のある組織、グループを従える事」です。この条件に当てはまるのは、

- ・ マギウスの翼、及びマギウス
  - ・ チームみかづき荘
  - ・ ななか組
- の3つです。

これを見ると少なくとも簡単そうに見えるかもしれませんが実際は地獄です。

この従えるという条件ですが要は、こちらの命令を聞いてくれる事と、チームの信頼度が一定以上、もしくははチームのリーダーが服従状態である事と、こちらに攻撃する意志を持っていない事という3つの条件が揃えばクリアとなります。

これだけだと簡単そうに見えますが、マギウスをこの状態にするのが非常に難しいです。

特に里見灯花が一番難しいです。やつは全て自分の思いどおりになると思い込んで

いるので、他人に支配されるのを極端に嫌います。

それ以外は案外どうにでもなります。(適當)

このルートのやり方は平和的な物と強引な物がありますが…

平和的とか甘えた事言っつてんじやねーよカス！(豹変)

という事なので強引な方法を選びます。

次に固有魔法の「幻錯」についてです。

この固有魔法は幻覚などとよく似ていますが、所々違いがあります。

全部説明すると時間がかかるので、重要なところだけ説明すると、感覚と意識、考えにまで影響を与える事ができるという点です。

感覚に関しては、例えば視覚を無くして失明状態にしたり、平衡感覚を無くしてまともにも動けなくさせたりできます。

しかし一時的なもので、いずれ解除されます。この手の魔法の全般に言えることですが、特に精神値が高い相手は一瞬でとられます。

意識と考えるは、簡単に言うとも相手を洗脳状態にすることができます。

しかしこれも精神が高いと簡単にとられます。

ただ、S A N値が低いと基本的にどんな娘も自力で解くことが出来なくなります。

ただしこれらは消費魔力がエグいです。使いすぎるとすぐに魔女化します。(1敗)

また使用時も、範囲型、接触型、S G型の3つがあり、範囲型は、後の2つと比べて消費魔力が低いですが、範囲を選べないのと、対象を選択出来ないと言うデメリットが存在します。

接触型は、消費魔力が高いですが、ピンポイントで使用できるという点があり、使い勝手はいいです。ただし相手に触れないといけないので戦闘中は難しいです。

す。S G型は、S Gに触れる以外ほぼ接触型と同じです。違いは効果や成功率ぐらいです。

今回はこの幻錯の洗脳を多用することになると思われます。

理由は…… まま、ええやろ。

時間がまだあるようなので性格についても解説します。

今回の「合理的」と「お人好し」ですが、まず、合理的についてです。

この性格にすると、自身の感情が薄くなり、常に合理的な判断を下すようになります。そうじゃない行動をする事も出来ませんが、その場合SGがマツハで濁るのでやめましょう。(9敗)

これは、例えばどんな行動であろうとも、その場で自分が最も正しいと思った行動を、取ります。そう、それが例えばどんな下衆行為であろうとも。(暗黒微笑)

この場合SGは全然濁りません。サイコパスかな？

ただしこの性格は人間関係がクソになります。(そりや合理的の塊みたいなやつとは一緒に居たくないから)ま、多少はね？

そこで登場するのが、この「お人好し」です。

この性格を入れることによって、あくまで見た目上は、正義感が強くて優しく仲間を見殺しになって出来ない人になります。まるで主人公みたいだあ：。(直喩)

これを入れることで人間関係がかなり改善され、信頼度や好感度も稼ぎやすくなります。

しかも今回のこの組み合わせの場合、例えばほかの魔法少女が死にかけてて、自分が動けば助かるという状況があつたとします。

しかしその娘を助けても、自分にとってはうま味がありません。むしろわる味



です。しかしその娘を助けることで周囲の魔法少女の信頼度が上昇する、という状況で、どちらかの性格しかない場合、ほぼ強制で助けるか見殺しにするかが決まる訳ですが、どちらも取っていることで、その時の状況によってどちらか選ぶことができるようになります。

しかもどちらを選んでもSGの穢れは溜まりません。

バランスブレイカーでは？と思う兄貴姉貴もいるかもしれませんがそんな事をしないとかリア出来ないんですよこのルートは…（絶望）

しかも今回はハードモードです。こんな手を使わないと生きていきません（諸行無常）

それでは説明も終わったところで早速プレイを開始していきましょう。

…  
あくしろよ。

…  
あくしろよ。

…  
あくしろよ。

…  
全然始まりません。どうしてくれんのこれ？はーつつかえ！

全カットです。(無慈悲)

お、始めましたね。

クオクオア：・どうやら自宅のようです。

結構いい家に住んでいるみたいですね。

とりあえずまずはステータス体力は9999、攻撃力は9999、防御力は9999、魔力、速力は200が最大値。の確認からです。

年齢—17歳 魔法少女歴—4年

Lv. 53 最大Lv150。現在のやちよのLvは70手前辺り。

体力—4, 214

攻撃力—437

防御力—156

魔力—140

速力—74

お、結構いいステータスですね。

やちよさん程ではありませんが、中々強いです。攻撃力に関してはやちよさん並みなんじゃないですかねこれ？

まあ体力と防御力は中々に酷いですけど。

そして魔法少女歴は4年のベテランですね。みゃーこ先輩と同じです。

次は技能スキルをみてくださいか。

…なるほど。めっちゃ頭良いですねリンネ。

知能の部分のレベルが9あります。ちなみに灯火のレベルは10です。鶴乃は7。次は性格をみてください。

「合理的」「お人好し」「感情的」「クール」

ええ… (困惑)

既に設定したふたつに加えランダム枠のクールと感情的ですね…

正直言ってかなり微妙です。

というか合理的と感情的は普通同時につくことはありません。

が、自分の中で譲れないものがあつたりする場合は感情的がつくことがあります。

ただ基本は合理的がメインで作用してくれます。何かでトリガーが引かれた時に感情的が作用する感じですね。

まあとりあえず普通に進めて支障をきたした場合はリセットですかね……（絶望）  
 特質は……

「アーティスト」「学者」「シークレットステータス」

普通だな！（予定調和）

学者特質は何でも研究、探求したくなります。

シークレットステータスに関しては隠し特質で今は確認不可です。ここに変なのが入っていないことを祈りましょう。（2敗）

次に精神力。

なるほど。強ですか。だいぶ強靱な心をお持ちのようで。ママの精神力は“脆弱”。

次に交友関係を見ていきましょう。

七海やちよ

十咎ももこ



となるとみふゆと知り合いなのもあまり必要ないかもしれないね…

というのも今回のプレイでは中盤以降に一時的に翼、もしくはマジウス入りしようと考えていたのですが、通常翼に入るにはみふゆに取り合ってもらわなければならないですね。

ただし灯花とねむと知り合いになっていて尚且つ信頼度、好感度が非常に高い場合、翼ではなく、直接マジウスへの勧誘が入る場合があるんですよ。

勿論、翼よりもマジウスの方がかなり自由が利くので出来ればそちらの方がいいです。

がしかし、好感度や信頼度が微妙だと後々面倒なイベントが発生する可能性があります。

中にはマジウス総出で殺しにかかって来られた方もいるようなのでそんな展開にさせない為に好感度と信頼度を全力で上げにいかねばなりません。

少々面倒ですが構いません。続行します。

それよりも重要なのは環姉妹です。

この2人は下手に接触しすぎるとういやいろはの願いの内容が変わったり、そもそも

魔法少女にならなくて本編が開始されなかったり、逆に全く接触しなくてもダメだったり、とまあ、初期交友関係に在るとにかく面倒臭い人物です。  
しかしもう既に決められてしまった事ですのでどうしようもありません。運命を受  
け入れましょう。(諦観)

あとは持ち物の確認をば。

持ち物

- ▶ グリーフシード×3
- あコンバットナイフ+10×1
- あ手帳×1
- あスマホ×1
- あコーヒーパウダー×3
- あコーヒー(残20%)×1
- あホワイトチョコレート×5

とりあえず<sup>グリーフシード</sup>G Sがあつたので良かったです。

ノーマルの場合は確定で入っているので良いですが、ハードだとひとつも持っていない場合があるんですよね。

次にコンバットナイフですがなんでこんな物が少女の持ち物にあるんでしょうか。  
(戦慄)

普通に考えて攻撃用だと思いますがそれなら魔法少女の武器を使えば良いと思うので謎ですね…

ちなみに+10は強化率です。物理武器の場合は魔法で強化することができます。10も上げれば魔法少女の武器と遜色ない強さになります。

そして手帳ですが、これは数日間の予定が書かれていますね。情報を得るために見てください。

…何も書かれてません。(困惑) えっなんで? (疑問)

と思つたら予定ではありませんが何か書かれています。

これは…どうやら記録と日誌…後は絵のようです。

これは学者特質とアーティスト特質の影響ですね。

まあ今は見る必要も無いですし一旦スルーして後で見ましょう。



そしてスマホの連絡先ですが： ちゃんと知り合い全員分の連絡先がありますね。  
あ、あとスマホに予定が書かれていました。  
何々…？

” 明日、鶴乃への修行がある ”  
” しあさって 明後日にいろはと会う約束がある ”

なるほど。リンネは既に鶴乃と師弟関係のようですね。

ならば今回は鶴乃を利用していきましよう。(下衆)

鶴乃との修行イベントですがこれは鶴乃の信頼度がある程度ないと発生してくれ  
ません。なのでこの時点で鶴野の信頼度が保証されました。

そしていろはと会う約束もあるみたいですね。

別に行かない理由も無いですし、ういたちとの関係等も知れるのでいい機会です。

という事で一通りの確認が終わったので調整屋に行つてステ振りイベント確認を  
しにイクゾー！ デッデッデデデ (カーン)

といきたいところですが今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## part. 2 始まり

今日の曜日を忘れてた実況プレイ、はーじまーるよー。

という訳で前回の続きからです。

調整屋に行くところで前回は終わりましたが、どうやら今日は木曜日のようなので。学校へ行かないといけませんでした。

という事で学校へイクゾー！デッデッデデデデ（カーン）

つと、移動中に魔女とエンカウトしました。

リンネの強さを確かめるいい機会です。パパッと相手をしましょう。

それでは魔法少女に変身をば…

ふむ、どうやら武器はSMGサブマシンガンのようです。装弾数は50発、発射レートは… おお、か

なり早いですね。SMGなんだから当たり前だろ！と思うかもしれませんが一部には  
LライトマシンガンMG並のレートのSMGもあるので今回は当たりです。

”魔法少女なのに銃で戦うのか…（困惑）”と想った兄貴姉貴もいるかもしれませんが、中には893や米軍基地から実銃を盗んで戦っている魔法少女もいるんですよ…

そして衣装は…黒色のコート？のような服で、蝶ネクタイがついていますね。

そして下は黒に近い赤色のロングスカートですね。

軍服？っぽい雰囲気もします。

一言で表すと「ゴスロリ軍服ワンピース」って感じでしょうか？

SGは首元の蝶ネクタイの結び目に付いていますね。守りやすい位置なので良いでしょう。

色は髪と同じ白のようですね。リンネの中身とは正対な色な気がしますますがまあ穢れがわかりやすいので良いでしょう。

それにしても武器が銃という事はあのコンバットナイフは近づかれた時の近接攻撃用のようですね。

それじゃあディスクアクセル、ブラスト、チャージの3種類があり、戦闘中に切り替える事でディスクに対応した効果を得る。はブラストブラストセット効果：攻撃力u

p、mp獲得量down、Cゲージチャージ量downをセットしたら、魔女の顔面に鉛玉をパーン！ひるんだ所をナイフでザシユ！

終わりました。チュートリアルの魔法というのもあつてすぐに倒せましたね。

そのあとはGSを回収し、何事も無く学校に着きました。

とりあえずまともに授業を受けます。出席しないと評判が下がる。更に補習を受けさせられる事もあるので素直に受けた方がいい。

が、暇なので昼休みまでスキップです。

そしたら鶴乃ともここを呼んで食事を共にしましょう。

理由はもちろん関係性を知ることです。

それでは2人を呼びに行きましょう。

「あつ、リンネー！」

いました。鶴乃です。どうやらあちらも探しに来ていたようですね。

おうどうした？何かあつたか？

「いや、リンネとご飯食べようと思つたんだ！」

あ、いいつすよ。(快諾)

それじゃももこも誘ってもいいっすかね？

「うん、良いよ！」

という事でももこも誘ってベンチで昼食です。

「それにしても、リンネと一緒に食事なんて珍しいな。」

「わたしが誘ったんだ！一緒にご飯食べようって！」

なるほど。どうやらリンネはあまり自分から人と食事をしないタイプのようなようです。ただ今回は鶴乃に誘われたから食事をしてる感じですね。

という事は自分から食事に誘ったら性格のせいでSGが濁っていた可能性が微塵存……？

「そういえば、鶴乃、確か明日やちよさんとの修行があるんだよね？でもやちよさんも忙しいだろうし、あんまり手間かけさせないようにしてやれよ？」

「そうそう！それなんだけど、やちよししょーの代わりにリンネが明日、わたしの事を修行してくれるんだ！」

「リンネが?!……いつの間にそんな事を？」

どうやら皆にはこの事は伝えてないようですね……

しかも代わりについてことは、多分やちよさんに押し付けられた感じですねクオレハ……

「でも、鶴乃の相手って大丈夫なのか？わかってると思うけど、鶴乃は結構強いぞ？」

「そう？でも、前戦った時はリンネに触ることも出来なかったんだ。」

「… まあ、お前も結構強いもんな。」

前、というのは決闘少女の時の事ですかね？

それとやはり思っていた通りリンネは結構強い方なようです。

とりあえず、この様子を見る限り、交友はなんの問題もなさそうですね。

それじゃあ、あとは適当に好感度を上げつつキリの良い所で切り上げましょう。

その後学校を終えて、レズ風俗調整屋の事へ向かっている最中です。

よし、着きましたね。

オツスみましたさん！調子はどうだい！

「いらっしやうい、調整屋にようこそ。」

ここ、「神浜ミレナ座」は、既に廃墟となった元映画館ですが、今はみたままさんがここで調整屋を開いてGSやお金と引き換えに魔法少女の強化をしてくれています。

初回はみたままさんによるチュートリアルが入りますが、当然スキップです。

そしたら先程取得した経験値を使ってレベルアップします。

そしたらボーナスとして追加で幾らかステータスを割り振れるので魔力を強化します。

前回話した通り、幻錯の固有魔法は消費魔力が多いです。その為、魔力を上げておかないとすぐに魔女化します。(1敗)

だから、魔力を上げておく必要があるんですね。(メガトン構文)

それじゃあステ振りが終わったらみたまさんに最近の神浜についてを聞きましょう。

みたまさん！最近の神浜はどうだい！

「そうねえ：。少し前までは皆ピリピリしてたけど、今はそれも無くなって平和な感じね。」

このメッセージが出るということはもう既に「呼び水となりて綻び」が終わっている可能性が高いですね。

イベントクリアによる追加経験値は貰えないですが、このイベントに下手に介入して仁義なき神浜が永遠に続くよりは全然良いです。

それじゃやる事も無いのでここを出しましょう。



それでは次に水徳商店街へと向かいます。

移動中に理由を解説します。

理由はただ一つ、エミリーの相談所です。

あそこには様々な魔法少女がやってきます。そのため、いろんな魔法少女と知り合うことができます。

そして今回のお目当ては、組長こと常磐ななかさんです。

組長は後のななか組神戸市指定暴力団ななか組（大嘘）のリーダーなのですが、今回は皇帝エンドを見る為に、ななか組を従えなければなりません。

しかし、ここで気をつけたいのが、組長と直接あつてはなりません。直接あつてしまうと、組長の「敵を見極める力」でリンネの数々の悪行がバレて敵対してしまう可能性があります。

そうなってしまうともう洗脳して無理やり服従させるのも厳しくなってくるので壊させるしか方法が無くなります。

しかも壊滅させた事がバレると他のキャラや組織も敵対してしまいますし、そもそも後のワルプルギス戦の戦力が少なくなってしまうので、なんとしても避けなければなり

ません。

しかし、組長の事を知っている場合、後のななか組の結成やメンバーの情報を入手することができるようになります。

そしたら後は簡単です。

適当にメンバーの信頼度を上げていけば、自然と組長の信頼度も上がって行くので、ある程度上がった後に、組長のSAN値を激減させる何かを起こせばもう終わりです。

という事で商店街に着きましたが、まだ相談所はできていない様です。ねクオレア：：  
まあ想定内です。

できるまで商店街に通い続けるだけです。  
それではやる事は無いので帰宅して眠りましょう。

おやすみ！

おはよう！（元気な挨拶）

今日は鶴乃との修行があります。

学校が終わったら早速やりましょう。

木曜日のお昼、私はリンネとももことお昼を共にしていた。

理由はもちろん一緒にご飯を食べるため。

私がリンネを誘ったら、「構わないわよ。」と快諾してくれた。

その時にリンネが「それならももこも誘っていい？」って言ったから、私は良いよと答え、3人で昼食を食べていた。

「それにしても、リンネと一緒に食事なんて珍しいな。」

「私が誘ったんだ！一緒にご飯食べようって！」

リンネはいつも、私が誘うと良いよと快諾してくれる。

ただ、いつも自分から誘うことはあまり無かった。だから、ももこを誘っていい？って聞かれた時は、内心少し驚いた。

何か、話したいことがあったのかな？そう思っていたけど、特にそういう雰囲気は感

じられない。

「そういえば、鶴乃、確か明日やちよさんとの修行があるんだよな？でもやちよさんも忙しいだろうし、あんまり手間かけさせないようにしてやれよ？」

「そうそう！それなんだけど、やちよししよーの代わりにリンネが明日、わたしの事を修行してくれるんだ！」

「リンネが?!… いつの間にそんな事を？」

そんな驚きの声に対してリンネは、

「そういえばまだ誰にも言っていなかったわね…」

と冷静に答える。

「でも、鶴乃の相手って大丈夫なのか？わかってると思うけど、鶴乃は結構強いぞ？」

そう言って褒めてくれた事は内心嬉しかった。でも…

「そう？でも、前戦った時はリンネに触ることも出来なかったんだ…」

それ以上に、リンネは強かった。だから私は、リンネが代わりにやってくれるって聞いた時、嬉しかった。

あんなにも強い人に修行して貰えたら、きつと本当に最強の魔法少女にだってなれるかもしれないって思ったのもあるけど、それ以上に私はリンネにあの時から憧れて、それと同時にいつか絶対リベンジしたいって思ってたから。

「… まあ、お前も結構強いもんな…」

「そうかしら？ただ経験が長いから強いだけだと思っていたんだけれど。」

「そんな事無いって！というかりんネより2年長くやってるやちよさんからも、冗談抜きで、神浜最強の魔法少女になるかもしれないって言われてただろ？」

「あれ、ただのお世辞だと思っっていたんだけれど。」

「いや、あれは本気の言い方だったよ…」

そんな話をしながら、私達はお昼を過ぎした…

そして翌日、ついにその日が来た。

「えっと… それじゃあまずは普通に戦ってみましょう。それで、動きを見るから。」

「わかった！それじゃあ行くよー！」

そうしてりんネによる修行がはじまった。

でもやつぱり、今回もりんネに手も足も出なくて、そのまま負けてしまった。

「負けたー！」

「… そうね… 鶴乃は猪突猛進なタイプだから、魔法少女が相手になると動きが読まれやすいのよ。」

「うーん、じゃあどういふふうに動けば……」

「まず、相手の動きを読むことが大事ね。そうすれば、大分変わると思うから。」

そうしてアドバイスを貰ったあと、それを意識して戦ってみたら、ついにリンネに攻撃を当てることができた。まあ、防がれちゃって、そのまま負けたんだけど……

「リンネはやっぱり強いね！」

「でも、あなたも中々だと思っわ。こうやってひとつ教えただけで動きが格段に良くなっただし。」

そうやって褒めてくれた。

その後も私達の修行は続き、すっかり日も落ちかけた頃、

「そろそろいい時間だし、終わりにしましょう？ 私も疲れちゃったし。」

そうは言っているが、リンネに疲れの色は全く見えない。きっと私を氣遣つてのことなんだろう。ならばお言葉に甘えて解散することにする。

「わかった！今日はありがとう！それじゃあ、また明日学校で！」

「……明日は土曜日よ？学校は休み。」

…… そういえばそうだった。すっかり忘れてしまっていた。

「それと、はい、これ。お腹空いたでしょ？」

そう言つてリンネは私にホワイトチョコプレートを差し出してきた。

「ええ!? いいよそんな! 元々私がやりたいって言ってたことだし。」

「いいのよ、別に。それにはまだ沢山あるんだし、1つぐらい。」

そう言ってきたので、私はそれを受け取った。袋をよく見てみると、結構高いやつだった。

「これ、結構高いやつじゃない? 本当によいの?」

「いいのよ。それとも嫌い? なら返して。」

「いや、そんな事ないよ!」

「冗談よ。それじゃあ、私はそろそろ帰るから。気をつけてね。」

最後に笑顔でそう言うと、そのまま帰ってしまった。

．．． ああ、リンネは本当に優しい人だ。きつとリンネにも都合があるのに、こんなに修行に付き合ってくれて、しかも私にチョコまでくれて。それに最後まで、一切不満を漏らすことも無く、真剣にやってくれて。

その時、私はあの人を守りたいと思った。それが何でかは分からない。その優しさに影響されたのかも知れないし、別の理由があるのかもしれない。

それでも、その時私はリンネを絶対に守るって、その為にいち早く、誰にも負けない最強の魔法少女になるって決めたのだった。

強かった。(小並感)

いくらイベント補正で回避がしやすくなっているとは言え、途中から明らかに動きが変わってきたのでビビりました。

それと、鶴乃にチョコをあげた時、高いやつとか言われてましたけど、それを大量に保管してるリンネの所持金気になる…気にならない？

とりあえず家に帰ったら確認しましょう。

到着したので確認してみましよう。

(所持金確認中…)

ファ!?なんだこの金額!?(驚愕)

これは相当な金持ちの家に生まれたようですね…



それに加えて親の遺産も十で所持金がとんでもない事になってますね。まあ、バイトで金稼ぎなどをしなくても良いのでこれはありがたいです。

という訳で翌日です。

今日も商店街を確認していきましょう。

何も無かった。

まあおそらくこの調子じゃあ相談所は当分先でしょう。気長に待ちます。

それじゃあやることも無いので今日は魔女狩りをしてGSを貯めたりLVを上げたりしましょう。それではその様子を16倍速で流していきます。

倍速中に、どうやってマギウスを従属させるかを話したいと思いm

何で止める必要があるんですか（困惑）

どうやら電話がかかってきたようです。

誰でしょうか？

アリナ・グレイ

は？

…は？（2回目）

え、ちよ、ちよちよちよつと待つてください！待って！助けて！待つてくださいお願いします！うあああああ!!（絶望）

落ち着きました。

ていうかアリナから電話くるって相当好感度高くないと無いはずなんですけど…とりあえず出ましょう。

『遅いんですケド。』

いや、ちよつと立て込んで…（大嘘）

『まあいいケド。今予定空いてる？話したいことあるんですケド。』

全然いいですけど、どうしたんです？

『アリナのfantasticなartを描くのに行き詰まって、力を貸して欲しいワケ。』

あ、いいっすよ（恐怖）

『本当!?それじゃあ今すぐにこっちへ来て欲しいんですケド!』  
わかりました。（恐縮）

…  
通話が切れました。

なんだこの展開!?(驚愕)

あー、でもなんか聞いた事がある気がします。

確かアリナとの信頼度、好感度が最大近い場合こんな感じのイベントが発生するって事。

通常は滅多に見れないので完全に忘れてましたねクオレハ…

という事で急遽アリナとの予定が入ったところで今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## Part. 3 好感度のガバ

何故かアリナに呼び出される事になった実況プレイ、はーじまーるよー。

という訳で前回の続きです。

今はアリナに言われた待ち合わせ場所へ向かってる最中です。

というかアリナにアイデアを分けて欲しいとか言われるって一体リンネは過去に何をやらかしたんでしょかね…？

知つての通りアリナ・グレイは神浜の天才アーツイストです。ですが彼女は「生と死」という非常にアブナイテーマを元に絵を書いています。そのため半年後に魔法少女になった際に、気に入った魔法少女をS A T U G A Iして、自身のアーツにするとかいうとんでもないやつになります。

その標的となるのはプレイヤーも例外では無く、目をつけられると十中八九毎晩襲われる事になります。

その為数々のプレイヤーから恐れられているのですが、それを回避する方法がいくつ  
かありまして、それが、

① 標的を別の人に逸らし続ける

② アリナのアートを理解する

③ 調教する

④ 滅茶苦茶仲良くなる

の4つです。

①はまず無理です。1、2回程度なら行けるかもしれませんが、ずっととなるとさすがにキツくなってきます。

②は今回のプレイでやろうとしていた事です。…が、好感度信頼度ガバが発覚したので変更します。

③は②が失敗した時用です。アリナに対して拷問等をしてリンネへの恐怖心を芽生えさせます。

④は普通は無理です。たった半年でアリナの好感度信頼度はそこまで上げることは出来ません。それこそ、幼少期から知り合っているなんてことがない限り。

ええ、そうです。つまりリンネはアリナと昔からの知り合い、それこそ親友のような関係になっているのかも知れません。

一体どんな人生を送ったらそんな運命を辿れるんだ……？（恐怖）

経歴読みたい……読みたくない？

ちなみに今回のプレイでは経歴は縛っています。ロールプレイをするならちゃんとした方が良いですが、普通にプレイするなら縛っている人も多いです。

何故かと言うと主人公の魔法少女ストーリーで説明されていくからです。

これは経歴に書いてあることを長々と壮大に語っているだけなので、経歴を見ている人からすると、もうすでに知ってるんだよなあ……ってなって面白くなるのでそのためです。

まあ経歴から消されてる出来事もよくありますが。（18敗）

そんなこんなで待ち合わせ場所に着きました。

もう既にアリナは到着していましたね。

おう待ったか？（氣遣い）

「アリナも今着いたばっかなワケ。」

はい、ここで不機嫌な様子を見せないということは多分好感度は大丈夫でしょう。如  
何せん情報が少ないので憶測になってしまいます。

「そんな事よりさっさと本題に入るワケ！この絵を見て欲しいんだケド…」  
いい絵ですね（素人並感）

とうかアリナの絵にしては狂気が全然ない気がします。

「リンネ的にはそうかもしれないケド、アリナ的にはB A Dなワケ！何かあと一つ加え  
れば、アリナの a r t は P e o p l e を e x c i t e させるような作品になるハズなん  
ですケド…」

つまりはその、あと一つが中々思いつかないからリンネに助けを求めた、という事  
ですね。

しかし私は生憎絵の知識は0に等しく、そんな私がアドバイスをしても跳ね除けられ  
るでしょう。

そこで特質アーティストを発動！これで自動的にいい感じのアドバイスをしてくれ  
る筈です。

”そうね…じゃあ、この辺に針葉樹を生やしみて、その枝とか葉、後は周りに血を垂

らすといい感じになると思う。”

ヒエツ：…リンネも中々ヤバイ感性をお持ちのようで…

そら（こんなヤバイ奴と芸術面でも仲良くなれる奴が）そう（普通の感性を持つてる訳無い）よ。

これはマスクデータの「狂気」の値が結構高そうですねクオレハ…

「ふーん…ちよつと描いてみるから少し待ってほしいんですケド。」

あ、どうぞ。いくらでも待ってやるよ！（寛容）

「…出来た！」

もうですか。

思いの外早かったですね。まあこれは多分ゲームの都合でしょう。

では早速見てみましょう。



「フア!?なんだこの絵はたまげたなあ……」

「ついさつきまで普通の絵だった物が一瞬で狂気と化しましたね……」

「まあそれでもいつもの絵よりかはマシな気もします。」

「しかしこんな人を一般魔法少女が見たらS A N値チエック不可避ですねこれは……」

「しかしリンネの鋼の精神はこんな物ではびくともしません。その証拠にS Gも全く濁っていません。」

「これって……勲章ですよ？」

「最高！生の象徴である針葉樹と、死の象徴である血……それを同時に表すとか、アリナのテーマにピッタリで最高なんですケド！」

「うわ、抱きつかれました。かわいい。(ノンケ)」

「それにしてもアリナにここまで懐かれるなんて事あるんですね……」

「普段のイメージからは全く想像出来ませんが……」

「ただこれによる影響が未知数なので後のガバに繋がらないかが心配ですね。」

「……そうだ！明日って予定空いてるワケ？」

「明日ですか。明日は生憎いろはとの予定がありますね。」

「そう……それってアリナが行って行くってOK良なワケ？」

「ええ……(困惑)」

(付いて来るとか) ヤメロオ! (建前) ヤメロオ! (本音)

ぶっちゃけこの時点で環姉妹と接触させた時の本編への影響が未知数なのでやめて欲しいです。

なのでここは丁重にお断りします。

「それって、アリナが邪魔だって言う風に聞こえるんですケド。」

へえ!?

アリナ先輩! 何言ってるんすか、やめてくださいよ本当に!

「<sup>冗談</sup>Jokeなんですケド。それに、リンネがアリナを邪険に扱おうとしないのは知っているし、そんなに焦らないで欲しいワケ。」

あつそつかあ。(安堵)

ここでアリナとの関係にヒビが入るとリセット不可避でした。

それにしても、”邪険に扱わないのは知ってる”ですか…

なんか不穏ですね。気にしすぎなだけかもしれないですけど。

「それじゃあアリナは他にもする事があるから、バイバイ。あと、ありがと。」

スウウウウ、ハアアアアア…

怖かった。(小並感)

それじゃあ、今度こそ本当に1.6倍速で魔女狩りの様子を見お届けします。しかし、その間皆さん暇でしょう。なので……

み な さ ま の た め に い

前回話せなかったマジウスを従属させる方法を話していきます。

皆さんの想像通り、マジウスを従属させるのはかなり大変です。

下手に接触すればウワサで洗脳されたり（9敗）、アリナのアートのにされたり（15敗）、仲間を人質に取られたり（3敗）、普通に頃されたり（29敗）、とまあ、中々厄介です。

そんなマジウスですが割と色んな従属方法があります。平和的な物から中々恐ろしい物まで、色々あります。

そんな中今回私が選んだのは恐怖で支配する方法です。

まあ恐怖と言っても色々あって、拷問してわからせたり、圧倒的力の差を見せつけて、

コイツらに関わつたらヤバいと本能的に悟らせたり等がありますが、今回使うのは後者の方法です。

まあマジウスをそこまで追い込むのは中々キツイですがそこはプレイヤーの腕の見せ所さん!?!です。

丁度良いタイミングで狩りも終わつたようですよ、明日に備えて早めに就寝しましょう。

翌日です。

本日はいろいろとの約束があります。

準備を終えたら向かいますよう。

「リンネさーん!」

という事で先に待ち合わせ場所でした。

この声はいろはのようです。

笑顔で手を振りながらこつちに向かって来ています。

これは好感度が高い証拠です。

というのもこの頃のいろははかなりのコミュ障なので、こうやって手を振って来てくれるのは珍しいです。

「ごめんなさい、待たせちゃいました？」

(全然待つて) ないです。(大嘘)

本当はリアル時間で10分ぐらい待ちました。

が許します。

というかそもそもいろいろは待ち合わせに遅れてなどいません。自分が来るのが早すぎただけです。

今回のこのイベントですが、行く場所はうい達の入院している病院です。

お見舞いという事です。

ういに会うということは十中八九灯火とねむにも会えます。

この2人との関係性も知れるのでいい機会です。

もし違ってもいろはの好感度が上げられるのでいいでしょう。

病院に入りました。

それじゃあ適当な会話でもしながら病室に向かいましょう。

「あっリンネさん！」

「久しぶりだねー。」

「今日はリンネも一緒なのかい？」

病室に入ったたら3人がよってきました。現状この2人に悪態をつく理由は無いので仲良くします。

その後は普通に話をしたりして、好感度信頼度を上げました。もっと上げなきゃ（使命感）

気になるイベントも特に無かったので、本当にお見舞いだけで済みました。

それじゃあ後は魔女狩りの様子を垂れ流しつつ今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。



金曜日の夕方、私はある場所の風景画を描いていた。

別にそれにはなんの意味も無かったし、その絵も暇潰しに描いていたもので、特別素晴らしいものができるという気持ちで描いていたものでは無かった。

のだが…

予想以上にいい物が出来てしまった。

これをただの暇潰しで描いた落書きで済ませるのは勿体無いと思った私は、その絵に色々書き足していき、落書きから私の作品へと作り変えていく。

しかし、何かが足りない。

私の作品には、もっと刺激的な何かが必要だ。それが無ければ、ただの駄作だ。しかし困った事に、肝心のその何かが一切出てこない。

一旦寝て頭を整理すれば思いつくだろうかと、根拠の無い事を頭に浮かべ、その日は一旦やめることにした。



そして翌日。

薄々感ずいてはいたが、やはり何も思いつかない。

もういつその事やめにしてしまおうかと思った時、ある名前が思い浮かぶ。

”結川リンネ”。

リンネなら、何かいいアイデアを思いつくかもしれない。

そう思った私は、早速電話をかける。

7コール目にして、ようやく出る。

「遅いんですケド。」

そんな私の苛立ちの声にリンネは、

「ごめんなさい、少し立て込んで。」

まあ、これは恐らく嘘だろう。

リンネはいつも遅れた時にこう言う。

何より声が若干震えている。

しかし詮索はしない。彼女にも彼女なりの理由があるんだろう。

「まあいいケド。今予定空いてる？話したいことあるワケ。」

その質問にリンネは、

「ええ。構わないわよ。丁度今日は予定が無くて暇だったし。」

と答える。

後は事情を説明し、来てもらった。

早速絵を見せてみる。

「そうね…。このままでもとてもいい絵になると思うんだけど…。」

いつもそうだ。リンネはまず私の絵を褒めてくれる。どんな絵であっても、貶すことは無かった。

その言葉を何故か私はお世辞などでは無く、心からの言葉だと思っていた。でも、あとから気づいた。これがどうしてなのかって。

「リンネ的にはそうかもしれないケド、アリナ的にはB A Dダメダメなワケ！何かあと一つ加えれば、アリナのartはP e o p l e皆をe x c i t e興番させるような作品になるハズなんですケド…。」

「そうね…。じゃあ、この辺に針葉樹を生やしみて、その枝とか葉、後は周りに血を垂ら

す」といい感じになると思う。」

そのアドバイスを受けて、私は早速描いてみた。するととても素晴らしい作品が、私の目の前に現れていた。

その出来に私は思わずリンネに抱きついてしまう。

こうしていると、何故だかとても幸せな気分になる。ずっとこうしていたいと思う。だけどそれが何でなのかは、その時は解らなかつた。

私は少しして、リンネから離れる。

「…… そうだ！明日って予定空いてるワケ？」

そう聞くとリンネは申し訳なきように答える。

「ごめんなさい。明日は生憎友達との予定があるの。」

ならそれに私もついて行っていいかと聞くと、

「…… ごめんなさい。出来れば2人だけの方がいいの。」

「それって、アリナが邪魔だって言う風に聞こえるんですケド。」

なんて意地悪に答えてみる。

するとリンネは慌てた様子で違うという。

冗談だつて伝えると、リンネは安堵する。

私はこの後予定があるからと言い、リンネと別れる。

帰りながら私は、その友達について考えていた。一体どんな人なんだろうか。それに2人だけの方が良いって……

私はその言葉に少し嫉妬していた。

……嫉妬？ 何故？

……まあ、その時わからなかったのも無理は無い。だつて私は今まで……

今まで、  
恋というものを経験した事が無かったのだから。

## part. 4 衝撃の邂逅

組長を見守る実況プレイ、はーじまーるよー。

という事で前回の続きからです。

前回結構な量の魔女を倒してGSと経験値がたまつたので早速調整屋にイクゾー！  
デッデッデデデデ

「いらつしゃい。」

おつすみましたさん！その手に持つてるこの世の物とは思えない謎の物体はなんだい  
？

「ケーキを作ってみたのよ。おひとついかが？」

（いら）ないです。

そんな食べたらSAN値がごっそり持つていかれそうな物食べれるわけないだろ！  
いい加減にしろ！

そんな事よりさっさと調整をしてもらいましょう。

レベルを上げたら今回は魔力と速力に7：3ぐらいの割合でステ振りを行います。

速力は全ての行動の素早さに影響します。なので上げておくと快適にプレイが出来ます。

それと、視聴者様から「組長を探すなら相談所よりMTMみたまさんに聞いた方が早いゾ」というコメントを貰いました。という事なので、最近気になる魔法少女がいなかを聞いてみます。

「そうねえ…。そういえば赤髪の娘が、この辺にいる強い魔法少女について聞いてきたわね。」

はい、これは100%組長こと「常盤ななか」のことを言っています。

強い魔法少女を探しているとの事ですが、この様子だとななか組は結成されているか微妙な所ですね。

すいませーん、その子って、なんて名前ですか？

「確か、「常盤ななか」って娘だったわね。」

はい、これで完璧です。

これで組長の情報を得る事が出来た為、ななか組関連の主人公へのフラグがたったので、組長やその他メンバーの情報が少しずつ入ってくるようになります。

これで後々ななか組の結成がどうかの情報も入ってくることでしよう。

それじゃああととは用もないのでサラダバー！

あつそうだ（唐突）

これだけ魔女を倒しているのに全然スキルを獲得している様子が無いことに皆さんお気づきでしょうか？

その理由ですが、恐らくリンネは「経験値入手により取得できる」全てのスキルを手していると思われます。

別段驚くことはありません。なんせ彼女の魔法少女歴は脅威の4年です。

それだけ活動していれば、全てのスキルを習得していても何らおかしくはありません。

せつかくなので今見てみましょう。

え？なんでゲーム開始時に確認しなかったのかって？



忘れてました(ガバ)

…ではスキルを見てみましょう。

——スキル一覧——

——【基本スキル】——

跳躍強化LvⅢ(Max) — ジャンプ力強化 — 足から着地した場合落下ダメージ無効  
(LvⅢ)

魔女化抑制LvⅠ(Max) — SGの穢れが最大値に達した際に魔女化を一定時間回避する

痛覚麻痺LvⅡ(Max) — ダメージ時怯み無効 — 部位切断時スタン無効 (LvⅡ)

自己再生LvⅣ(Max) — 魔力を消費して体力を回復する — 部位切断回復 (LvⅢ)

— 移動中使用可 (LvⅣ)

——【戦闘スキル】——

処刑LvⅡ(Max) — 速攻キル (Cゲージ) コネクトや処刑を発動する際に使用する

ゲージ。攻撃したりダメージを受けたりすると増加する。チャージディスプレイで増加量  
上昇消費）―追加入力時SG破壊可（LvII）

ステルスLvIII（Max）―ステルス行動可能―ステルススキル可（LvII）―尋問可  
（ステルス時）（LvIII）

カウンターLvI（Max）―敵攻撃時ボタン入力でカウンター

具現LvI（Max）―武器を複数出現させる

――【固有スキル】――

アタッチメントLvV（Max）―銃にmodを取り付け可能（魔法製）

スピードローダーLvIII（Max）―リロード速度上昇―ユニークリロード（LvIII）

チャージショットLvIII（Max）―単発射撃時チャージ可能

フォーカスLvIII（Max）―エイム時スロー切り替え可（フォーカス消費）

無機LvI（Max）―無機物に対し幻錯発動可

自己催眠LvI（Max）―自身に対して幻錯発動可

クツソ多いですね…

全部解説するのは面倒なのでおいおい解説していきます。

ただ痛覚麻痺や魔女化抑制に関しては魔法少女の真実を知っていない場合取得出来

ないのでつまりリンネは既に全てを知っている事になります。

この場合性格に善人の性質を持つ物があつた場合自分から魔法少女になるように勧める事が出来なくなります。

今回だとお人好しがそれにあたりますが、合理的によつて、それが表面上になつているので、普通に勧める事も出来ず。

ただしこの場合、周囲に魔女化等を知つてる人物がいた場合、「私はそこまで勧めないけど、あなたがどうしてもなりたいて言うんだつたら否定はしない」という感じの勧め方になります。

それじゃあ後はやる事も無いので家帰つて寝ましょう。

つとその前に…

絵でも描いてみましょうか。

特質がアーティストなので、どんな絵が得意なのかとか、あと単純に長期間絵を描かないことによるストレスの回避です。

絵を描く方法はデジタルとアナログの2種類がありますが、今回はアナログにします。

デジタルで描いた場合はSNS等、ネット上に上げることも出来て、評価が高い場合  
絵師としての仕事が無い込んだりしてきてお金が増えるのですが、如何せんデジタルで  
高品質の絵を描くには、ペンタブと高性能なPCが…って、リンネどっちも持ってま  
すね。

てか何だこのPCのスペック!?

どうやらゲーミングPCの様です。リンネは意外とゲームもやるんでしょうか？

というかこんなに高性能な機材を持つてるとか本当にリンネは何者なんですかね？

まあいいです。今回はアナログで書きます。

得意なジャンルは…

おや、意外にもアニメ系の絵が得意なようです。てつきりアリナにアドバイスをする  
ぐらいですからああいう系の絵が得意なのかと思ってみました。

まああの人も御園かりんと言う少女漫画を描いてる後輩と仲が良いのでそこまで意  
外でも無い…のですかね？

ゲーム内で数時間後、絵が完成しました。

普通に上手いですね。

商用でも行けるレベルの上手さです。

が、当の本人の評価は”普通”だそうです。

私もこんな絵を普通に描けるようになりたい。（画伯並感）

もう一方の学者特質は気にしなくていいの？という声が聞こえてきそうですが、ご安心ください。

この特質の根本は、新しいことを知りたい、もつと多くの事を知りたい、という欲求から来ています。

なので学校に行つてればその欲求は大抵の場合満たされる筈です。  
なので特に何かする必要はありません。

それじゃあ寝ましょう。明日は月曜です。

おはようございます（礼儀正しい挨拶）  
今日も準備をして学校へ行きましょー。

なんてやってたらいくらたつても動画が進まず視聴者も飽きてしまいます。というわけで進展があるまでカットだ！（視聴者を気遣う投稿者の鑑）

神浜ミレナ座——その廃墟を利用して営まれている、調整屋に私は来ていた。

ここを営んでいる八雲みたまという人……まあ少し……いや、かなりおかしな人だとは思いますが、あの調整の技術……あれは確かに目を見張るものがあった。

調整をする前とした後では、魔女を倒す速さが段違いだった。これは便利だと思い、私はここによく足を運ぶようになった。それもこれも全て、復讐を成し遂げる為。

その為にも、もつと多くの仲間を集めたい所だ。

しかし、今のところアテが無いのが現状。

深月フェリシア：．．あの人が戦力にならなかつたのが惜しい。協調性があれば、心強い戦力になつただろうに、残念だ。

しかし過ぎたことを悔やんだところで、どうしようも無い。

あの人とは縁が無かつた、それだけの事だ。

そう言えば、みたまさんは本来の調整の仕事の他にも、共に戦う魔法少女の紹介もしているといっていたか。

ならば今度聞いてみるのも手かもしれない。覚えておこう。



みたまさんに紹介された人物……それは「結川リンネ」と言う魔法少女だった。

みたまさん曰く、神浜で活動している魔法少女の中では2番目に長い人物であるらしく、その実力も確かな物らしい。

しかも神浜では珍しく基本的にチームを組まずにソロで活動している事が多いと言  
う。

しかし他の魔法少女が協力を申し込めば共に戦ってくれるらしく、魔法少女達の間では有名らしかった。

これならば私達と共に活動する事は出来ないかもしれないが、協力を仰ぐ事はできる可能性が高いと判断し、早速彼女を探していた。

しばらく探していると、人気の無い路地裏から物音が聞こえてきた。

この感じは……戦闘音だろうか？

警戒しながら音の出処へ近づいて行く。

段々と2人の話し声が聞こえてきた。

1つは元気な声。もう1つは、落ち着きのある声。

近づいて行く程に、声は鮮明に聞こえるようになる。

「とりや……!!、くらえ……!!」

「動きが見え見え。そんなんじや当たらないわよ。」

2人の姿が見えた時、声もクリアに聞こえるようになる。

この様子は……訓練か、修行か、そんな事をやっているのだろうか。

ならば関わる必要も無いだろうと思つた矢先、落ち着いた声の人に既視感を覚える。

白髪、赤い瞳、黒のコートのような服に赤いスカート、落ち着いた印象、そして軽機

関銃を扱う魔法少女…

全て、話に聞いていた結川リンネの情報と合致する。

という事は、この人が間違いないと探していた人物だろう。

ひとまず、戦いが終わったら話しかけてみる事にしよう。

「やっぱり、最初の頃と比べてかなり成長していると思うわよ？」

「えへへ、そうかな？でもやっぱりまだまだリンネには遠く及ばないし…」

「お話しているところ、失礼します。すこし時間をよろしいでしょうか？」

戦いが終わった所を見計らって登場する。

まずは自己紹介を。

「えつと…」

「構わないわよ。」

「ありがとうございます。私、常盤なかと申します。失礼ですが、そちらのお方の名

前：… 結川リンネさんでよろしいでしょうか？」

「そうだけど… どうして私の事を… もしかしてストーカー？ 悪いけど、私はノーマルだからその愛は受け取れないわよ」

そう彼女は笑いながら冗談交じりに聞く。

だが、その目は鋭い。恐らくそうやって油断させながら、相手の目的を探っているのだろう。

「いえいえ、生憎私もそう言った趣味は無いもので… さてと。冗談はこれぐらいにして、さっさと本題に入りましょう」。

その言葉を合図に、私は変身して二つの日本刀の刃先をリンネさんに向けて言う。

「私と手合わせ願えますか？」

どうしてこうなった（疑問）

いやあ、今日は普通に鶴乃と修行をしていただけなんですけどねえ、一体何がいけなかつたんでしょうかね？

それはともかく何故急にそんな事を言い出したのかを聞きましょう。

「それは戦いが終わった後にお話します。」

話してくれませんか…これだと自身を敵とみなしているかどうか判別が出来ませんねクオレハ…

組長の戦闘イベントはほぼ必ず勧誘前の腕試しなので敵とみなしている可能性は薄いですが、保険をかけておくことに越したことはないです。

まあ仕方ありません。

こうなつてしまった場合もう選択肢は実質一つだけです。

ここで戦わなかった場合組長の信頼度がだだ下がりですので…

やつてやろうじゃねえかよ　この野郎！（戦闘）

と言う訳で”常盤なか”戦です。

知つての通り組長は異常なまでの戦闘力を誇り、本気で挑まないと普通に体を殺されます。

強すぎるあまり初見で負けイベントだと思つた方も多いのでは無いのでしょうか？

しかしこのゲームに負けイベントという物は存在せず、全て勝てる仕様になっています。

組長の戦闘イベントですが、発生条件が結構厳しく、ステータスの合計値が一定以上かつゲーム開始時から一定期間内に魔女を規定数倒した場合に発生します。

この条件から察せるとおり、組長戦は上級者向けの難易度に設定されており、攻略wiki等には、持てる力の全てを持って戦えなどのまるでラスボスじみた解説がなされています。

恐ろしいですね（KONAMI）

この戦闘の勝利条件ですが、組長のHPを1割以下まで減らすか、一定時間経過するまで生き残るか勝ち目無しの状態まで持つていくかの3つです。

一見すると2、3番目の方が簡単に見えますが、逆です。

というのも戦闘時間が長引けば長引くほど攻撃が激化していく仕様だからですね。なのでこの戦闘では短期決戦を推奨します。

という事でこの戦闘では固有魔法とスキルブツパで戦います。

因みにスキルの処刑ですが、雑魚敵の場合は残り体力関係無く使用出来ませんが、ネームド魔法少女やボス戦の場合は体力を1割まで減らさないと使用できません。

（そうじゃないとゲームバランス壊れるから）ま、多少はね？

て事で開戦です！

デイスクはアクセルアクセルセット効果：mp獲得量up、速力upmp：マギアを発動する際に使用。SGの穢れとは別。をセット。

先ずは普通にSMGを撃ちます。さも当然のように銃弾を回避したり弾いたりしてきますが気にしません。

こうする事で遠距離戦は不利と判断して間合いを詰めてきます。

ただし組長がこちらにリロードが必要な事を知っていた場合リロードまで避け続けてリロードのタイミングで攻撃を仕掛けてくる為注意が必要です。(3敗)

そこですかさず幻錯を発動！今回使うのは幻覚です。

精神値の高い組長は簡単に解いてきますが、それでも一瞬隙ができます。

今回はリンネの幻覚を作って惑わせます。

「ツ！！これは！！！」

隙だらけだぜ！

「そこか！」

フアツ！？これ避けるとすげえ変態だぜ？



てか近ずかれてしまいましたね。仕方ないのでナイフで応戦します。

一瞬驚いた様な顔をしますがすぐに対応してきます。

私は接近戦で組長に勝てる気がないのでこちらから攻撃はせず、カウンターで対処します。

まあそのカウンターをカウンターされるんですけどね！

こいつ人間じゃない（直諭）

出来れば組長から距離を取りたいのですが速力が低いせいで出来ません。

魔女戦の時は気にならないのですがやっぱり魔法少女戦の時は気になりますね。

まあ後で強化を――

痛ってえ！何だこの体力の減り方!?これ2発くらっただけで死にますね。痛覚麻痺は発動しているので怯みはしませんがそれでもきついです。

これはやっぱり体力と防御力も強化しておいた方がいいかもですね。

「リンネ!!」

鶴乃が心配してくれていますが大丈夫です。

「分かった.:」

「その傷：： 本当に大丈夫なのですか？」

大丈夫つってんだルルオ!? (大嘘)

「そうですか：： なら続行と致しましょう。」

本当はヤバいですがここで負ける方が今後の展開的にヤバいです。

なんと少しでも勝ちます。

攻撃をナイフで捌きながら次の攻撃の準備をします。

次の攻撃：： それはスキル、具現を使った不意打ちです。

具現は武器を複数出現させるスキルですが、これで出現させた武器はなんと遠隔操作可能です。

そのぶん消費魔力が通常の武器より高かったり威力等が控えめになっていきますが、遠距離武器の場合はかなり扱いやすく、不意打ちや弾幕を張るのにうってつけです。

：： そろそろ頃合ですかね？それじゃあ組長の後ろに出現させた銃を乱射！

「なっ!？」

銃声に驚き振り返った組長はそのまま銃弾を捌きますが後ろが空きです。

すかさずナイフで切りつけ怯んだ所を足で押し倒しそのまま片足で踏みつけ起き上

「がれないようにした所で銃口を頭のSGに向けます。

「：： お見事です。参りました。」

やったぜ。

「という事で無事(?) 組長に勝利した所で今回はここまでです。ご視聴ありがとうございます。」

## Part. 5 創成の魔女

人気の無い路地裏に鳴り響く金属音と跳弾の音。

その音の中激しい戦いを繰り広げる少女が2人。

別に命のやり取りをしている訳では無い。

これはあくまで修行だ。

… 修行で使う武器に銃を使うのはどうなのか、という声が聞こえてきそうではあるが、別に当てるつもりは無いし第一私達は銃弾の1発や2発くらったところでどうってことも無い。

そう言えば私の使っているこのPDW<sup>ビエーディーダブリュー</sup>。モデルは恐らくSCAR<sup>スカー</sup>だろう。

尤も、これの名称は“MSAR”のようだが。

元はA<sup>アサルトライフル</sup>Rだが、魔改造してPDW… 要はSMGに似た物に変えてある。

しかし、これみたいにカスタム性が非常に高くしてPDWにもS<sup>スナイパーライフル</sup>Rにもなる様な銃で助かった。お陰で遠近両方に対応出来て非常に便利だ。

それにしても、魔法少女が銃を扱うとはこれ如何に、とは思ったが、意外にも武器として銃を扱う魔法少女は割といた。まあ、私のような実銃に近い見た目の物は少ない印

象だ。

というか弾も殆どが丸いマスケット弾の様な形のもが多く、私のような5.56mm弾等、実際の弾薬に酷似した見た目の弾を使っている人も殆ど見かけなかった。

私のようにフルカスタムされた物を使っている人もだ。

という様に、自分の脳内で自分の銃知識をひけらかしながら、私は戦っていた。

… それにしても暇だ。暇すぎる。

何せやる事が単調な攻撃を避けつつ適当な場所に弾を撃ち、それっぽいアドバイスを与える。

これをあと少なくとも30分以上は続けなければならない。

そりゃあ頭で自分の知識でもひけらかしたくもなる。

というか、1番大変なのは私の心の内を悟られていないかだ。

もし悟られでもしたら面倒だ。それこそ、鶴乃の性格的に私に迷惑だと感じたら修行をやめると言ってくるだろう。

勿論それが彼女の優しさなのはわかっている。だが、こちらとしてはそっちの方が後々面倒になるんだ。

彼女は相当に強い。まだ魔法少女になってから1年も経っていないにも関わらず、本当に”最強の魔法少女”という肩書きの片鱗が見え始めている。

まだ私達のようなベテランには遠く及ばないが、このまま強くなっていけば、本当に最強の魔法少女になってしまうだろう。

そんな奴を野放しにしておいたら、私の計画にとって邪魔になる。

ならば懐柔してしまえばいい。

そういう考えの本、私はこうやって「お人好しの結川リンネ」を演じている。

いや、もしかしたら、これが本来の私の性格なのかもしれないが。

そうして戦いはいつも通り私の勝利で終わった。

「やっぱり、最初の頃と比べてかなり強くなっていると思うわよ？」

「えへへ、そうかな？でもやっぱりまだまだリンネには遠く及ばないし…。」

”えへへ”ねえ…

やっぱり鶴乃は褒めると懐きやすい気がする。

子供か？とツツコミたくなるが現状、非常に有難いので我慢する。

…とところで、いい加減出てきてくれないかな。見られていると思うとこつちもやり難いんだけど。

なんて思ってたらこつちの気持ちも伝わったのか、赤髪の娘が登場する。

「お話しているところ、失礼します。少し時間をよろしいでしょうか？」

「えっと…」

「構わないわよ。」

私が即答すると、自己紹介を始めた。

「ありがとうございます、自己紹介を始めた。失礼ですが、そちらのお方の名

前… 結川リンネさんでよろしいでしょうか？」

常盤ななか… 調整屋で聞いた人か。

で、こつちは聞いたから知っているのは良いとして、コイツはどうして私の事を知っている？

：　まさかストーカーか!?

いやまあ、私も結構綺麗な方らしいし、それに色んな人に優しくしている（表面上はだが）から、こういう人が現れてもおかしくは無いと思つたが、まさか一番最初が女性でしかも年下とはなあ……。年下の方は知らないけど。

しかしまあ、初対面の、それもストーカーなんかと一緒に暮らそうなんて気は更々ないので、ここはお引き取り願おう。

「そうだけど……。どうして私の事を……。もしかしてストーカー？ 悪いけど、私はノーマルだからその愛は受け取れないわよ？」

出来るだけ丁寧に笑顔で言つたつもりだが、目だけ鋭くなつていた気がする。まあいいか。

「いえいえ、生憎私もそう言つた趣味は無いもので……。さてと。冗談はこれぐらいにして、さつさと本題に入りましょう。」

ストーカーじゃないらしい。じゃあなんだ？

それで本題って言うのはなんだ？

そう言おうと思つた瞬間、彼女は変身し、両手に現れた刃をこちらに向け、言う。

「私と手合わせ願えますか？」



結論から言うと、私は戦って、勝った。

無傷での勝利では無いものの、私達の体は刀で斬られたぐらいじゃあビクともしない。

痛覚なんかも私は戦闘中は常に切っているんで、自分が傷付く事に対してなんの恐怖も感じない。

それにしても、中々楽しませてもらった。  
久しぶりに本気で戦った気がする。

無論、私は彼女をマジで殺す気は無かった。

あつちはどうだか知らないけどね。

ただ、容赦無くこつちを斬った事には少し驚いた。あちらも若干しまったって顔したから、殺そうとはしてなかったんだろう。

それで：： 何でこんな事をしたのかっていうのを聞くか。まさか本当に手合わせだけしたかったって訳でも無いだろう。

「理由ですか：： そうですね。失礼ですがあなたの实力を見させて頂きました。：： 私達の中に相応しい實力を持っているかどうかを。」

「：：： と言うと？」

「是非、あなたを私達のチームにお招きしたいのです。」

成程。つまり、強力な戦力を持った人材が必要だったって訳か。

で、強力がどうかを見分けるには実際に戦ってみるのが一番って訳ね。だが、私は

何処に属するつもりも無い。よってこの勧誘は…

「申し訳無いけれど、あなたのチームに入るつもりは無いわ。」

「そうですか… なら、協力をお願いすることは出来ますでしょうか？」

「… まあ、それならいいわ。」

「ありがとうございます。でしたら、連絡先を交換するのはどうですか？」

「わかったわ。」

…  
また連絡先が増えてしまった。

次々とガバが発覚していく実況プレイ、はーじまーるよー。

という訳で前回組長相手に何とか勝利した所で終わりました。

組長に勧誘されましたが元論拒否！

ただし協力は約束して連絡先を交換したらサラダバー！

それにしても組長に勧誘されるということは敵として認識されていない説が微レ

存……？

「というのも組長の「敵を見極める力」というのはあくまで「自身にとって障害となる存在」が敵として認識されます。

なので悪事を働く者＝敵ではありません。ただし大抵の場合はそうなるのでリンネの経歴を警戒して今回はなるべく会わないようにしました。

が、どうやら今回は違うみたいですね。もしや経歴はそこまでガバっていない……？  
 (歓喜)

いやそもそも交友関係のガバがデカすぎるので結局ガバガバでした。これ以上経歴ガバがあつたら計画壊れちゃう!!

それでは傷を治したら家に帰ります。

おっと、どうやら魔女とエンカウントしたようです。うせやる？

ま、まあ多少疲労が溜まっているとはいえ一般遭遇魔女に負けるほどでは無いでしょ

う。

それでは変身して…

ん？この反応は…

「リンネ!？」

やちよさん！「七海やちよ」さんじゃないか！

知つての通り、やちよさんは西の最古参の魔法少女で、また、チームみかづき荘の現リーダーです。最古参と言う点から、彼女は西のまとめ役にもなっています。

「丁度良かった。この魔女、かなり強くて苦戦してたところなの。力を貸してくれないかしら？」

いいよ！こいよ！（了承からの挑発）

というかやちよさんが苦戦するとか一体どう言う風の吹き回し…

ん？こいつどこかで見た事あるような…

魔女の情報を見ましようか。

創成の魔女。その性質は破壊。

全てを破壊して創り変える事が目的の魔女。

この魔女は自身が作り替えたものも破壊し新たな物に作り替えるので、その作業が終わることは永遠に無い。

また、創成を邪魔する者には機嫌を悪くし、容赦ない攻撃をとばすようだ。

ウツソだろお前!?(絶望)

コイツは出会ったら死ぬ魔女top5に君臨するヤベー奴です。

その癖出現条件は特に無く、ゲーム開始時から低確率で野良湧きます。

因みにですがコイツは並大抵の魔法少女……というか、基本的にプレイヤー以外が倒す事は殆ど無いです。

まあ、ネームド魔法少女は野良湧きの魔女に殺されることは基本無いので良いのですが……

このような、プレイヤーが側にいる場合は別です。

つまりやちよさんはこのままだと死にます（デデドン）

そんな事は絶対に避けなければならないので、この状況でとる行動はただ一つ。

逃げるんだよあくしろよ（逃走）

とりあえずやちよさんに攻撃がいかないように、魔女を撃ってヘイトを自分に向けま  
す。

バンバンバン！（銃声）

明らかにこちらを向きました。

それではあとと適当に足止めをしつつ出口へ向かいます。

出でくる使い魔は処刑処刑で使用するCゲージの量は1割程しか無いので処理しま  
しょう。



というわけで無事脱出しました。

所詮は野良湧きなので境界はそこまで広くはありません。

それでは無事脱出できたので、終わり！閉廷！…以上！皆解散！

君もう帰っていいよ！

「そんな事言わずに、助けてくれたんだしお礼ぐらいはさせて。ほら、グリーンフシード。」  
ありがとナス！はあく生き返るわあ〜（GS使用）

GSはまだ使えるのでやちよさんに返しておきましょう。

それはともかくやちよさんが苦戦するとか珍しいっすね（すつとぼけ）

「あなたなら気付いてるでしょ。あの魔女：今まで戦ったどんな魔女よりも、魔力の反応が強い。つまり、それだけ強力だったってことよ。あなたが来ていなかったらどうなっていた事か：…」

これは借りを作れたのでは？

貰った借りは返すつてのが大人ってヤツだよなあ？

冗談はさておき何故苦戦したかを聞いた理由について…お話します。

先程の魔女ですが、先述の通り異常な強さを誇っており、倒すのは困難を極めます。

しかし、そういう奴は倒した時の見返りも大きいのが世の常です。

コイツは倒す事で大量の経験値が貰え、更にこの魔法の存在が他の魔法少女に伝わっていた場合プラスで信頼度が上昇します。

なので是非とも倒しておきたいのですが、ぶつちやけこれをソロで倒すのは現状無理です。

なのでやちよさんにそんな魔法放っておいたらま→ずい←ですよ！という感じの事を言えば簡単に協力してくれます。

やちよさん、そいつ放っておいたら沢山の魔法少女が逝きますよ！イクイク・・・

「そうね。あれだけ強い魔法に、魔法少女になりたての子が遭遇でもしたら、為す術もなく殺されるでしょうね・・・」

おっそうだな（適当）

それじゃあ、一緒に倒すとかどうっすかね？

「・・・わかったわ。とりあえず今日は一旦休みましょう。その間にあの魔法の魔力パターンを調べておくわ。」

りよーかいです。それでは帰宅をば。

「・・・後はみんなに警告をしておかないと・・・でもどうやって伝えようかしら・・・」

なにか独り言を喋ってますが気にしなちよと待つてなんか勝手にリンネが何か言

おうとしてるんですけど（困惑）

”私がああ魔女の絵を描いて送るわ。そうすれば伝わり易いでしょ？”

ええ……？

なんか勝手に作業を増やされてるんですけど。

まあこれぐらいは構いませんが。

「本当？ありがとう。助かるわ。それにしても……またあなたと戦えるなんてね。」

……最後なにかガバの気配がしましたがきつと気の所為だよ（震え声）

無事帰宅しました。

それでは早速絵を描いていきます。

今回はペンタブを使ってデジタルで描きます。

それでは書いている間暇なので… スキップだ！

と思いましたがせっかくなのでメニューを開いて銃のアタッチメントを確認しましょう。

銃の改造は結構重要で、スコープやマズルの変更は勿論、レーザーサイトやレシーバー、更にはトリガー等、かなり細かく変更することが可能です。

今回はSMGなので無理ですが、AR等には一部グリップ部分にグレポンやショットガンをつけられたりもしますし、改造次第でSRやPDWに変えられたりするものも存在します。

それじゃあ確認しましょう。

…ん？これSMGじゃなくてARって書かれてるんですけど。なんで？（疑問）

アッアッアッアッ！！この銃“MSAR”じゃねーか！

この銃はARですが、改造次第でPDWにもSRにもなる銃です。

今回は元からPDWに改造されていたので気づきませんでした。（ガバ）

それはともかくこの銃は大当たりです。今回運良すぎでは？（フラグ）

とりあえずアタッチメントに関しては特に制限無く全開放されているようなので後でいくつかカスタムしてクイックメニューにセットしておきます。

それでは今度こそ本当にスキップです。

完成しました。デフォルメ一切無しのイヌカレー作画完コピの魔女の絵が。

(記憶だけでここまで完璧に描けるとか) こいつすげえ変態だぜ？

それでは後は適当にやることやって寝ます。

おやすみ！

という訳で今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

## Part. 6 一狩り行こうぜ!

さいきよー魔女をシバキに行く実況プレイ、はーじまーるよー。

という訳で前回の続きです。

あの後色々あつてみかづき荘に集まっています。

今ここにいるのは、やちよ、みふゆ、ももこ、メルの人4人です。

鶴乃はどうやら用事でいないようです。

「それで、魔女の位置は昨日私が魔力を分析して割り出しておいたから…。」  
「ご覧の通り現在”創成の魔女”を倒すための作戦会議中です。

まあ特に見所さんも無いのでカットしろ!

皆さんご無沙汰しております。魔女専属調教師のリンネと申します（ry。今回調教する魔女は、創世の魔女つ！アホみたいで強さと、均整のとれた体（節穴）。まだ原作にはいないこの魔女は、私の調教に耐えることができるでしょうか？ それでは、ご覧ください

暴力！暴力！暴力！でお前もう生きて帰れねえな？

ふざけるのも大概にして”創世の魔女”戦、やっつけていきましょう。

こいつですが、攻撃方法はかなり多彩で、ノコギリやスレッズジハンマーを模した部位による近接攻撃、筆で描いた絵の具現化による雑魚大量召喚（使い魔とは別判定）、ネイルガンによる遠距離攻撃等があり、遠近中全距離対応攻撃を仕掛けてきます。

その為前衛だけで無く後衛も攻撃をくらう可能性もあり、油断するとあつという間にパーティーが壊滅します。（8敗）



そんなの勝てるわけないだろ！いい加減にしろ！とお思いでしょうがこいつにも弱点があります。

実はこいつ、一度に1人しかターゲットにできません。

は？こいつ色んなところに攻撃してくやんけ、と思うでしょうがそれはターゲットを物凄い速度で変えているだけです。なのでターゲットを変えさせなければ1人にしか攻撃は来ないという訳です。

その方法と言うと・・・前回のように遠距離から攻撃してヘイトを集めるだけです。こいつは攻撃してきたキャラに優先で攻撃を仕掛ける傾向があるのでそれを利用して銃で撃ち続けることで常に優先対象をこちらに向けると言う訳です。

(魔女はこつちが引き付けるから) どうにかしろ (指示)

「わかったわ。私ともこは魔女を、みふゆは取り巻きを、メルは魔法でのサポートをお願い！」

「わかった!」「わかりました!」「わかったです!」

ヘイトが常にこちらに向いている為、常に逃げ撃ちを強要されますがこれがなかなか・・・難しいねん・・・(ガバエイム)

如何せんサイトを覗かず移動するとARの場合結構精度が落ちます。それに加えて腰だめだとエイムアシストも発動しませんしフォーカスも使えません。

しかもこちらにも動きながら動局的に当てなければならぬという鬼畜っぷりです。

なんだこれは・（難易度）たまげたなあ……

しかしそんなことも言ってられないのがこの世界（ハードモード）。

魔力の消費を惜しまず弾幕を張って、1発当たればいいやぐらいの気持ちで撃ち続けましょう。

後は同じ画面が続いて面白みが無いので3.2倍速でお届けします。

『YAMERO! IYADA! TASUKETE!』

「魔女が怯んだ…!今のうちに… みふゆ!コネクト!」

「はい、やっちゃん!」

「はああああ!!」

『DOUSITE!? WATASHI WATA DAKONO SEKAI WO YORIYO  
IMONONISIIYOUTOSITE ITADAKENANNONII!』

創世の魔女、調理完了です…

やはり複数人で役割を分担して戦ったからか思ったより苦戦しませんでした。

数の暴力はやはり最強。

「いや、リンネが魔女を引き付けてくれて助かったよ。お陰でアタシ達、無傷で勝てたし。」

「でも、ワタシだって皆さんの所に使い魔が行かないように頑張っていましたよ?」

「それを言ったら、ボクだって魔法で……」

「はいはい、そこまでよ。誰が頑張ったとか関係ないでしょ? 私達はチームなんだから——」

「——皆で支え合うことが、大切なのよ。」

”……まあ、私は元、だけどね。”

はえーそうなんだー(適當)

……は?

え、いや、え? (素)

ウツソだろお前www

(笑ってる場合じゃ) ないです

どうやらリンネは元みかづき荘メンバーの模様…:

クオレハ嬉しいガバですよ!

ひとまずこれでみかづき荘の好感度信頼度が保証されました。  
また戦えるつてのはそういう事だったんすね〜 (適当)

「!?リンネ! ソウルジエムが!」

ファツ!? すつげえ黒くなってる (穢れ)。はつきりわかんだね。

「ほら、これ使つて。」

ありがとナス!

にしてもやちよさんすごい慌てようでしたね…:

まだ魔女化に関しては知らない筈なのですが。

じゃあ俺、GSもらつて帰るから!

「いえ、もう暗い時間だし…: せっかくだから、泊まっていくのはどう?」

あ、いいつすよ (快諾)

それじゃあみかづき荘にイクゾー！デッデッデデデ（カーン）デデデデ

到着しました。

とはいえ特にすることも無いですし適当に話をしたりして好感度を稼ぎましょうか。

”ゲーム機、まだ残してあるのね。”

ん？あ、なんかPS4とswitch、あと奥の方にwiiらしき物が置いてありますね。

なんで？（疑問）

「ええ。捨てるのはやっぱり勿体無いし、あと皆が時々やつたりするっていうのもあるけど・・・」

けど？

「一番は、あなたとの思い出の品でもある・・・って言う所かしらね。」

ああ、リンネ、ゲーマーの様でしたし、昔一緒にやつてたりしたんですかね？

でもだからといってやちよさんがこんな物を買うとは思えませんし・・・

もしやリンネの自費？だとしたら相当すごいですが、所持金を見る限り普通に有り得

そうですね。

「データも残してあるけど……久しぶりに一緒に遊ぶ?」

いいよ!いいよ!

という事でゲームの開始です。

今回遊ぶのは switch のパーティーゲームでプレイヤーはリンネ、やちよ、みふゆ、ももこ、メルの5人です。

モードは……スゴロクのようなです。基本のルールは普通のスゴロクと同じですが、順番が1周する事にミニゲームが挟まりそのゲームの結果でサイコロで出る目の最大数が決められます。1位の場合最大で12マス進めますがあくまで理論値であり、そんな幸運は滅多に訪れません。後は止まったマスに応じて追加で先に進めたり戻ったり、位置が入れ替わったり、一定以上の目を出さないと先に進めないマスだったり、かなり

楽しめます。

これ単体で500円ぐらいで売ったらすごい売れると思います。

説明も終わりましたし早速進めていきます。

サイコロをふって：： 1!ファ!?ウーン（心肺停止）

オラアミニゲームの時間だア!1位をとるんだよあくしろよ

えっなにそれは（未知のゲーム）

工事：： 完了です（1位）

12を出すんだよあくしろよ

賽の目は、6：： 普通だな!

やちよさん!?なに10とか出してるんですか!?やめてくださいよ本当に！（敗北への

恐怖）

ミニゲーム!ジャンプしろ！（命令）ボタンの反応が遅せえ!

ああああああもうやだああああああああ

!!!!



『優勝！1位でゴールしました!』

やったぜ。

ガバ運に振り回されましたが、持ち前の腕前で何とかカバーしました。

「相変わらず強いですね、りっちゃんは。」

「そうね…。これでも練習してるんだけど。」

「それはいいんだけど…。やちよさん、時間大丈夫なのか?」

「え?…。つて、もうこんな時間になってたの!?!待ってて、急いでご飯とか準備するから。」

ええ…。? (困惑)

やちよさんが珍しいですね。

どうせなら手伝ってあげましょうか。リンネの料理技能レベル高いみたいですし。

「なあ、メル。」

「どうしました?」

「アタシ、あんなに楽しそうに笑ってるやちよさん…。初めて見たかも。」

「…。ボクもです。」

…今回はここまでです。  
ご視聴ありがとうございました。



その日はいつも通りの日常だった。

朝食を作り、占いを止めさせ、高校に行き、スーパーのタイムセールに行き…  
そんないつも通りの、ありふれた日常。

だが、それは突如として壊される事を忘れてはならない。

みかづき荘に帰る途中、魔女の結界を発見する。

せつかくだから、一狩りしようかなんて考えた私が馬鹿だった。

眼下に広がる絶望。圧倒的な無力感。

こんな事は初めてだった。この魔女は、今まで戦ったどの魔女よりも強い。そう確信した。

それと同時に、私は初めて、「死」を実感した。私一人では絶対に勝てないと。

そう思った時、目の前に懐かしい人影が映る。

その姿に、思わず声を上げる。

「リンネ!？」

「よっ。久しぶりね。」

忘れもしない。その顔を。その声を。

1年前に別れてしまった親友が、私の目の前にいた。

「丁度良かった。この魔女、かなり強くて苦戦してたところなの。力を貸してくれないかしら?」

そんな心の内を隠しながら、私はそう答える。

「了解。私があいつを引き付けるから、その間に逃げて。」

「あなた、まさか一人で——」

「んな死亡フラグみたいなのは言わないわよ。ちゃんと私も一緒に逃げるわ。」

安心した。だってリンネ、本気でそういう事しそうな性格だったんだもの。

結界は思ったり狭く、使い魔を倒しながら進んでいくとすぐに出口へと辿り着いた。

「抜け出せたわね。怪我も大丈夫そうね。それじゃあ、また。」

言って帰ろうとするリンネを即座に呼び止める。

「そんな事言わずに、助けてくれたんだしお礼ぐらいはさせて。ほら、グリーンフシード。」  
「ん……。ありがと。」

そう言って使ったグリーンフシードはまだ使えるみたいで、「余ったから返すわ」と言っ  
てこちらに投げ返される。

「それにしても、あなたがあんなに苦戦するなんて、珍しいこともあるものね。」

「あなたなら気付いてるでしょ。あの魔女。今まで戦ったどんな魔女よりも、魔力の  
反応が強い。つまり、それだけ強力だったことよ。あなたが来ていなかったらどう  
なっていた事か……」

本当にどうなっていた事か。冗談抜きでこの世にいなかった自信がある。

それにしてもリンネには昔から助けて貰ってばかりね。一応私の方が先輩の筈なん  
だけれど。

「もしも。その魔女を放っておいたらきつと……」

「そうね。あれだけ強い魔女に、魔法少女になりたての子が遭遇でもしたら、為す術もなく殺されるでしょうね……」

事実、魔法少女歴6年の私が殺されかけた。

「……じゃあ、私と一緒に倒すって言うのはどう？……昔みたいだね。」

その言葉に心底驚いた。

まさか、彼女ともう一度一緒に戦える日が来るなんて。

「……わかったわ。とりあえず今日は一旦休みましょう。その間にあの魔女の魔力パターンを調べておくわ。」

「りょーかい。」

後は皆に警告をしておかないと。もう二度と誰も失いたくないから。でもどう伝えようか？あの魔女の姿を言って、伝わる気がしない。

そんな心の声が漏れていたのか、リンネが「絵を描いて送る」と言ってくれた。

「本当？ありがとう。助かるわ。」

「それにしても……またあなたと戦えるなんてね。」

その時の私の顔は、とても輝いていたようだった。

『私があいつを引き付けるから、その間に魔女に攻撃を仕掛けて。』

その言葉に一瞬驚くが、すぐに戻る。

何、いつもやってたことだ。どうってことは無い。

私とももこが魔女を、みふゆが取り巻きを、メルがその他サポートを、そしてリンネがヘイトを集める。

この作戦は驚くほど上手く行き、誰一人として傷つく事無く魔女を倒せた。

その後リンネのソウルジェムの色を見て血の気が引いたが、すぐにグリーンフィードを使う事で最悪の事態は回避出来た。

私の提案でリンネはみかづき荘に泊まることになって、少し浮かれてしまったが為に夕食の用意を忘れるという大失態を冒してしまう。

急いで作ろうとした所、「手伝うわよ。」とリンネが言ってくれたから、久しぶりに一緒に作ることにした。

それにしても、やはりというか何と言うか、彼女の手際はとても良かった。

彼女、最近はお炊は殆どやっていないと言っていたから少し腕が落ちていると思ってリンネ相手にお姉さんムーブをかませるかと思っただが。

本当、この子相手だと私は何も出来ない。

でも、それが懐かしきもあるわね。

リンネの手伝いもあって、予想よりも遥かに早く作り終えてそこまで遅れずに夕食に出来た。



「!このオムライス、すっごく美味しいです!」

「ああ。上にかけてあるデミグラスソースとあわさっていくらでも食べれそうだよ!」

とメルとももこが言う。

「そりゃあ、なんてったって、りっちゃんのだ得意料理ですからね!」

「そうね…。そういえば私がここで初めて作った料理もコレだったわね。」

「そういえばそうでしたね。あの時も凄く美味しくくてワタシびっくりしちゃいましたよ。」

「だから毎日作って欲しいって言ったたら、『面倒だから嫌だ』って、あなたにしては随分と子供らしい理由で断ったんだっけ?」

「…。そうだったかしら?」

その後も会話は続いて、夕食の後もずっと会話が続いた。

そうした喋り声をひとつの着信音が止める。

「ごめんなさい、私のよ。」

そう言ったリンネは席を外し遠くで誰かと電話する。

その声が、小さく私の耳へ入ってくる。

「もしもし、アリナ?——ええ。——日曜日?構わないわよ。——でもどうしたの?——秘密: : : か。——わかった。おやすみ。」

「お待たせ。」

「誰と話してたの?友達?」

「そうよ。: : : 何?嫉妬?」

「違うわよ!」

そんな日常。でもこれが永遠に続かないという事はとづくにわかっていた。その事から目を逸らすように、私はそんな小さな幸せに縋りついた。

## Part. 7 幸福な者と絶望する者

ああ逃げられない（アリナ）！な実況プレイ、はーじまーるよー。  
という訳で前回からの間に何が起こったかを説明します。

料理を作る

←

うん！おいしい！

←

好感度もつとあげなきや

←

ブツチツパ！（着信音）

←

名前にアリナ

←

日曜日がいいよ！来いよ！（強制）

という訳です。

なんだったってこうお前はガバを起こすんだ（未来予知）

それでは日曜日まで何も無かったのでカットです。

「それじゃあ、Destin<sup>目</sup>atic<sup>的</sup>ion<sup>地</sup>へさつきと行くワケ。」

アリナと待ち合わせ場所で落ち合ってそのまま移動している最中です。

カットしている間に調整したり修行したりしてLvも上げておきました。

それでは移動中暇だと思おうので…

みなさまのためにと

何故アリナと仲良くなるのかを解説します。

Part. 1でアリナと交流を持つておきたいという説明に対して、”なんでアリナと仲良くなる必要があるんですか（畏怖）”というコメントが来ていたので今更解説します。（激遅）

今回マギウスを従える方法は完全に実力行使となりますが、ぶっちゃけマギウス3人を相手取って勝つのはかなりきついです。大人数で戦えれば楽なのですが今回はとある都合でそれができません。

なので多くて2，3人でしか戦えません。

そうなるとまあまずこちら側がなぶり殺されます。

なのでどうするかと言うと…アリナを裏切らせます。

こうすることで、マギウスは2人で戦うことになり、更にこちらにはアリナが戦ってくれるので相当楽になります。

彼女としてはマギウス自体に対して特にこれと言った思いは無く、ただただ、自身のアートの為に協力しているだけなので、上手いこと言いくるめれば簡単に落とせます。ただし好感度や信頼度が低かったり言いくるめられなかったりするとテーマに何がわかる的な感じでそのまま作品にされるので注意しましょう。(2敗)

「ここが目的地なワケ。」

ちように説明が終わったところで着いた様です。

クオクオハ：： ショッピングモールの様です。

何故こんな所に：：？

「ホラ、リンネが前に見たいって言ってたfilm<sup>映画</sup>がチケット売り切れで見れないって買ってたケド、アリナがたまたまcheck<sup>チェック</sup>したら販売されてたからI bought it<sup>買った</sup>したワケ。感謝してヨネ。」

ん？ (何かを察する音)

「アリナ的にはこういうのは興味無いし見たいと思わないケド、リンネが見た——」

え、ちよ、ちよちよちよつと待っててください！（一時停止）

スウウウウ：ハアアアア：

何これ？（疑問）

気になる所が多すぎるんですがそれは：

まずアリナの好感度ですが恐らく最高に近い所まで上がっています。その証拠にアリのアリナが明らかにデレています。そもそも絵のアイデア求められる時点で察してはいましたが。

それに加えてリンネの趣味が多すぎませんか？

大体趣味は1〜2個程度しか無い事が普通ですがリンネ多分4個以上は持っていますね。

趣味はキャラの好物から確認出来ますので早速確認をば：

―好きな物―

・絵

- ・ゲーム
- ・映画鑑賞
- ・音楽鑑賞
- ・ネットサーフィン
- ・火器
- ・コーヒー
- ・チヨコレート

なんだこれはたまげたなあ  
相当多趣味の様です。

これは別にゲームにそこまで関わってこないの  
で気にする必要も無いのですが……  
チヨコとコーヒーに関してはいつの間にか持ち物に  
増えてたり飲んでたりしたので  
予想済みでしたが。

(一時停止解除)

「リンネが見た——いんだったら構わないワケ。」



おっそうだな（適當）

それでは時々話しかけてくるアリナに受け応えつつ建物の中にある映画館へ向かいます。

わあ、これが映画館ですかー。色んな映画がありますねー（当然）。こんなにあるとは思わなかったあ

これはアニメで、向こうに、実写があるんだ。後で（今）、そこへ行こうよ。

今回見る映画は：“ラベリアンⅢ”です。

元ネタは言わずもがな、叛逆にもあった“ガンIIカタ”が有名なあの作品です。

この世界では続編が作られているらしく、最新作の3作目の人気は凄まじい様です。

この作品はR15指定ですが2人とも15歳以上なのでヨシ！（現場猫）

というかこんな少女2人があんなガンアクションの映画を見るって中々ないと思う

んですけど。(名推理)

魔法少女の武器もそうだしやっぱ好きなんすねえ。(銃)

この映画ですが、実際にプレイヤーも見ることができて、クオリティもかなり高いです。映像自体は現実時間で5〜15分程で1つのシーンだけを切り抜いた感じですが、ゲーム内ではしっかりと2時間程あるようで、時間があつという間に溶けます。

勿論映像をお見せしたいところですがそんな事したらこの動画の大半が映画鑑賞になるので、気になる人はほんへを買うか有志によるまとめ動画を見て、どうぞ。(他力本願)

よって映画鑑賞はカットだ！カット！

最後ががががこよかった(小並感)

「まあ、アリナもそこそこ楽しめたワケ。で、リンネはどうだったワケ？」

「やっぱ……ガンカタを……最高やな！」

「そう。なら良かったワケ。アリナだけ楽しんでたら 悪guilty かつだったカラ……」

「がわ……い……い……な……あ……ア……リ……ナ……ぢや……ん……」

では映画も見終わった所なので帰りましょうか。

今日はありがとな！

「え……もう帰るんだ……。じゃあ、また今度会うワケ。 バbye イbye」

……なんか凄い寂しそうな目で一瞬こちを見たんですけど……

そんな顔されたら帰れるわけないだろ！いい加減にしろ！

そういう事なのでこのまま適当にモールをブラブラします。

その日はいつも通りの休日でした。

一つだけ違ったのは、メルが占いを行ってしまった事でした。

何時もなら誰かが止めに入るのですが、その日はたまたま部屋には誰にもいなくて、占いに誰も気づく事は無く最初に戻ってきたワタシが気づいた時には時すでに遅し。

占いは終わっていました。

やつちゃんメルをこっぴどく叱っていましたが、その様子を見てみると、思わず笑いが込み上げてきて。

「……どうしたのよ、みふゆ。」

「いや、なんとというか今のやっちゃん、凄く「お母さん」みたいな感じだなくって思ってる。そう言うのと、やっちゃんは一瞬間まって、その後すぐに「それどういう意味よ!」と言ってきました。

「でも、ワタシはやっちゃんのそういう所も素敵だと思いますよ。ね? ももこさん。」  
「アタシに振るのか!? ええーと、まあそうだな。やちよさんがタイムセールとか、ポイント10倍デーに敏感だったりするのも、お母さんっぽくてアタシは良いと思うよ。うん。」

「褒めてるのか貶してるのか分からないのはやめてちょうだい...」

そんな会話のやりとりをしているとメルが、「でも、占いの結果は人生最高のラッキデーで大当たりだったんだから、そんなに怒らなくても良くないですか? お母さんみたいに。」なんてことを言いました。

そんな事を言うからやっちゃんは「お母さんじゃないわよ!」と怒っていました。まあ確かに最後の一言は余計でしたね。

でも「ラッキデー」なのだしたら確かに今日は一日中幸運が訪れるのでしよう。そしたら一体どんな幸運が訪れるのでしょうか?

\*

今日は人生最高のラツキデー。

皆にとっては正反対なのかもしれない。

でもボクはとても幸せでした。

最後の最後に、皆を守ることが出来たですから。

だから皆、そんな悲しい顔をしないでください。

最期ぐらい、笑って見送って下さいよ。

なんて、無理なお願いなんでしょう。

どんどん意識が薄れていきます。

体の中で、なにかがうごいているのを感じます

きつとそれがおわりなのでしよう

ぼくはしずかにそれをうけ入れました

DEMOさいごにひとつだけ ここRONOKORIがあるとすればなら  
MIKADUKIそうみんなに みOKIURAれたかったかなって



「じゃあ、また今度会うワケ！*bye bye*！」

という訳でアリナから解放されました。

予想以上に体力を持っていかれましたし辺りも暗いので今日は帰って休みましょう。

ん？この反応は…



チームみかづき荘が戦っているみたいです。

今サラツとやりましたが経験が長い魔法少女は僅かな魔力の波動を感知できてそこから魔法少女を特定する事も可能になります。

どうやら苦戦している様で…

ん？この時期にみかづき荘が苦戦する魔女？

あつ…（察し）

これは恐らく大東から流れてきた例の魔女と戦っていますね。

あの戦闘はメルが魔女化して鶴乃を除くチームみかづき荘メンバーが魔女化について知る重要イベントです。

関わる必要は特にありませんし下手に動いてメルが魔女化しなかった時に面倒な事になるので放っておくのが1番…

つて、操作が効かないんですが!?

なんか全速力で魔女の方向へ向かってるんですが!?

（メルが魔女化しないと）ヤメロオ！（建前）ヤメロオ！（本音）

魔女結界に入ってしまった… ナオキです…

「リンネ!? どうしてここに!?!」

「なんでもいいです! メルを結界から抜け出すのに援護してください!」

ものの見事に壊滅状態です。

リンネも銃を複数展開して乱射していますが疲れからか動きが鈍いです。

っとお! 攻撃を避け続けてましたが死角からの攻撃をくらってダウンしました。

「リンネ!」

「やちよ先輩! 後ろ!」

「え? ツ! まずい!」

やちよさんが一瞬で腕のような形をした魔女に囲まれました。

「やちよ先輩!」

「メル! 来ちゃダメよ!」

言うや否やメルが超絶威力の魔法を繰り出して魔女を撃退しました。

すっげえ黒くなってる。はつきりわかんだね (SG)

「メルさん！りっちゃん！」

「グリーンフシードは!？」

「ッ…！」

皆持つていないようです。ここで誰かが持つてたりするとメルが魔女化しません。

(1敗)

”私は… 大丈夫、夫”

「わかった。メル、待つて、今から取ってくるから…。」

「行かないで…！」

「…え？」

「わかるです。もうボクは…。」

「バカな事言わないで!… 何がラッキデーよ。最悪じゃない!…」

「そんな、事無いです…。ボク、皆を守れて、幸せで——」

”… ハア、ハア、これを…。”

リンネ！何してんすか、やめてくださいよ本当に！

GSを渡さないで！

「！わかったわ！メル!!」

え、ちよ、ちよちよちよと待つてください！待って！助けて！待つてくださいお願いします！うあああああ！！

メル早く魔女化しろ！無駄に耐えなくていいから！（ド畜生）

パリーーン

やったぜ。

ギリギリの所で物凄い衝撃波を放って魔女化しました。

「え？… あ… そんな… 嘘… でしょう…？」

ト者の魔女が出現しました。

これで鶴乃以外のみかづき荘メンバーが魔女化を知ったことになりました。

リンネのSGは… めっちゃ濁ってるんですけど（困惑）

合理的なので魔法少女が魔女化したくらいじゃこんな濁らないと思うんですけど

(名推理)

こんなんじや合理的にした意味ないよゝ

とりあえず魔女は置いて皆でみかづき荘に帰ってきました。白タヌキも一緒です。

「どういう事なんだ！説明しろ！」

「どうもこうも、君達が見たまんまだよ。魔法少女はソウルジエムに穢れを溜めすぎると魔女になる。僕達はその際に生じるエネルギーを集める事が目的さ」

「…じゃあ、キュウベえは私達を騙してたって事ですか!？」

「別に騙しているつもりは無いんだけどね。聞かれなかったから答えなかっただけだよ。それに僕達は君たちの願いは叶えてあげた。そこまで感情的になる必要は無いと思うんだけど。」

いつも通りコイツは地雷を片っ端から踏み抜いて来ますね…

「何を言っても無駄よ…コイツには感情が無いから。」

「困ったな。なら、君達2人から直接話してあげてくれないかい？ボクはそろそろ他の子の所へ行かないとならないからね。」

誰も引き止める気力は残っていないようで特に何も言いませんでしたね。  
で。2人ってどういう意味ですか？リンネは良いとして…

…まさか。

「2人ってどういう事ですか？」

「…ごめんなさい。実は私は昔からこの事を知っていたの。」

「やっちゃん…！なら、どうして言ってくれなかったんですか！」

「かなえが死んだあの日…。教えて貰ったのよ…。リンネに。」

あっそっかあ。

だから前リンネのSGが濁った時慌ててたんですね

「なら！どうして教えてくれなかったんだよ！」

「言えないわよ、そんな事…！リンネに言われたのよ。この事を話した途端、絶望して  
魔女になったり、自殺したりする人が沢山いるって。だから、皆には秘密にしていって  
しいって。」

「…そうなのか？」

そうだよ（適当）

事実、魔女化を知った途端「皆死ぬしかないじゃない！」って言って仲間皆殺しにする  
黄色い人知ってますし。

「.: そう、か。ごめん.:」

ああもう（メンタル）滅茶苦茶だよ。

という訳でメンタルボロボロにして帰る所で今回はここまでです。  
ご視聴ありがとうございました。

---

アリナと別れて帰る途中、僅かな魔力を感知する。

魔力のパターンからして、恐らくやちよ達。

この感じからするに、戦闘中。それも苦戦している。

そんな理由を前にして、加勢しない理由は無かった。

疲れを無視してでも。

即座に結界に入り、現れる使い魔を掃射して奥へ進む。

するとやちよ達が見えて来た。

「リンネ!? どうしてここに!?!」

「なんでもいいです! メルを結界から抜け出すのに援護してください!」

すぐさまメルの援護に入り、近くの攻撃を銃で撃つて防ぐ。

ただ、その時の私は自分の疲労を思ったより軽視していたようだった。その所為で死角からの攻撃に気付くのが遅れた。



「しまった！」

気づいた時にはもう遅く、そのまま地面に叩きつけられる。そこで私の意識が途切れた。

意識が朦朧とする中、声が聞こえる。

「メルさん！りっちゃん！」

「グリーンフシードは!？」

「ツ：：！」

意識がまだハッキリとしない中答える。

「私は：： 大丈、夫。」

「わかった。メル、待ってて、今から取ってくるから：：：」

やちよが立ち上がろうとした時、メルが答える。

「行かないで…！」

「…え？」

「わかるです。もうボクは…！」

「バカな事言わないで！…。何がラッキディーよ。最悪じゃない…！」

「そんな、事無いです…。ボク、皆を守れて、幸せで——」

「…ハア、ハア、これを…」

そう言つて、私は何とかポケットからグリーンフシードを取り出す。

——正直言つて。

メルが魔女化しようが私にはどうでもよかつた。

でもそうなつたら、やちよとみふゆが悲しんでしまう。絶望させてしまう。

それだけは嫌だつた。だから私は大切な人以外を助けようと思つた。

——もうこんなことはしないと自分では思つていたけれど。

「！わかつたわ！メル！！」

そう言つてやちよはグリーンフシードを取つたあと、メルのソウルジエムに触れようとする。

しかし、それは叶わなかった。

ソウルジエムの割れる音。

そして巻き起こる衝撃波。

頭に一瞬だけ流れてくる断片的な記憶の欠片。

∴  
もう何度経験したかすら、私は覚えていなかった。

そして彼女達の顔は、やっぱりあの時みたいに曇っていて。

もう二度とさせたくなかった。

彼女達には、もう絶望して欲しくなかった。

——早急に計画を進めなければならない。  
これ以上彼女達を絶望させないために。

## Part. 8 魔法少女マジカルかりん

サブイベントばつかで全然話が進まない実況プレイ、はーじまーるよー

という事で前回から少し進んだ所からです。

あの後にはチームみかづき荘に亀裂が走り、なんやかんやあつてチームが解散しました。

鶴乃との修行も、2〜3週間程はあちらが声をかけてこない限り誘わない様にしよう。

と言うか今まで結構な回数修行をやったりその他好感度信頼度を上げることが色々やってたんですが未だに例のハイライト喪失顔になって無いんですよ…

本来なら既になつていてもおかしくは無いのですが…

まあならなかつたらならなかつたで良いです。

今回のプレイではそこまで鶴乃の懐柔は重要では無いですし、そもそも開始時に鶴乃との修行が予定されていたのが発端ですし。

ただ、なんかガバの臭いがするんですよ…。（フラグ）

現在はそれから約1ヶ月後です。

1ヶ月後なんですけど、マギウス結成までやる事が無いのが現状です。だから1ヶ月もカットされた訳ですが…

このまま全カットって言うのも動画的にもプレイヤー的にも面白く無いので…

みなさまのために

他のキャラに会って好感度とか上げに行ったり、あわよくば魔法少女ストーリーを解放したりします。

とかこのままだとマギウスの御二方の信頼度が足りませんでした。（ガバ）なので適当にお見舞いにも行ってやりましょう。

当たり前ですが普通に行くよりも何か持っていた方が良いです。今回はメロンでも持って行ってあげましょう。お見舞い品としては定番ですし、彼女達も病院食以外に

もフルーツ等は食べても良いみたいですし。現実では人によって食事制限等が課されていることもよくあるので注意しよう！

少女移動中：：

おっと、魔女とエンカウントしました。さつさと片付けてしましましょう。

ん？あのピンク髪の魔法使いの様な silhouette は：：  
「フフフ：。この”魔鎌ジャックデスサイス”の前に跪くのだ！」

御園かりん！御園かりんじゃないか！

知つての通り彼女は怪盗マジカルきりんという漫画の影響で戦闘中は見事な中二病と化します。普段はそんな事無いんですがね…

それとアリナの後輩と言う結構重要な役割を担っています。その割には本編での出番はそこまででしたが。

(中の人の都合が悪くて声が録れない事情があつたから)ま、多少はね？

そういえばリンネはアリナとの交友は深いのにかりんには会っていませんでした。初期交友関係にありませんでしたし。ただかりんについてはアリナからちよくちよく聞いているようで情報だけは持っていますね。

それはそれとして加勢しましょう。

見ているだけなのも味気無いので。

ただ今回は趣向を変えて後方からの狙撃をメインにします。特に理由はありませんがたまにはこういうのも良いでしょう。

それではクイツクメニューからSRカスタムを選択し…



バイポット銃のアンダーバレルに取りつける二脚。主に伏せ撃ち時の安定性の向上などのために用いられる。を立てたら伏せて狙撃します。

ステンバイイ……ステンバイイ……（照準）

ゴツ！（射撃）

ビューティフオー（k i l l e r）

「うわ!?だ、誰なの?」

かりんが驚いていますますが気にせずこのままビューティフオって（動詞）いきましよう。

「……！わかつたの！これは所謂「突然現れる謎の味方らしき人」なの！誰か分からないけどありがとうなの！」

味方らしきっていうか味方でしかないんだよなあ……

あと何気に驚きで素に戻ってますね。

知つての通りかりんはバケモンみたいな強さを誇る事で有名で、私の助けが無くとも魔女は狩れます。なので近くの使い魔を狙撃するぐらいで良いでしょう。下手に撃つて誤射しても嫌なので。



「あーもしかしてさつき援護してくれてたのってあなたなの？」

そうだよ（肯定）

入った結界にたまたまいたんで援護射撃させてもらいました。結川リンネと申します。

「やっぱりそうだったの！私は“御園かりん”。ハロウィンが生んだ魔法少女なの！さつきはありがとうなの！」

あ、そうだ（唐突）

まずうちさあ、アリナ・・・友達なんだけど・・・君彼女知らない？（迫真）

「アリナ先輩はわたしの自慢の先輩なの！ちよつと厳しいけど、いつもわたしの漫画を読んで評価してくれたり、アドバイスしてくれたりするの！」

へえーそうなんすねー（適当）

それじゃあ私のこと・・・知らない？

「ごめんなさいなの・・・特に先輩はそういう事は話してないの。というか先輩、ちゃんと仲のいい人がいたの。安心したの。」

どうやらアリナはリンネ事はかりんに話していない模様ですね。

それじゃあ、連絡先の交換とか・・・どうすすか？

「わかったの！」

という事でかりんの連絡先をゲットしました。

今回は彼女には重要な役割を担ってもらいます。

その役割とは、アリナのマギウス裏切りの為の餌です。

アリナはかりんの事を大事に思っている為、マギウスが彼女に何かしよう物ならば切れます。時々かりんが重要なウワサを破壊しようとしてマギウスに返り討ちにされたりして、アリナがかりんを傷つけられた事に激怒して勝手に裏切ってる事とかありません？無い？そう…

とにかく今回はそれを意図的に引き起こします。かりんにそれとなくウワサに誘導していく訳です。

まあ今回はそんな回りくどいやり方をせずともアリナに直接頼めばワンチャン行けそうな気もしなくも無いですが保険をかけておくに越した事はありません。

だから、かりんと交友を築く必要があるんですね（メガトン構文）

それでは本来の目的であるお見舞い品の購入及び、病院組へのお見舞いをしに行きたいところですが、時間もいい所なので今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

side —No. A1— 芸術、天才、外人、狂気

目の前のキャンパスに夢中になっている緑色の髪の彼女は、私の一番最初の親友である。その名をアリナ・グレイ。若き天才芸術家であり、今までに数々の賞を貰っている。だがその作品はどれも……とても万人受けするの様な物では無かった。

そもそも芸術作品自体が万人受けするものでは無いのだが、彼女の作品はそれとこれとは訳が違う。

なんというか彼女の作品は……「狂っている」のだ。そして残念な事に、彼女自身も私は彼女の事を否定するつもりは無い。寧ろその狂気が、アリナ・グレイをアリナ・グレイたらしめているのだろう。

しかし世界というのは残酷な物で、そういう「周りとは違う人間」というのは、古くから排斥されてきた歴史がある。

それは彼女も例外では無い。どうにも学校では基本的に避けられているらしく、更に昔は暇人共にいじめを受けていたこともあるらしい。

——私と同じで。

心の中で自嘲気味に言う。

……尤も、彼女はそういった輩には、「丁寧な話し合い」で解決させていたので、次第にいなくなったようだが。

話を戻す。

私は所謂「違う人間」を排斥する事はとても正当性のある判断だと思っている。

周りとは違う人間というのはつまり、思考回路が普通のそれとは異なっているということ。

という事は、何を考えているか分からないと。

つまりそれは所謂、危険因子な訳だ。ならば脅威を減らす為にそういった事をするのも納得ができる。

しかし、その対象が大切な人だった場合は別だ。そんな理由で親友が虐げられるなど許せはしない。きつと私は、そんな事をした奴らに報復をしに行く事だろう。固有魔法を使つて、あの時のように。

まあ、対象がそれ以外だったらどうでもいいのだが。

——我ながら矛盾しているようにも感じるのは、気のせいだろうか。

：： きつとこの考えは昔の私なら有り得なかつただろう。

きつと友達が虐げられていようと、それに関わることで自分に不利益が生じるなら、簡単に見捨てる。そんな人間だつただろう。

：： でも。大切な人を：： 両親を虐殺されて。それで私は身近な人を傷つけられる悲しみを、恨みを知つたあの日から。この考えは、完全に消え去つた。

特にアリナに関しては、何が何でも守ると。  
最初の友達で、一番の親友だから。

そういえば、彼女と出会ったのは丁度五年前だったか。今思うと、私の第一印象は随分と酷いものだっただろう。ふと、私は昔を思い出し、あの頃に思いを馳せる。

\*



時刻は午前11時。天気は雲ひとつ無い青空。気温は26度。それに加えて今日は日曜日。

世間一般では所謂お出かけ日和というやつだろう。まあ、休みを殆ど家で過ごしている普段の私には関係無い話だ。

だが、どうやら今の私は普段の私じゃないらしい。珍しく外に出歩いている。

理由は風景画を描きたくなったから。描きたなくなった理由はこれと違ってない。なんとなく。

そうして適当に市内を歩いていると、良い感じの川沿いの風景を見つける。

私は徐おもむろに画材を取り出し、鉛筆で早速その風景を描いていく。

描き始めてから少し経った後に、ふと喉が渴きを感じた。

私とした事が、飲み物を持ってくるのを忘れたらしい。嘘でしょ？

幸い財布は持つてきているので、近くのコンビニで何かを買おうとして後ろを振り返ると……

緑色の髪をした私より少し小さな、外人の女の子がいた。何故か見覚えのある見た目をしていたような気がするが、初対面の筈だし、気のせいだろう。

……こつちを見ていたようだが、振り返ると同時にそつぽを向く。そのまま見ていると、ちらちらとこちらを見てくる。

ただ、それ以外特に何をする気配も無い。

何がしたいんだコイツは。うざつたい。

とりあえず話しかける。

「ねえ。」

「!? Uh… well…」

「Do you understand Japanese?」

「わかる」

「… さつきからずつとこつち見てたけど、何がしたいの?」

「アナタがdrawingしているartがみ…み…? Lookしたいワケ。」

成程。どうやら目の前の少女は私の絵に興味があるらしい。よく見ると彼女も手提げ鞆の中に画材が入っているようだ。

「嫌。見せない。」

そんな事やってられない。私は今喉が乾いているのだ。さつきとそこを退いて欲しい。いや、退け。

私が全力で凄い嫌そうな顔を見ると、彼女はちよつと引いた気がする。そりや無いでしよ。

しかし、若干彼女は若干引いているものの（精神的な意味で）この場を引くつもりは

無い（こちらは物理的な意味）らしい。妙にしぶとい。  
・・・  
そうだ。

「飲み物。」

「・・・ What?」

「コンビニでも自販機でもいいから、ジュースか何か買ってきて。そしたら見せたげる。」

我ながら妙案だ。この方法なら彼女は絵を見れるし、私はわざわざ歩かずに飲み物を飲める。win-winってやつだ。多分。きつと。

「お金は。」

「自分で出して。」

「持っていないんですケド。」

「・・・ はあ。はい、200円。後で返してね。」

財布ぐらい持ってなさいよ——と言いかけ、止める。

そもそも私の年齢で財布やスマホを持つてる事は珍しいという事を思い出した。彼女がどういう家庭に生まれたかは知らないが、私のような金持ちの家に生まれてなきやこれらの物は持つてないだろう。なら仕方ないか。

数分後、近くのコンビニから帰って来た彼女から飲み物を貰い、喉の乾きを潤す。う

ん、美味しい。

「それで… アナタの Art を L o o k <sup>見</sup>したいんですケド…」  
 「ああ、ほら。」

言われた通りさつきまで描いていた絵を見せる。下書きで、後で P C に取り込んでちやんとした線を描いたり色を塗るつもりだったのでそこまで丁寧に書いた訳じゃないしそもそも全然途中だけど。

いやしかし、赤の他人、しかもど素人の絵を見て何が面白いんだろうか。絵が見たいんなら美術館に行くなりネットで調べるなりすればいいだけの話。何か理由でも…？

「…コレって、普段 s o m e o n e <sup>誰</sup>に見せたりとかするワケ？」  
 「え？ いやまあ、時々ネットにあげてたりはするけど…」

私の両親は基本やりたい事は何でもやらせてくれた。その1つが SNS。お父さんは少し前から目をつけていたらしいが、最近のスマホの普及によって、2012年現在

SNSの普及率は40%を超えた…。らしい。

そのSNSに時々私の描いた絵をあげている。ちなみに全くもって有名ではない。

「凄い。」

「え？」

「その…：アリナもpicture絵をdraw描ingいしててるんだケド。」

まあ、でしょうね。逆に絵を描かないんだつたら、その手にぶら下がっている鞆の中の画材は何なんだと言いたくなる。

「ただ、どんなpicture絵をdrawing描しても、アリナの中でこれだと思う様な作品に出会えてないワケ。だから、あなたみたいにmy自 picture分の絵を他人に見せられる人は羨ましいと思うワケ。だって、それは自信を持ててるワケでしょ？」

「ええ…。まあ、そういう事になるのかしらね。」

——別に自分は自分の絵に自信をもっている訳じゃない。というか、別に自信がなくても人に見せれるだろう。よく分からない。

…で、結局何が言いたいの？

「だから、その… アリナに自信を持てるようになる方法を教えて欲しいワケ！」

「…は？」

いやちよつと待て。自信を持てるようになる方法を教えて欲しい？

H A H A H A ご冗談を。

いや本当にどういう事だ？

まだ自信を持てるようになるほど絵を上手くかけるように教えて欲しいとか、これだ  
と思う作品に出会うのに手助けをして欲しいならわかる。

でも目の前の彼女… アリナって言うていたか。アリナは自信を持てるようになる  
方法を求めている。そんな物は私には教えられないし、そもそも根本的に何かが間違っ  
ている気がする。多分。いや絶対。

「あ…その、自信を持てるようになる方法は教えられないわね。」

「えっ…： そう…： まあ、うん。そうだヨネ…： いきなりこんな事言われても…：」



待って、そんなにネガティブにならないで。心無しか目のハイライトが消えた気もするし。

いやちよつと泣かないですよ。なんかすごい周りの視線が痛いから。

「わかった！わかったから。」

「え？」

「その。自信を持てるようになる方法っていうのは難しいかもしれないけど、絵を教えるぐらいならできるから。」

「!!ありがとうございます！」

∴ あのまま泣き続けられて周りの大人が介入してきて面倒な勘違いをされるか、いつ終わるかも分からない絵を教えるという行為をやり続けるか∴

当時の私は後ろの選択をして、後から失敗したと思っていた訳だが、今となつてはこれとはとても良い選択だったように思う。

何せ、私に友達を与えてくれたから。

\*

私がアリナと関わったあの日から1年。色々あった。

まず彼女。絵の才能……というより、芸術作品全体の才能がとんでもない。私が教えるとは言ったものの、実際のところ教える所なんてひとつも無く、寧ろ私が教わる立場なような気がした。

それもその筈、なんと彼女、あのグレイ家の娘だった。

グレイ家と言えば、古くから数々の芸術作品を手がけてきた家系だ。つまり彼女は所謂一点型の天才だった訳だ。私のような万能型……器用貧乏とは違い、1つの物事に対

しての才能がずば抜けている。

これはきつと将来100年に1人の天才だとか言われるようになる。

そんな人間と知り合いになれるなんてどんな強運だ。もつと別の所で運を使ったかった。

そういえば、知り合いと友達の境界ってなんなんだろうか。

今まで友達どころか身内以外の人間とまともに関わってこなかったから、そういうのが分からない。

ただ、両親が友達ができて嬉しいと言っていたから、アリナとの関係は友達なんだろうな。

友達、か。

まさか私にそんな存在が現れるとは。夢にも思わなかった。

「あ、負けた.:」

さて、そんな事を考えている私が今やっているのは、PS3のARPG。1度クリアしてはいるが、久しぶりにやりたくなつたから、いくつかの要素を引き継いで初めからプレイしている。勿論最高難易度のアンノウンで。

しかし絶賛中盤の強ボスに苦しめられている最中である。

というか今作は過去作と比べて難易度が高い。唯一のCERO：Cだからだろうか。

少しイライラしてきたのでとりあえず気分転換にチョコでも食べよう。

：  
あれ。

おかしいな。どこにも無い。

まさか買い忘れていたか。仕方ない。

今親は仕事だし、自分で買いに行くか。

なに、よくある事だ。心配はいらない。

\*

コンビニに向かう道中、やけに憂鬱そうなアリナを見かける。どうしたのと聞いてみると、どうやら彼女の愛犬と祖父母が亡くなったらしい。

死因は車を運転中にブレーキとアクセルを踏み間違えた事による事故死。車には愛犬も乗っついていて巻き込まれたらしい。ちなみに全員即死らしい。

よくある高齢者による事故だ。

… まあ、その一言で済ましたら大変な事になるのは流石にわかっている。

しかし、なんと声を掛ければいいのか。

「その、あなたの祖父母と愛犬が死んでしまったのは確かにとっても悲しい事だと思う。」

「…」

「でも、人、というか生き物は皆いつかは必ず死んでしまう物。そう、生物から、物体へ。」

「… 物、に？」

「そう。まあ言い方は少し悪かったかもしれないけど。それで、死んで言うものは、絶対に避けられない。その原因が何であれ。だから、ずっと——」

「それだ!!!」

私が話している途中でアリナは唐突に叫ぶ。

少し吃驚びつくりしたのは内緒。

「生き物がただの物へと変わる… それってすつごくexcite興奮するヨネ！」  
「は？」

「ようやく私の創りたいartが見つかったワケ！」

「いや、何を言ってる」

「今日はありがとう！アハハ！」

ええ…？

全くもって訳が分からないが、まあ、アリナが良いならそれで良い…のか？

まあ、私が言っていたことの八割ぐらいが心にも無い言葉だったのだが。

しかし、何かとんでもない思考に目覚めさせてしまった気がするが、創りたい作品が見つかったって言っていたし多分大丈夫だろう。きつと。





いや良くないでしょ。普通に考えて。

とりあえず今後何かしでかす前に、少し注意しておいた方がいいだろう。主に彼女の作品に。

\*

とまあ、これが私とアリナの出会いと、彼女が変わった原因だ。改めて思い返すと、色々と酷い。

初対面の相手にパシリとか。しかも自費。

「リンネ？」

「何？どうしたの？」

「いや、なんでもないワケ。」

じゃあ何故呼んだ。

私が困惑するとアリナが話す。

「別に、名前が呼びたくなかったから呼んだだけなんですケド。」

「何で名前を呼びたくなかったの？」

「…さあ？別にわからなくてもいいと思うんですケド。」

「まあ、それもそうね。」

そう言うと、彼女はすぐにまた絵を描き始める。  
が、私の声によつてすぐに中断される。

「アリナは、ずっと芸術活動を続けるの？」

「当たり前なんですケド。」

「じゃあ、大人になったらそれで稼ぐ訳ね。」

「まあ、そうなるカモ。」

実に意味の無い会話。

でも、そういうのが実は後々…なんてことも無いだろう。ゲームやアニメじやあるまいし。

「アリナがもしartをやめる時は、artが出来なくなった時か、自分に一切の自信を失った時だけダカラ。その時は、作品諸共、全てを終わらせるワケ。」

あれ、意外と大事な事聞いてしまったんじゃないだろうか。

まあ、そんな事滅多に訪れないだろうけど。

全てを終わらせるといふのはつまり、”そういう事”なのだろう。覚えておこう。彼女を死なせない為に。

## Part. 9 ガバ中のガバ

前回のあらすじ

今回のあらすじ

次回のあらすじ（追真）

前回はおガキ様こと里見灯花、本編でいまいち影が薄い柊ねむ、第一部の全ての元凶環ういの御三方に媚びを売るべく尚ういは割とどうでもいい模様青果店に赴きメロンを買おうとしたところ、中二病こと御園かりんとエンカウントただし死ぬのは魔女し、今後の作戦のエサをゲットしました。（暗黒微笑）

こ→こ←から今回のあらすじそしてメロンのくだりはすつとばしてリンネがアリナの様子がおかしい事を知らなくていいの知ってしまいました、そこからなんやかんやあつて急に適当になるナレーターの屑アリナが屋上からZ I S A T Uしようとしている事に気づいてしまい、急いで屋上へ向かうも間に合わず…

そのままリンネは絶望し魔女化するという悲しい展開を迎えました。:

こ→こ←から次回のあらすじま、嘘なんですけどね。(SKRI)

しかしアリナが契約してしまった事により逃れられぬ死の運命に巻き込んでしまった事で、リンネは自己嫌悪に陥りました。それにより例の如くSGは濁っていきます。救いは無いんですか!?

いやまだどこかにある筈。．．と言うかそうじゃないとゲームが詰んじやう!それをどうにか探せばきつと救いは待っているはずです!

次回!リンネ死す!(大嘘)

マジアスタンバイ!これやりたかっただけ定期

\*上記は実話をもとにしたフィクションです。つまり9割ぐらいが嘘で構成されています。ホモは嘘つき。

未来の上司若しくは同僚に媚びを売る実況プレイ、はーじまーるよー。

という訳で前回の続きからです。

かりんとの邂逅も済んだので本来の目的であるメロンを買いに行きましょう。

少女移動中：：

と言うわけで青果店に着きましたので早速メロンを買い  
ました。(ました商法)

ので三人の元へお見舞いに行きます。

ところで今更気付いたのですが、この時にいろはも呼んでおけば好感度とか上げられ  
ましたね。

皆さんはこうなった時のために覚えておきましょう。こんな交友関係には滅多にな  
らないでしょうが。

それでは病院にイクゾー！カーンカーンカカカカーン(ブーン)



「おや、珍しいね。」

「一人で来るなんてどうしたのかな？」

病室に着きました。ういは：： いませんね。

「ういなら今は別の部屋にいるよー？」

そう：：（無関心）

まあ、ういがいようがいまいがあまり関係ないので別にいいです。

「ところでその袋って：： もしかして僕達に？」

そうだよ（肯定）

リンネが有り金（所持金の1%にも満たない）はたいて買ったメロンだ。味わって食いな！

「そうなの？じゃあ遠慮なく頂くけど。」

「…でも、本当に良いのかい？そんなに高級な物…。」

（良くない訳）ないです。

この期に及んでだめだね　なんて言えるわけないんだよなあ…。

まあこの後ういと一緒食べてくれればいいんじゃないですかね。（適当）

「分かったよ…でも、どうしていきなり？」

「確かにねー。いつもは一人で来るなんて滅多にないのに。それも、こんなに高い物まで持ってきてくれて…　何かあったのかな？」

ん？なんか変な想像されてません？これ。

いや何かあったかと聞かれたら何かありすぎる訳ですけども。

んー、でもここで何か言う必要もありませんし特に理由は無いとでも答えておきましようか。

実際は好感度上げの為ですが、そんな選択肢はゲーム中に存在しないので。（落胆）

「そうなの？ならいいけどー。」

「…。」

何やらねむが何か言いたげな表情をしていますがおつ大丈夫か大丈夫か？

「いや、なんでもないよ。少し…考え事をしてただけ。」

ほんとお？いや、絶対なんかありますよこれ。長年のゲーマーの勘がそう告げている。

このゲームの事ですから特に何も無いなんて事もありませんけど…

…フラグじゃないですよ。

まあいいでしょう。何かあったとしても、それはそれで面白いですし。

「あれ、リンネさん？」

「ああ、うい。さつきお見舞いに来てくれたんだ。このメロンと一緒にね。」

「そうなんだ！…そういえば、お姉ちゃんは今日はいないの？」

「みたいだねー。」

「…あ！メロンありがとう！」

（好感度上昇が）見える見える…

この調子で他のキャラも上げていきたいですね。

それでは、いい感じに好感度もあげられたと思うのでここでさよならしましょう。

じゃあな！キュウベえってやつに気をつけろよ！

それでは病院を出ま——

おっと、看護師さんに話しかけられました。なにゆえ？

「あら、リンネちゃんじゃない。今日はあの子達のお見舞いに？」

「そうだよ。(肯定)」

「お見舞いが終わったので今から帰るところです。」

「そうなのね。いつもありがとうね。あの子達、あなたが来てくれるの、少し楽しみにしてくれてるみたいだから。」

「ふむ…」

「どうやらこれは入院している知り合いがいた時に発生するランダムイベントの様です。」

「話の雰囲気から大体の好感度を読み取れます。」

「今回の様子を見るにやはり3人の好感度は高い様です。」

「安心です。」

「ところで…最近は大丈夫？」

「？質問の意図が見えないのですがそれは…」

「そうですね…普通に生活してて何か違和感とか…あと、物事を変な風に考えちゃったりとか。」

「んー？特にそんな事は今の所起こってませんが…」

物事を変な風に言うのと、鬱とかの症状な感じもしますが、精神系のステータス異常は今に至るまで発生してませんし。

過去に何らかの精神病を患っていた可能性が微レ存…？

「そう。なら良かった！… ああ、ごめんね、変な事聞いて。」

うーん… 取り敢えず現状は謎ですね。

… まあ別にいいですね。（思考停止）

それでは病院から出ましょう。

で、その後も色々やっつけた訳ですが…

尺の都合で全カットです。(無慈悲)

その間の事を軽く説明しますと…



その日は特に理由も無く、街を歩いていた。

別に魔女を倒してグリーンフィードを集めたり、調整屋で強化をしたりなんていう気分でも無かったし。

強いて言うなら、少し前にアリナが芸術展で金賞を取った事について考えていたくらいか。

いつもは賞を取ったら私に電話をしてくるのだが、今回は特にそういうのは無かった。まあアリナの事だし、特に気にとめることでもないかもしれないけど。

ああ、あとの前3人のお見舞いに行った時に、看護師に言われた言葉についても少し考えていたか。

そっちは考えていたら、何故か頭痛がしてきたので直ぐにやめてしまったが。風邪でもひいたかな？ないだろうけど。



で、そんな私が今向かっているのは何処かというと、ゲームセンター。丁度暇してた時に入ってしまったからには、行かない方が難しいでしょ。クレイゲームで取ったぬいぐるみでも転売すればちよつとした小遣い稼ぎにもなる。尤も、雀の涙程だけど。

… いや、勿論転売が最低行為だつてことは理解している。

でもクレイゲームのぬいぐるみ、それも大量に有り余つてる物ぐらいなら別にいいでしょ。

\*

ゲーセンに入って台を見ていたら、一人の少女を見つけた。彼女もクレイゲームをやつてるようだ。

なんとなく彼女のやっている台を見ると、上手くやれば大量に景品を取れそうな台だった。

その子はどうぞせすぐ退くだろうと思って、待っていたんだけど……

目の前の彼女は、どうにもクレイニングゲームが苦手なようだった。全く取れていない。

それだけなら良いものの。彼女、諦めるつもりも無いらしい。

で、ここから予想できる事はただ一つ。

「ふゆう……あれ？もうこんなにお金使ってたの……？」

そう。100円硬貨が湯水の如く使い果たされる結末だけだ。

流石の私も虚しく思えてきた。あと早く退いて欲しい。いや私が他の台に行けばいいだけの話なんだが。

「あの、大丈夫？」

気付けば私は彼女に声を掛けていた。

すると彼女はこちらに気付き、「ふゆう!?!だ、大丈夫です！」と言ってきた。明らかに大丈夫じゃないでしょ。

「そのクレイニングゲーム、随分苦勞しているみたいだけど？」

「ああ……もしかして心配してくれたの？なら大丈夫。いつもこんな感じだから。」

それって大丈夫じゃないのでは。だとするといつもこんなに金を無駄遣いしてることになる。

私でもそんな無駄遣いはしないぞ。

「：．． お手本、見せたげようか？」

「いいの？」

「ええ。というか、断る理由も無いでしょ。」

そうして私は、彼女からクレイジーゲームの操作権を剥奪、もとい交代してもらおう事に成功した。

それじゃ、いつも通りのやり方でいこう。

「こういう台の時は、さつきみたいな感じでやるんじゃないかって．．． あそこら辺をこうやって．．．」

私は彼女に実演しながら取り方を教える。そして．．

「ここで止めて、端っこに引っ掛けて．．． はい。どう？」

見事にワンコインで大量ゲット。

「すごい．．． ! こんなに取れるものなんだ．．．」

「で、どう？ やり方は大体わかった？」

私がそう言うと彼女は頷く。

「なんとなくわかった気がする。頑張ってみるね！」

「そう。ところで…」

私は彼女の指を見て言う。

「その指輪、随分綺麗ね。」

彼女は一瞬驚いた後、「この指輪は…友達に貰ったの。」と咄嗟に思いついたであろう嘘を吐く。

「隠さなくていいわよ。私も同じだから。」

彼女に指輪を見せると、「魔法少女だったんだ…！」とこれまた驚いた顔をする。

「じゃあ、もしかしてこれも魔法で…」

おっと。何やら勘違いしているようだが、私はゲームでそんなズルをする様なクス共チーダと同じでは無い。

「これは単に私の実力よ。」

「あ、そうなんだ…。あの、妙に威圧感がある気がするんだけど…」

「気のせいよ。」

「ふゆう…」

…さつきから思っていたが、その妙に気の抜ける独特の鳴き声？はなんなんだろうか。気になる。

「そういえば、名前聞いてなかったよね。私は秋野かえで。動物とか、植物とか、自然が大好きなの。あとクレーンゲームも。見ての通り苦手だけど……。普段はチームを組んで魔女を倒してるんだ。」

突然自己紹介を始めたので、私も軽く自己紹介を。

「結川リンネよ。よろしく。」

自己紹介と言つても、名前を言うだけの恐ろしく淡泊なもののだが。

「結川リンネ……。どこかで聞いた事ある気が……」

「まあ、魔法少女の間ではちよつと有名なしいから、名前ぐらいは聞いた事あつてもおかしくないわね。」

で。彼女、チームを組んでるつて言つてたか。どのくらいの規模のチームかは分からないが、一応警戒しておいた方が身のためか。

「スマホ持つてる？良かったら連絡先でも交換しない？ここで会ったのも何かの縁つて事だ。」

「連絡先？いいよ。」

——自分でやっつけていて何だが、皆自分の連絡先をほいほい渡しすぎじゃないだろうか？

高校生ならまだいいにしろ、中学生がそれをやるには少々危険意識が薄すぎるのでは。同じ魔法少女だからといって安心していたら、いつか痛い目を見ることになると思うのだが。

---

… という事がありました。

え？かえでとの出会いをこんなあつさり説明するのはどうなのかって？

うるせえ！（豹変）

今回まだまだ色々ありすぎてこういうのはカットしないと動画時間がヤベえ事になるんですよ。ええ。（未来の自分）

いや前後編に分けるのも考えたんですけど、なんかそういうの嫌だったので。

それでは本編に戻ります。

今は一体何をやっているのかと言うと…

お、いました。かりんです。

何故彼女に会いに行っているかというところ、アリナ関連のイベントの為です。

というのも、かりんから最近アリナの様子がおかしいと伝えられたからです。それで、何か知っている事は無いかと尋ねられたためですね。

それで電話で話すのもなんだという事になって、こうして直接会いに行っているわけです。その方が好感度が上がりやすいですね。

「こんにちはなの。それで早速だけど、最近先輩の様子がおかしいの。少し前には何を言っても冷たい反応しかしてくれなくて、更には何も言わずに1ヶ月くらいどこかに行ってたこともあったの。」

どこかに行っていたのはともかく、冷たいのは元からなんじゃないですかね。(名推理)

「いつもそうではあるけど、その時はいつもも増して冷たかったの。どこに行っていたのか聞いてみた時も、『フルガールには関係ないから。』って何も話してくれなかったの。」

はえーそうなんすねー(適當)

じゃあその他に変わった事とか…ない？

「…一つだけあるの。先輩宛の手紙を芸術展の審査員さんから貰ってそれを読んだ時。」



「その時の先輩の顔は…まるで、理解が出来ないとも言いたげな表情をしていたの。」

それら（自分の作品の方向性を真つ向から否定するような内容の手紙を読んだら）そういう顔もするだろう）よ。

で、肝心のリンネはその手紙の内容について聞いて聞いているようですな。

勝手に進めるのはヤメロオ！（建前）ヤメロオ！（本音）

でもかりんも何も知らないようで…

おっと、スマホの通知が来ました。メールかな？

内容はどうやらアリナが自分の作品を壊して回っていることに関するネットニュースの記事の通知のようです。なんでネットニュースが通知で来るんだ…？てかすごいタイミングで来ましたねこの通知…

あれ…？操作が効かない…？（恐怖）

…あ。

もう始まつてる！（ムービー）

フザケンナ！（声だけ迫真）

道理であんな都合のいいタイミングで通知が来ると思いましたよ！

あの頃から：：ムービーだったんやなって：：（絶望）

”かりん。最近学校で誰かにアリナの作品が壊される事件みたいなのは無かった？”

「そういえば一ヶ月くらい前にそんな事があったの。でも誰がやったかは分からなかったなの。」

”やっぱり：：！”

：：これリンネ、アリナの事気づいてませんか？これから何をするか。

”ありがとう、かりん！また！”

オオイ！アリナが自殺しないとかなイスウ！（建前）ヤメロオ！（本音）

いや、実際に欲しくないけども！でもそれされると今後のストーリーが壊れちゃ

ーう！

白タヌキ呼んでアリナの位置を特定しようとするな！

でもその後ちやつかりナイフで殺してるのは認める。

で、リンネが辿り着いたのは… 栄総合学院… ナオキです…  
いやマジでどうすんだこれ。

私にとっての a r t とは、結局何だったんだらうか。

今ではもう分からない。

少なくとも、自らの手で全ての作品をbreak<sup>破壊</sup>してしまった私には、その答えを導き出す事など、不可能なんだろう。

そう思うと、私の今までの作品は、何の価値もないゴミにしか見えなくなってくる。結局私は、最高の作品なんて物はひとつも生み出せてなんていなかったんだ。

だとするならば、あの手紙に書いてあった15歳で終わる才能というのにも頷ける。

だから私は、15歳で最期にすることにした。ずっと前から思い描いていた作品を。last<sup>最期</sup> work<sup>作品</sup>を自らで作り上げて。

その為に、私は学校の屋上に歩みを進める。

——最期のお別れぐらい、リンネにするべきだったかな。

——リンネはどう思うだろうか。…悲しんでしまうだろうか。

——いや、彼女ならきつと分かってくれる筈だ。なら大丈夫。

大丈夫。

…  
大丈夫。

〈やあ。〉

…  
今、声が聞こえたか？

いや、そんな筈はない。今日は学校は休み。この辺りには誰もいないはず。

〈ちよつと、無視しないで貰えるかな。〉

いや、確かに聞こえた。声の方向に目をやると…

そこには白いイタチがいた。まさかこいつが？いや、そんな訳。

〈やつと気づいて貰えたね。コホン。君は『ラストワーク』と称して、自身の死を望んで

いるみたいだけど、君は本当にそれでいいのかい？〉

「… どういう事。」

〈僕達は、君の願いを叶えてあげられる。君は自殺をしようとしていたけど、君が願うなら、その要因を取り除く事もできる。例えば、最高の作品を作りたいなんて願えば、君は最高の作品を作ることができるようになる。〉

「… 獣なんかにはアリナの作りたい物は理解できないんですケド。」

下らない。そんな簡単に手に入る「最高」なんて、私には興味ない。

私はそう言つて目の前のイタチを一蹴し、屋上へ向おうとする。

〈そうかい？僕にはとてもそうには思えないけどなあ。〉

こいつは尚も食らいついてくる。鬱陶しい。

「チツ：：願えばいいんでしょ。なら、アリナの願いは：：『自分だけのアトリエが欲しい』。」

どうせこの後死ぬんだ。ここで何が起ころうが最早関係ない。私はその場で適当に思いついた願いを口にした。

〈アリナ・グレイ。君の願いはそれだね。〉

そう言うのと、イタチは自分に生えた耳のような部分を私の胸に触れさせる。

すると突然、眩い光が辺りを覆うと同時に、自分の中から「何か」が抜けていくような、不思議な感覚に陥る。

そしてさつきイタチが触れていた部分から、宝石のような物が現れる。

〈さあ、受け取ってご覧。それが君の運命だ。〉

\*

結局あの後は、特に何事も無くイタチはどこかに消えていった。邪魔者の居なくなつた私は、直ぐに屋上へ向かつていった。

そして、落下防止用の手すりを乗り越えて、1歩進めば地面に真つ逆さまという所までやってきた。

ここから1歩踏み出せば、全てが終わる。

私の last work がようやく完成する。

呼吸を整える。

そして1歩踏み出そうとしたその時――

「アリナ!!――!?!その指輪……!」

彼女は現れた。

「リン、ネ……?」

どうしてここがわかつたんだ。いや、それよりも。

「どうしてここに來たワケ……?」

「決まつてるでしょう!あなたを助けるためよ!」

リンネは今まで見た事の無いような青ざめた必死な表情で訴えてくる。

「助けるって、どういふ…。」

「あなたが自殺しようとしているのを防ぐのよ。」

「… なんて。」

「私の大切な親友だからよ…！」

「…！」

私はその言葉にハツとする。親友。そうだ。リンネは私の大事な親友なんだ。

——でも、だったら。理解してくれる筈だ。私の last work を。

「リンネ。アリナは last work として、アリナの全てを終わらせるワケ。だから、邪魔を——」

「どうして。」

「——え？」

「どうしてラストワークをやるうと思っただの。」

「それは——アリナには、何も無いって気づいたから。アリナの芸術家としての命は、15歳で終わるって気づいたから。だから自身の最後を飾る為に、こうしているワケ。」

これを話せば、リンネはわかってくれてくれるって思っていた。いや、思い込んでいたんだ。自分の行為に、彼女を悲しませるといふ罪悪感を持たせないために。

「… あの手紙のせいね。あなたが貰ったっていう手紙に何が書いてあったのかは分か



らないけど…… 大方、人を狂わせるだとか、15にもなつてそれに気づかないなら活動をやめろとか、15歳であなたの芸術家としての命が終わるとか言うのが書いてあつたんでしょうけど……」

「あんな物、あなたが気にする必要は無い。あんなの、あなたが嫌いな人が書いたただの悪口よ。」

彼女は「それに……」と付け足す。

「私はあなたの作品を嫌いだと思つたことは1度もない。寧ろ素敵だと思う。そしてあなたの才能が15で尽きると思つた事もない。だからあなたが死ねば……私が悲しむ。」

その言葉を聞いた時、私の目からはいつの間にか涙が溢れていた。

それと同時に、私は私が酷く嫌いになつた。結局私のやろうとしていたことは、ただの独りよがりだつたから。

「……戻りましょう。あなたの後輩が心配してたわよ。」

そう言いながら彼女は1歩こちらに近づく。でも私はそれを拒否してしまふ。

「……やっぱりダメ。アリナは、あなたの側にいいような人じゃない。」

「……どうして?」

「だって、アリナはこんな——!」

言いかけたタイミングで、私は足を滑らせる。  
何でこのタイミングで。

理由は分からない。焦ってしまったんだろうか。

いや違う。私は彼女の側にいい人間じゃない。彼女のその優しさを受け取っていい人間じゃない。私はこんなにも酷い人間なんだから。彼女の気持ちを踏みにじってしまったから。

だからきつと、考えるより先に身体が動いてしまったんだろう。本当のところは分からないけど。

「あ——」

でもそれでも。彼女は私を決して見捨てはしなかった。

「——させるか…！」

\*

「——させるか…！」

彼女が足を滑らせ落ちる瞬間、私は自分でも驚く程に早く反応した。

即座に魔法少女に変身して、魔力を惜しまず全速力でアリナのもとに駆ける。

この距離で手を掴むには間に合わない。

悔しい事に、彼女は既に魔法少女の契約をしてしまっていた。でも、それなら私が守ればいい。

そしてその守るタイミングは早速訪れる。魔法少女はここから落ちても死にはしない。ただ、彼女の場合、恐らく激痛が走り、その後骨が大量に折れて気を失う。

そんな事、防がない訳には行かないだろう。しかも彼女は魔法少女になりたてだ。回復速度も遅いだろう。

でも、私は違う。ならば答えは一つだけ。

「——え？」

落ちたアリナを、柵を乗り越えて私も落ちて、そして腕を掴み……上に投げる。これだと私は頭から落ちることになって、首の骨を折ってそのまま気を失うだろう。でも、痛みを負うのは私だけでいい。

この作戦は……投げ飛ばしたアリナが屋上に落ちることで見事に成功。

そして私は何とか身体を動かして、落下によって怪我を負うことの無い足で着地しよ

うと試みるが：．これは無理だ。

私はそのまま頭から着地して、「ゴキツ」という骨の折れる音と激痛を味わった後、視界は暗転し、意識も失った。



えー。

これからどうなるんでしょうか。

取り敢えず画面が暗転してセーブ画面が出てきたところで今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## Part. 10 病院送り

夢を見た。

私が誰かを殺している夢。随分と不吉な夢だ。

オマケにその時の私はどうにも気が狂っていた様で、「違う：：これは：：私が：：じゃない：：皆の：：」と讒言うわごとのようにつぶやきながら、恐らくもう既に息絶えているであろう男の首に執拗にナイフを突き刺し続けていた。

夢は自身の記憶や状態に基づいて作られると言うが、私はこんな夢を見る程病んでいゝるつもりは無いし、無論こんな事があつた記憶も持ち合わせていない。

所詮は夢だから気にする必要も無いし、すぐに忘れてしまふだろうが、その夢は何故だか私をそうさせる気にならなかつた。

「あなたは何も知らなくていい。それがあなたの為なら。」  
どこかから聞こえてきた、私では無い声によつて。

\*

「リンネが屋上から落下した。」

その報せを聞いて、私は直ぐに彼女の元へ向かった。

場所は里見メデイカルセンター。リンネはそこに運ばれたみたい。

魔法少女はソウルジエムを砕かれなければ真の意味で死ぬ事は無い。それは分かっているけど、それでも親友が大怪我を、それも普通の人間なら死ぬようなほどのものをして、平気でいられるはずがない。それはみふゆも同じだった。

みふゆはあの一件以来、私に姿を見せる事があまり無くなった。：：それもそうよね。大切な仲間が死んで、自分があの悪魔に騙されていた事を知り、とどめのチームの解散。これで普通にしてろなんて、無理な話だわ。

そんな状態の時に、親友が屋上から落下しましたなんて言われたらどうなるか、予想は簡単だった。

『やっちゃん。：！りっちゃんまでいなくなってしまうたら、ワタシ、どうしたら。：！

「！」

『大丈夫よ、あの子は。あの子がそう簡単にいなくなるわけないでしょ？』

予想どうり、私が出た時、みふゆは軽いパニック状態にあった。私が落ち着かせたから何とかなったが、あの状態のまま放置しておいたら、どうなっていた事か。考えただけで恐ろしい。

「着きましたよ、里見メディカルセンター前です。代金は2700円です。」

「ありがとうございます。」

「どうも。ご利用ありがとうございました。」

タクシーを捕まえて病院へと向かう。幸い道は空いていたから渋滞に嵌らなくて良かったわね。

「リンネさんですか？それなら——」

看護師にリンネの病室を聞き、みふゆを連れてそこに向かう。

どうやら緊急手術はもう既に終わっていたようで、しばらく安静にしていたら退院出来るらしい。



病室の前に着き、扉を軽くノックする。

少し待った後、「どうぞ」という声が部屋の中から聞こえてきたので、扉を開ける。その声はリンネのものでは無かったけど、多分まだリンネが起きてないから別の人が言ってくれたんでしょう。

部屋に入って目に入ってきたのは、2人の少女。ひとりはピンク色の髪をした恐らく中学生の少女。もうひとりは緑色の髪をした外国人の少女。

どちらも私が会ったことの無い人達だった。

私は少し間をおいた後に2人に挨拶をした。

「初めまして。2人はリンネの友達かしら？」

「はい、そうです。お2人も？」

「ええ。。。名前は七海やちよよ。」

私はみふゆにも名前を言うようにアイコンタクトを送る。

「。。。梓みふゆです。」

やはりと言うか、みふゆはいつものような雰囲気です。挨拶をすることは無かった。

そして、ピンク髪の子が私達に合わせて名前を言う。

「環いろはです。」

ピンク髪の子——環さんは自分の名前を言ったあと、隣でずっと俯いている子に聞こえないように続けて言う。

「隣の子は、かなり傷付いてるみたいで……私が来た時はずっと泣いてたみたいなんです。だから……その……」

環さんは申し訳なさそうな顔をして私達に言う。

大丈夫。分かっている。親友を失ってしまうかもしれない辛さを。私は痛いほどによく理解している。

それは隣にいる親友も同じ。「それなら心配しなくても大丈夫です……。ワタシも彼女の気持ちがよく分かりますから。」と環さんに言っていた。

そう。だからこそ、私はチームを解散した。私の固有魔法は恐らく”仲間を犠牲にして生き残る”という物。

この予測が当たっていたとしたら、私がチームを組み続ける限り、仲間を失ってしまうことになる。私はもう仲間を……親友を失いたくない。たとえ永遠に一人で戦い続けることになったとしても、その孤独の辛さは仲間を失う辛さより何倍もマシだ。

… だと思っていたのに。チームの一員ではない筈のリンネが、今こうして重傷を負っている。

——もしも。”仲間”の定義が共に行動に行動していることでは無いとしたら。

——もしも。”仲間”の定義が自分に協力してくれる事だとしたら。

私は、彼女たちが傷つくのを、死んでいくのをただ傍観することしかできないというのか。

だとしたら、私は——

「やっちゃん。大丈夫…。ですか？」

「え？」

「ソウルジェムが少し濁ってますよ。」

そう言われて自分の指輪…。ソウルジェムを見ると、だいぶ濁っていた。

少し考えすぎていたかしらね。いや、それとも濁っていたから考えすぎてしまったのか。

それはわからないけど、あまりいい傾向では無いわね。

私は二人に見られないようにそつとグリーンフシードを使った。

——そしてもう一人の子にも。

「……?……何?」

緑色の髪の子はこちらを向いて疑問符を浮かべる。

入ってきた時には気づかなかつたが、彼女も魔法少女だった。そして近くに来てみて気づいたけど、彼女のソウルジェムも私と同じく相当に濁っていた。それこそ今すぐに魔女化してしまう位には。

「あなたのソウルジェム、かなり濁っていたわよ。」

「ソウルジェム……?」

「ええ……あなたが悲しんでいる姿を見たらこの子、大分落ち込むと思うわよ。だから……せめて、この子が起きた時ぐらいいは笑顔でいられる様にしましょう。私もなるべく起きた時は笑顔でいられる様に頑張るから。」

「……ああ……そう、だヨネ。リンネは……」

そうやって彼女はいくつか独り言を呟いた後、「大丈夫」とだけ言ってまたリンネの方

を向いた。

その顔は、さっきまでの様な悲しさは少しだけ和らいでいるように見えた。  
丁度その時。

リンネの顔がぴくりと動く。

「ん……………あ……………？」

「リンネ？」

「……………ここは……………？」

ようやく、リンネが目を覚ました様だった。



どう足掻いてもガバしか待ち受けていない実況プレイ、はーじまーるよー。  
という事で前回の続きからです。

前回はリンネが色々やってしまったせいでアリナが屋上から落下せず代わりにリンネが落ちるとかいうトンデモ展開になりました。で、画面が暗転したのですが……おつと、短いロードを挟んだらまたイベントですね。声が聞こえます。

この声は……アリナっぼいですかね。

目を開けると……何の光!?

クオクオア……里見メディアカルセンターのようです。気絶した後には運び込まれたんですかね？

で。

こ→こ←にいるメンバーですが…

・ 梓みふゆ

・ アリナ・グレイ

・ 環いろは

・ 七海やちよ

ええ… (困惑)

なんだこの面子は… たまげたなあ (驚愕)

ええーとですね… お察しの通り、本編開始前にこいつらが出会ったって滅多にないんですよ。

ということは必然的にガバる確率が上がるってことです。(絶望)

… まあなんとかなるでしょ。(適当)

さて画面ではお見舞い組からいろいろな言葉をかけられた後、特にやることの無い病院生活が始まるうとしていますがムダに長かったのでカット、倍速です。（無慈悲）

さて、いい感じの時間が空いたので…



みなさまのためにも

気になった事をまとめます。

以下がその一覧です。

- ・リンネが落ちた後にアリナが救急車を呼んでここに運ばれた
- ・アリナは自責の念に駆られている（推測）
- ・お見舞いに来た4人はやちよとみふゆ以外初対面
- ・退院は数週間後

この中で特に気をつけておきたいのは2番目の”アリナは自責の念に駆られている（推測）”ですね。

これでアリナが病むとリセット不可避（迫真）ですので：

あとここで4人が会うっていうのも結構後々響いてくると思います。んにやび…

まあそこら辺はおいおい何とかするとして、まずは目先の事について考えましょう。

まずはアリナがマジウス入りしない可能性について。これは恐らく大丈夫です。多

分ですが、お見舞いの過程で灯火達と会うことになるでしょうし。

次。いろはの契約ですがこれも特に気にする必要も無いでしょう。バタフライエフェクトに関してはハードでもプレイヤー側が何かしない限り確定で発生しますので。

次。マジウス結成。これ自体も特に関わるつもりはありません……す。

このイベントですが、病院組が契約した辺りで3人のもとに駆けつけると病院組はかなり、アリナは若干信頼度が上昇し、更にマジウスに入れる確率が大幅に上昇します。ので今回はこれを利用します。

方法ですが、3人が契約する辺りでアリナと共に行動します。するとあら不思議。丁度そのあたりの時間帯に唐突に病院組のいる方向へと向かいます。いやあ、一体何でなのでしょうかねえ？（棒読み）

メタ的に言うところの仕様を利用することで信頼度上昇、そしてマジウス入りを狙うという事です。

ただし実際にマジウスに入るのもう少しあとです。

次。アザレイベントについて。このイベントは正直言ってやるかどうかは現状決

まっています。

と言うのも、アザレア組と関わる必要性があまり無いんですよ。なんなら最悪の場合アザレア組を神浜から追い出す形になる事もよくあるので…

まあ周囲からの信頼度が上がったたりボーナス経験値が貰えたりするのでやるに越した事は無いんですが。

ちなみに団地組には一切関わるつもりはありません。(無慈悲)

エンド条件に入っていないので関わって余計なガバを引き起こしたら面倒なので…心を繋げる力？あれが無くても構いません。

混沌さんも別の解決方法を用意しているので失敗してもそこまで問題ないですし。

それでは画面の方に戻りましょう。

さて、私が話している間にゲーム内では既に2週間が経過しました。早いですね。  
(小並感)

どうやらもう退院が出来るようです。

早えーなオイ。(語録無視)

(魔法少女だし)ま、多少はね？

で、画面では無事退院して家に帰っていますね。

とはいえマジでやる事が無くなりました。どうしましょう？（無計画の解説プレイヤーの屑）

リンネはリンネでコーヒー飲んでますね。入院中飲めなくてクツソイライラしてたんでカフェイン中毒ですねこれは。間違いない。（名推理）

それではやる事も無いんで寝て体力が回復したら適当にアリナの様子でも見に行きますかね。

アリナはあたおかになっっているのか、はたまたガバに侵されているのか…

それでは見に行きましょう…

---

私は絶望した。

彼女が自分の命を投げ出してまで私を助けてくれた事実には

私はあなたに救われるほどの人間では無いのに。

どうして？

私は暫くそこから動けなかった。ただ呆然と立ちつくしていた。

頭が動きだしたのはそれから少し後のこと。救急車を呼ばなきゃと言う声が頭の中で響いた。

私はすぐさまスマホを取り出し119とダイヤルを入力する。

それからの事はよく覚えていない。必死だったからだろうか？それとも混乱していたからだろうか？

ただ、一つだけ覚えている事は、下に落ちたリンネを見て、ああ、これは助からないなと思うってしまった事だった。

そうして私は、ようやく実感が湧いてきて、そして涙が溢れてきて。

ただ自分をずっと責めていた。

こんな感情は……初めてだった。

\*

結果から言うと、リンネは生きていた。医者が言うには当たり前所が良かったらしい。とてもそうには見えなかったけど。

でも、その言葉は本当だったんだろう。リンネは今こうやって生きているのだから。

「アリナ、その指輪の事なんだけど……」

リンネが突然に話しかけてくる。指輪……と言うと、私が契約した後に出てきた宝石の事だろう。よく見ればリンネも色は異なるものの、私と同じ指輪をしていた。

という事は、もしかしてリンネも魔法少女……なのだろうか。

そういうえば、私を助けてくれた時も、一瞬服が変わっていたような気がする。

「この指輪がどうかしたワケ？」

私は努めていつも通りに返す。私が落ち込んでいるところを見せたらリンネまで落ち込んでしまうだろうから。

「あなたはその指輪が何か、知ってる？」

…… どういう事？

私がそう言おうとすると、誰かの声に遮られる。

「ああ、それなら私が説明するから大丈夫よ。」

「…… いいの？」



「ええ。あなたはゆつくり休んで頂戴。」

「…そうね。」

「そういう事だから、アリナさん… だったかしら？ちよつと着いてきてもらつていいかしら。」

その流れで私は七海やちよ… と言つていたか。の後を追い、病院の屋上に出てきた。

「それで、説明したい事つて何なワケ？」

私がそう言うと、彼女は周りに人がいない事を確認した後、自分の指輪を宝石へと変化させる。

「それは…」

私も彼女と同じように、自分の指輪を宝石へと変化させる。

ただ、学校で見た時よりも、ほんの少しだけその輝きが鈍つてるように感じた。

「あなたは魔法少女が何なのか、ソウルジェムが何なのか知らないのよね？」

「まあ、そうだケド。」

なぜ彼女がその事を知っているのだろうか。

そんな考えを見透かしたかのように彼女は付け足す。

「リンネに聞いたのよ。」



魔女を殺せるだけの力を。

ならばどうする？ 答えは単純明快だ。

「その魔女は、どこに居るの？」

「魔女は普段は結界の中に潜んでいるわ。魔女は夕方から夜にかけて活発になるから……」

「その結界はどこにあるの？」

私は少々食い気味に聞く。

だが、その質問に私の欲しかった答えは帰ってこなかった。

「あなた、まさか一人で魔女を倒しに行くつもり？」

「そうだケド。何か文句あるワケ？」

その言葉に彼女は頭を抱えた。

「……魔女が活発になるのは夕方から夜にかけてって言ったわよね。それに……」

「それに、リンネはそうそう魔女にやられる様な子じゃないわ。だから、もしもあなたが、リンネが魔女に殺される事を心配しているなら、大丈夫よ。」

「……」

凶星だ。

確かにリンネは何年も魔法少女をやっているんだろう。なら確かに、魔女に殺される

なんて事は無いのかもしれない。

でも、そういう事じゃない。

「アリナが言いたいのはそういう事じゃない。… 殺そうとしに来ているのが、気に食わないワケ。」

「… そう。別に私はあなたを止めるつもりは無いわ。ただ、無理はしないでね。そして、リンネを悲しませないであげて。」

「言われなくても。」

そうして私は魔女の探し方について教えて貰った後、病室に戻って行った。



警察だ！（気さくな挨拶）

「リンネ！身体は大丈夫なワケ？」

ということであリナに会いに来ました。

大丈夫だつて安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

「本Read当y?良かった…」

ところで、魔法少女生活は大丈夫ですかね？

「それなら大丈夫だから…。だからリンネは安心していいワケ。」

そんなんで安心できる訳無いんだよなあ…

それもその筈アリナグレイと言えばまさにガバの代名詞。

（そんな簡単に安心でき）ないです。

取り敢えずアリナに近況でもきk——

今回はここまでです。  
ご視聴ありがとうございました。

Part. 11 Q. なんてガバに気づかないんですか？

お前も魔法少女になるんだよ！な実況プレイ、はーじまーるよー。  
という事で前回の続きからです。

前回はアリナに近況を聞こうとしたところ、なぞのちから（編集）によつて強制終了させられましたので、早速聞いていきます。

「最近？um<sup>うー</sup>m…魔法少女になってからは別に何も無いカナ？むしろ——  
なワケ…フツツ。」

字幕さんすら聞き取れないぐらいちつさい声で喋るのやめろ。（やめろ）  
しかもなんか笑つてたしやべえよ…やべえよ…

いやアリナのことだから平常運転説が微レ存…？

「…まあ、つまりアリナがリンネを守つてあげるカラ。」

ええ…（困惑）

（唐突すぎて）笑つちやうんすよね。

「な、なんで笑うワケ!？」

おっと好感度：：？

こんなんで下がってたらたまつたもんじゃ無いですが、まあ適当に”なんでもないと答えておきましょう。

それと魔女についてどういう感情を抱いているか聞きます。これで『サイコーだヨネ!』とか言ってきたら通常営業です。

「魔女? アイツらは：： ホンツトにサイアクだヨネ。皆殺しにしてやりたい位には。」

ええ：： (困惑)

なんか別のベクトルにおかしくなっていないですかね? (名推理)

「アイツらはリンネを襲っていたんでしょ? そう考えると、怒りが込み上げてくる angryなワケ。確かに

アイツらを初めて見た時、アリナの中で何か感じるものはあつたワケ。でも、その感情はすぐに消えたワケ。だってアイツらはリンネを殺そうとしている。なら生かしておく訳にはいかないでしょ? ましてや、artのmaterial材にするなんて以ての外なワケ。だから：： 全員殺す。」

ヒエツ：：

アリナが魔女絶対殺すマンになるとかこマ?



… これマジウス入ってくれますよね？

… じゃあ、あとは適当におかしな所さん!?は無いかとか、そんな感じの事をいくつか聞いたら去りましょう。

えー、そして後はマジウス結成まで暇なので、またレベル上げでも… っつて、そういえば最近全然絵書いてませんでしたね。描かなきゃ(使命感)… っつて、まだ欲求度が減ってませんね。じゃあまた後でいいですか。

なら適当に… おっと、いろはから電話ですね。出しましょう。

「あつ、もしもし?リンネさん?」

おつすつす、どうした?

「その、う、ういの事について話したいことがあつて。」

ういの事… ああ、そういえばもうそろそろいろはが契約する頃ですね。

となると病気の事でしょうか?

「はい、そ、そうなんですけど… その、実は… いや、やっぱり直接話しましょう。今つ

て会えますか？」

(予定は) おっ空いてんじやーん。

「本当ですか？ じゃあ——」

「その… うい様の事なのですが…」

私は病院にきていました。なんでも、ういの病気に関しての事について伝えたいこと

があるみたいで、両親と共に来ていました。その時は、てつきり良い知らせだと思っていました。その言葉を聞くまでは。

「大変申し上げにくいのですが、うい様の余命はあと半年程と思われれます。」

「…え？」

ういの余命が半年？

余命？

半年？

ういはあと半年しか… 生きられないってこと？

どうして？

どうして？

どうして。

「我々も手を尽くしてはいるのですが… 現代の医学では、治療する事は出来ないのです… 申し訳ございません。」

看護師さんの申し訳なさそうな声が室内に響き渡る。

現代の医学では治療できない。

それはつまり、奇跡か魔法でもない限り、ういが治ることは決して無いということでした。

\*

「お姉ちゃん?」

ういに話しかけられハツとする。

ういの顔は少し心配気。

「うい、どうしたの?」

「その… お姉ちゃん、なんかいつもと違うみたいだったから。何かあったのかなって。」

「…」

凶星だ。でも、それに気づかれてはいけない。

「何でもないよ。ただ、ういの病気は大丈夫かなって。」

「うん！大丈夫だよ。」

「よかった。でも、具合が悪くなったら、すぐに言うんだよ？」

ういの笑顔が心に刺さる。

なんで、ういがこんな目に遭わなければいけないの？

私達が何をしたって言うの？

でも、そんな事を思ったところでどうにもならない。

そんな事を思ったところで私には何も出来ない。

私は、一体どうすればいいの？

——リンネさん。

あの人はういにとても良くしてくれてたっけ。

「一緒にお見舞いに行きませんか?」と言うと、必ず了承してくれるし、待ち合わせにはいつも私よりも早く来てる。それで、私が”多少遅れるぐらいなら全然大丈夫なので、そんなに早く無くても大丈夫ですよ”と言ったら、”別にあなたが気にする必要は無いでしょ?”と言われてしまったり。

それとこの前も、うい達にメロンを持ってきてくれたらしい。

そういえば、あの人にはまだういのことを言っていなかったっけ。

言うべきなのかな?それとも、秘密にしていた方がいいのかな?

∴ やっぱり、言っていあげべきだよね。

大事に思っている人が突然いなくなっちゃうなんて、そんなの、私には悲しすぎるから。

\*

結局、あれから3週間が経ってしまった。

勇気を出して伝えようと思つた直後にリンネさんが入院しちゃうなんて。でも生きていて本当に良かった。リンネさんまでいなくなっちゃったら、私にはちよつと辛すぎるから。

そしてリンネさんが退院した今。ついに言う時が来た。

… 急すぎるかな？リンネさんは昨日退院したばかりだ。色々ごたつてるかもしれないし、それに…

… ダメ。考えると不安なことが幾らでも出てきてしまう。

私は言うつて決めたんだ。言わなければ、その時が来た時により悲しんでしまう。

私は意を決して電話をかける。

自分の事ではあるけど、リンネさんが相手だと、妙に行動が出来てしまう。学校の皆と接する時はこんな感じじゃないのに。灯火ちゃんやねむちゃんと同じ感じで、なんというか、自然と行動できるというか、何というか——

「…もっもっもっ」

「あつ、もしもし?リンネさん?」

：： かかったことに気づかなかつた。

こつちから電話をかけたのに、これはちよつと申し訳ない。

「どうしたの?」

「その、う、ういの事について話したいことがあつて。」

声が震えてしまう。

「：：もしかして、病気のこと?」

一瞬声色が曇つたように感じた。

「はい、そ、そうなんですけど：：その、実は：：いや、やっぱり直接話しましょう。今つ

て会えますか?」

「ええ。丁度暇になつたところよ。」

「本当ですか?じゃあ■ ■ ■ 駅で待っていてくれますか?」

そういつて私は、大学前の駅を待ち合わせ場所を選び、早速向かうのだった。



と云うことで駅前に着きました。ここでいろはを待ちます。

因みにですがいろはにういの病気について相談されることですが、好感度が一定以上あるならば別段珍しいことではありません。あまり気にする必要もないでしょう。

「リンネさん、待たせちゃいましたか？」

おっと、来ましたね。

(全然待って) ないです。(二回目)

取り敢えず近くのカフェにでも寄ってそこで話をしましょう。

「わかりました。」

それではカフェにイキますよ〜イクイク……………

又ッ！（到着）

それじゃあ適当にコーヒーでも注文したら席に向かいます。この時にいろいろ分の料金も払ってあげるのがポイントです。こうすると若干好感度が上がります。尤も雀の涙程度ですし、第一ういの病気の相談される時点ですでに好感度はだいぶ高いと思われませんが。

席に座ったらいろいろ話が話し始めるまで待ちます。

ただしあまりにも話さないようだったらこちらから話しかけます。

んじゃ頼んだコーヒーでも飲んで待ちます。

……………

……………

……………

うん！おいしい！

……

……

……

まだ時間かかりそうですかね？

……

……

……

あくしろよ（半ギレ）

「あの……それで、ういの病気の事、なんですけど……」

ようやく話し始めました。

ちよつと遅かったんちゃう？

「実は、その……とても深刻な状態らしいんです。」

「お医者さんが言うには……現代の医学では治すことは出来ないと言うことらしいんです。」

「……というか、その……ああ、ええと……」

随分と言うのを渋っていますねクオレハ……

「：：ういの、余命が：：あと半年って：：言われ、たんです。」  
あつそつかあ：：

まあ知ってたんですけどね、初見さん。

取り敢えず、適当に慰めておきます。

大丈夫だつて安心しろよ。へーキへーキ、へーキだから（無責任）

「え：：で、でもお医者さんは：：」

俺がなんとかする（無責任）から見とけよ見とけよ。

「！！：：そうですよね。まだ諦めちゃいけない。もしかしたら、病気の治療法が見つかるような奇跡が起きるかもしれない。魔法をかけたみたいにな、ういの病気が突然治るかもしれない。それなのに、最初から治らないって決めつけるなんて：：酷いですよね。」  
「私も：：希望を持ってみます。」

おつとここで固定選択肢。

（ここは：：これを選んでおきましょうか。）

というわけで別れてきました。

因みにですがあそこで魔法少女の話を持ちかけると爆速で契約してくれます。RT  
Aではよく使われる手法ですね。サクサクプレイの場合も使われたりします。

が、しかし今回は個人的にまだレベル上げをしておきたいので言いませんでした。こ  
いついつもレベル上げしてんな。(自戒)

て事でレベル上げに行き

ました。(ました工法)

厳密には経過報告ですが。

何故そんな事をするかという、ちよつとこれを見てください。

ステータスの所に”魔力活性化”というバフが付いているのがわかるでしょうか？  
このバフの効果は全体的にステータスが微増するという、一見すると有用なものに見えます。

しかしこの状態で調整屋に行つてみると…

「ちよつと今後の調整について話したいことがあるんだけどいいかしら〜」

という風にみたまさんに言われました。

このイベントですが、先程の”魔力活性化”が付与された状態で調整しようとするとなんか発生します。

「… まずあなたのソウルジェムなんだけど、少し不安定な状態になっているの。」

いつに無く真面目な雰囲気ですね。

「本来はこんな事起こらないのだけれど、あなた、ここ最近かなりの頻度で調整をしているから… それに影響していると思うの。」

はい、ここであのバフの付与条件を確認してみましよう。

その条件とは、一定期間内に調整でステータスを非常に多く上げ、その状態で一定以上レベルが上がると発生します。

あつ… (察し)

これです。悪影響を及ぼすバフって何だよ。(哲学)

「もしこのままの頻度で調整を続けていたら、ソウルジエムに何らかの影響が出てしまいかもしれないわ。でも、頻度を少し減らせばきつと大丈夫だと思うの。だから、今日は取り敢えずやめておいて、また今度来てくれるかしら？」

「はえーそんなすねー。」

「…どうしたのかしら？」

(調整) あくしろよ。

「…は!? 今の話聞いてなかったの? あなたのソウルジエムに悪影響が出るかもしれないって…」

(別に構わ) ないです。

「…わかったわ。でも、本当に危ない状態になったら調整は止めさせてもらうから。それでいいかしら？」

基本的そんな状態にはならないのでヨシ! (現場猫)

さて、それではポイントを速力と攻撃力に4:1の割合で振ったらバフの欄を確認し

ましよう。

するとさつきまでであった”魔力活性化”が無くなっており、代わりにデバフの欄に”魔力暴走”が追加されました。やばそう。(小並感)

しかしこのデバフ、実は現段階では完全に無害です。

”現段階では”ね…

「…あなたは、どうしてそこまでして…」

いやみたまさんは記憶覗けるからわかるんじゃないですかね？(名推理)

それでは調整屋でのイベントも終わりましたしレベル上げを再開します。

そしてその様子を1.6倍速でお届けして行きます。



私は今、非常に不安になっている。ういの病気についていろはが話したいと言ってきた。・恐らく、あまりいい知らせではないだろう。でなけりや、何故いろはの声は震えていた？

もしも。ういの病気が治らないのだとしたら。

もしも。ういの病気が深刻化しているのだとしたら。

私はどうする事もできない。

治療魔法は、あくまでも自分の怪我を治すモノ。願いの内容によっては、病気を治療

できたり、他者に作用させる事もできるだろうが、私の願いは他者を呪うもの。そんな事は出来やしない。

「…着いたか。」

そんな事を考えていたら、何時の間にか駅にたどり着いていた。

念の為ソウルジエムを確認しておく。

こうやって暗い考えをしまっている時は、ソウルジエムが穢れている事が多い。

…今回は大丈夫そうか。

そうやって確認した後すぐ、声をかけられた。

「リンネさん、待たせちゃいましたか？」

声のする方向に振り向くとこちらにやってきたいろはがいた。

「いや、私も今来たばかりよ。」

しかし、ここで立ち話もなんだな…

そういうえば、近くにカフェがあったか。そこに行くとしよう。

「取り敢えず移動しましょう。近くに喫茶店があった筈だから、そこまで。」

「わかりました。」

\*

カフェに辿り着き、私はカフェ・ブラベを、いろははカフェラテを注文し、席に着く。しかしいろはは中々話そうとしない。やはり、言い難い事なのだろう。

私はブラベに口をつける。

やはりここのブラベは美味しい。

昔海外に行った時にたまたまブラベを飲んでから好きになった。そしてここのコーヒーはどれも本場の味に似せてある物ばかりで、私のお気に入りの店の一つだ。そのぶん、値段が張るのだが。

チラリというはの顔を見ると、その表情は先程までと同様に暗い。

もしかしたら、今の私もあんな風になっているのだろうか？

しばしの沈黙。

それは数秒だったかもしれないし、何十分だったかも。いや、流石にそれはないか。しかし、そう思えてしまう程に、この沈黙は長く感じられた。

「あの…それで、ういの病気の事、なんですけど…」

ようやく、いろはの口が開かれる。しかし、私はそれを待っていたにもかかわらず、そ

れをあまり嬉しくは思わなかった。

「実は、その：：とても深刻な状態らしいんです。」

当たって欲しくは無かった予想が当たっていく。

「お医者さんが言うには：：現代の医学では治すことは出来ないと言うことらしいんです」

いろはの口から紡がれていく残酷な事実。

「：：：というか、その：：ああ、ええと：：」

：

「：：ういの、余命が：：あと半年って：：言われ、たんです。」

余命。

流石にそれは：：予想外だった。

なんと声をかけてあげればいい？

私が予想していたのは、あくまで病気が治らないとか、深刻になつてるとかだ。それならまだ良い。その分私達が支えてあげればいいからだ。でも余命はどうだ？支えてあげたところでどうにかなるものではない。どうしようも：：

：：いや、ここで諦めてどうする？

何かある筈だ。きつと：：

「ういは：： 私が何とかする。」

「え：： で、でもお医者さんは：：」

「：： 医者が何よ。医者に余命の宣告をされたからと言って、必ず死ぬとは限らないでしよう？ だったら、私は最後まで諦めない。」

我ながら、随分と無責任な言葉だ。

「！！：： そうですよ。まだ諦めちゃいけない。もしかしたら、病気の治療法が見つかるような奇跡が起きるかもしれない。魔法をかけたみたいにな、ういの病気が突然治るかもしれない。それなのに、最初から治らないって決めつけるなんて：： 酷いですよね。」

「私も：： 希望を持ってみます。」

しかし、そんな無責任な言葉でも、今の彼女には言つてあげなければならなかった。「治るわよ。奇跡も魔法も、あるのだから。」

\*

結局。ああは言つたものの、私にはどうすることも出来ない。

「医者の言うことは大抵正しい。恐らくういはあと半年で死ぬ。認めたくは無いが…  
どうする？どうも出来ないのか、クソ…」

「これで12体目…」

「私はその苛立ちをぶつける様に、魔女をひたすらに狩っていた。

…  
そろそろ調整に行くか。

「いらつしや〜い」

「早速だけど、調整お願い出来るかしら。」

「その前にいいかしら〜」

…  
…  
「なんだ？あまり面倒な話はご遠慮願いたいんだが。

「ちよつと今後の調整について話したいことがあるんだけどいいかしら〜」

なんだ、そんな事か。

「ええ。良いわよ。」

「… まずあなたのソウルジエムんだけど、少し不安定な状態になっているの。」

突然彼女の雰囲気が変わる。

ソウルジエムが不安定な状態… どういう事だろうか。

「本来はこんな事起こらないのだけれど、あなた、ここ最近かなりの頻度で調整をしているから… それに影響していると思うの。」

「もしこのままの頻度で調整を続けていたら、ソウルジエムに何らかの影響が出てしまうかもしれないわ。でも、頻度を少し減らせばきつと大丈夫だと思うの。だから、今日は取り敢えずやめておいて、また今度来てくれるかしら？」

… なるほど。まあそんな事言われたところで帰るつもりは毛頭ないのだが。

「… どうしたのかしら？」

「どうしたのって、早く調整して頂戴。」

「… は!? 今の話聞いてなかったの？ あなたのソウルジエムに悪影響が出るかもしれないって…」

彼女、本気で焦っているな。

その気持ちは、調整をした者に悪影響が出たという噂を広めたくない商売脳からか、

それとも単なる彼女の優しさからか。

どっちでもいいが。

「別に悪影響が必ず出るとは限らないでしょ?」

必ず出るとわかっていれば、「かもしれない」なんて言い方はせずに断言するだろう。

「それに、悪影響って言っても、すぐに死ぬようなものじゃ無ければどうって事ないわ。

だから良いでしょ。」

「…」

「それに、こっちは一応は客よ。客が適切な対価を出してるのに、サービスを施さない店がどこにあるのよ。」

「… わかったわ。でも、本当に危ない状態になったら調整は止めさせてもらうから。それでいいかしら?」

最後は強引だったが、何とか調整は受けられそうだな…

私はグリーンフシードを渡し、調整をする。

「ありがとう。また今度来るわ。」

「… あなたは、どうしてそこまでして…」

「あなたは記憶を覗けるんですよ? なら、わかるんじゃないの?」

そう言って、私は調整屋をあとにした。



「：： 私は誰の記憶でも覗ける訳じゃないのよ。特に、あなたみたいに障壁を貼ってる人はね：：」

最後に放った言葉は、私の耳には入らずに。



なんで等速に戻す必要があるんですか？

どうやら電話がかかって来たようです。お前いつつも電話かかってきてんな。

「もしもし、リンネさん！聞いて下さい！」

また君か壊れるなあ。

まあこの時期で、尚且つこんなに嬉しそうに電話してくるってことは、もうアレしかないでしょう。

「ういの……ういの病気が治ったんです！」

やったぜ。

リンネも嬉しそうですね。

しかしまあ、それはつまりいろはが魔法少女になったと同義でもあります。

……と言いたいところですが、極稀にいろは以外の誰かがういの治療を願ったという事があるので、念の為に確認しにイクゾー！デッデッデデデ（カーン）

という事でいろはの元に着きました。

「リンネさん！さっきも言いましたけど、ういが：：」

なんか言ってますがスルーして指輪チエック！

指輪ヨシ！（現場猫）

それではいろはに：： ってなんでリンネ絶望してるの？（困惑）

やべえよ：： やべえよ：： ってなったところで今回はここまでです。ご視聴ありが

とうございました。

## Part. 12 何者かもわからない

『ういの：：ういの病気を治して——！』

私は願った。絶対に起こりえないはずの奇跡を。

私は変えた。捻曲がることのないはずの運命を。

その代償は、一生私に付きまとう物だった。

でも、それでも私は構わなかった。

だって、私はういに死んで欲しくなかったから。

これでういが助かる。灯火ちゃんも、ねむちゃんも悲しまなくて済む。リンネさんも喜んでくれる。だからこれで良かった筈なのに。それなのに。

「いろは：：まさか、契約を：：？」

どうして、目の前のリンネさんはあんな顔をしているの？

そもそも、どうして契約のことを知ってるの？

「私が：：私の所為か：：私があんな事を言ったから：：いろはは：：」

「リンネ：：さん？」

あんな事って：：なんだろう。私には心当たりがない。

とりあえず、落ち着かせるべきだよね。

「大丈夫、ですか：？」

「いろは。あなたは契約をした。その内容は、恐らくういの病気を治すこと。」

：：： なんで、知ってるんだらう。

「はい：：： そうです。きゆうべえに願って、魔法少女になる代わりに、願いを叶えてもらいました。」

「やっぱりね：：：。」

「あの、なんでその事を知ってるんですか？」

私が気になっているのはそこだ。どうして普通の人のリンネさんが知って——

—— いや：：： 本当にリンネさんは普通の人なの？

「これを見て。」

そう言っつてリンネさんは自分の左手を見せてきました。

そこにはソウルジェムがはめ込まれた指輪がありました。

「リンネさんも、魔法少女だったんですか：：：！？」

「：：： ええ、そうよ。」

リンネさんが魔法少女だったなんて：：：

じゃあ、もしかして魔女と戦うことについて心配してくれてるのかな？

「あの、もしも私が魔女と戦うことについて心配してくれているんだったら、私は大丈夫です。危ないってわかっていて、契約したんです。それに、ういが苦しむのはもう見たくなかったんです。」

これは本当。私はういのためなら、命だつて懸けられてしまう。

「そう…。ね。そうよね。あなたはいつもういを…。いや。だとしても、いろはを魔法少女にしたのは私の所為…。私があの時探していれば…。」

「リンネさん!」

私は思わず叫んでしまう。

「私が契約したのは、リンネさんのせいじゃありません。私の意思で、契約したんです。だから、リンネさんは悪くありません。」

「ツ! 違! …! あの時…。いろはがういの事を話してくれた時に、私が治療できる方法をもつと探していれば…。!」

「違くありません! …。リンネさんは、必死になつてういの治療法を探してくれていたんですよね。でも、それでも見つからなかった。ならリンネさんは悪くありません。だつて頑張つてくれていたんですから。」

リンネさんは俯き、黙っていた。

「それに、私はこの選択を後悔なんてしていません…。だから、リンネさんがそんな顔

をする必要はありませんよ。」

それを聞いたリンネさんは黙っていた。私も黙っていた。

正直に言ってしまうと、もう言葉が出てこなかったただけなんだけど……

「そうね……ごめんなさい、勝手に騒いでしまつて。」

少し経つた後にリンネさんはそう言つてきました。

「あーあ、みつともない姿見せちゃつたわね。そうよね。いろはは嬉しくて、ういも死なずに済んだ。それでいろはが危険な目に遭うなら、私がそれを防げばいい。何の問題もないわ。」

そう言つてこちらを向く顔にはさつきまでの暗い表情はありませんでした。

「防ぐつて……守つてくれるんですか?」

私がそう聞くとリンネさんは当然とばかりに、「当たり前でしょう。それにいろはが死んだら私は勿論、ういも悲しむだろうから。」と言つてくれた。

私はその言葉がとても嬉しかった。そして安心できた。

私は、ずっと一人で戦うことになるんだらうと思つていたから。だから、その言葉は私に希望を与えてくれた。

その言葉の真意など、露知らずに。

マジウス結成に介入する実況プレイ、はーじまーるよー。

前はリンネが絶望した所で終わりました。なんで？（素）  
とりあえず理由を適当に考えます。

リンネが絶望したのを確認出来たのは指輪を確認した直後。指輪確認それ即ち魔法



少女確認という事ですので…。いろはが魔法少女になった事に絶望したんですかね？ いやでもあの性格でそんな事あるわけないじゃんアゼルバイジャン。というかあの性格ならそもそも絶望する事なんて中々無いと思うんですけど。(名推理)

でも現にリンネは絶望してる訳ですし…:

うーんわからん！ (思考停止) ストーリー進めりやわかるでしょ。(適当)

それじゃあ会話を進めます。

なになに…？

成程。リンネといろはの会話から察するにやはりいろはが魔法少女になった事が原因のようですねクオレハ…:

そして、自分もつと治療法を探していればいろはは魔法少女にならなかった。いろはを魔法少女にした責任は自分にある…。という事で絶望してみたいですね。今、正しい具合にいろはがフォローしてくれたので絶望状態は解除されましたが。(後輩に慰められる先輩の屑)

…:…:…:???

リンネの事がよく分からないんですけど…:

考えられるのは、友達には性格の合理的が働いておらず、通常性格での対応になる。若しくは何もかもが演技である…。のどちらかですかね。

普通に考えて後者なんだよなあ…

そもそも前者がまず有り得ません。というのもそういう性格になる状況がだいぶレアだからです。

ところがどっこい、実は後者も微妙なラインです。何故かと言うと、さっきの状態を思い出して下さい。リンネは、絶望状態”状態”になっていました。この”状態”というのがミソで、例えば先程のアレが演技だとしたら、見た目は絶望しているように見えても、状態まで絶望にはならない筈なんですよね。滅茶苦茶感情を込めて演じてるなら別かもしれないですけど。

ともかく、演技というのもだいぶ怪しいです。

うーん…でもなあ…

…

b i m兄貴リスペクトで考察をするな。(自戒)

なんかよくわからんが絶望は解除されたのでとりあえずヨシ！(現場猫)  
って感じで良いでしょ。

したらばういの病室に向かいます。こ→こ←で会っておかないと時々信頼度が下がって後々面倒な事になりかねません。

それではいろはと一緒に病室にイクゾー！デッデッデデデ（カーン）

へ→→へ←←（気さくな挨拶）

「あつ！お姉ちゃんたち！来てくれたんだね！」

おうお前来てやったぞお前！

「あのね、私病気治っちゃった！もう退院できるの！お姉ちゃんと一緒に、宝崎に帰れるんだ！」

なんか感動的：

「先生も奇跡みたいだ〜って！」

そら（マジの奇跡だから）そう（思うのが正しいだろう）よ。

「え？お姉ちゃんのおかげなの？」

「そうだよ。(肯定)

「そうなの？えへへ、ありがとう！お姉ちゃん！」

「あつ、えーつと、あはは…。」

いろはがどう反応すればいいか困惑してますが、別に良いでしょう。(適当)  
それでは適当に話をして帰る所までカットします。

話が終わりました。現在はいろはと、病院を出て、路地に連れて来た所です。何故そんな事をするかと言いますと…

「魔法少女の戦い方、ですか？」

はい。今いろはが言いましたが、いろはに魔女との戦闘知識を教える為です。

教えなくても宝崎で活動する分には問題ないだろ！いい加減にしろ！という声が聞こえてきそうですが、これには勿論理由があります。

いろはは宝崎で戦う分には問題無いのですが、神浜でとなると話が違ってきます。

「いろははこの段階では頻繁に神浜に来ないのでは？」と思うかもしれませんが今回は違います。

実はプレイヤーがいろはと友人関係にあった場合、プレイヤーに会いに来るんですよ。魔法少女としての仲間に会いたいという気持ちからだったり、まあ、周回によってそこら辺の理由は変わりますが、とにかく結構な確率でプレイヤーに会いに神浜へ来るようになります。

ういに会いに行く等の、発生が確定している理由で神浜に来る分には、ハードでも強制力が働いて、魔女と遭遇したとしても干渉しない限り絶対死にませんが、それ以外の理由で来た場合に頃される可能性があります。

いくらマギウス活動前とは言え、神浜は元々修羅の国なので魔女の強さはともかく、数は他の市よりも断然多いです。なので意図せずエンカウントしたり、稀に連戦になったりします。

なのでそういった時の為に、早めに戦いに慣れてもらわないと困るわけです。でもあまり強くなりすぎても困るのでやりすぎないようにします。

以上。(説明は) 終わり！閉店！解散！君(説明) もう帰っていいよ！

ちなみに路地に連れて来たのは魔女の反応があったからです。(前言撤回)

取り敢えず魔女の結界に入る前に絶対的な事だけ教えておきます。

止まるんじゃねえぞ…

「え!?!あの、どういう…っ?!ここは…!?!」

(魔女の結界) ないです。

現状、神浜市の魔女は現在のレベルだと殆どが雑魚と化している為、戦闘に介入する

と一瞬でカタがついてしまいます。なのでいろはに全然経験が入らずオフ会0人（逼真）になるので、今回はいろはにアドバイスしながら、危険な時にスナイパーで援護していきます。

（適当に援護するから魔女は）どうにかしろ。

「あ、はい！わかりました！」

はい、よいスタート。（棒読み）

いろはのガバガバな動きを見てイキますよ〜イクイク…

フア!?なんだその動きはたまげたなあ。

ええ…（困惑）なんでその矢が当てられないんだ…

こんなんじゃないよ〜。

ま、こうなる事は知ってたんですけどね。初見さん。

いやさっきのいろはのはガバシーンを繋いだだけなんですけど。これが印象操作か。

「ど、どうでしたか…?」

まず魔力の調整が出来てないって、それ一番言われてるから。

じゃけん、慣れていきましようね〜。

「魔力の調整、ですか？」

そうだよ。(肯定)

：・ とか言いしましたが、正直に言うとも私もどうやって教えればいいのかわからないです。(ガバ)

なのでここ→ここ←はリンネに任せてオートで良いでしょう。ある程度教えたらオート解除すれば良いですし。

それでは終わるまでカットしろ！(提案)



「今日はありがとうございました。それじゃあ、また。」

工事完了です…

なんとか一時間で基本戦闘知識をいろはに叩き込むことに成功しました。これって…勲章ですよ？

そしてもうそろそろでマギウスが結成します。遅くても一ヶ月以内には結成します。その為、毎日午後になったらアリナを尾行するというバレれば職質待ったなしの不審者ムーブを行うことになります。

まあステルスⅢ取ってるんでガバらない限りバレないと思いますが。

そういうわけなので、ここからはアリナを尾行していきます。

でも一ヶ月間アリナを尾行するのは流石に、お前精神状態おかしいよ…と視聴者兄貴達から言われてしまいそうなので早く結成してくれよな。頼むよ。

あつそうだ。(唐突)

その間レベル上げはしなくて良いのかと言われそうですが、しなくていいです。というかもう出来ません。というのも、なんとレベルが上がりすぎて今の神浜の魔女じゃ、

もらえる経験値が一ケタしかなくなりました。(力に) 溺れる！溺れる！

そんなじゃまあ、ずっと変わり映えのしない尾行風景を見せるのもアレなので、進展あるまでカットです。

さて問題です。この一瞬のうちにゲーム内では一体どれだけの時間が経ったのでしょうか？

正解は2週間です。長くもないし短くもない微妙な長さやめろ。

さてそれでは本日もアリナを病院近くで待ち伏せながら魔力を探知しているのですが…

なんかアリナの近くにもう一つ別の反応があるんですけど。(困惑)

しかもこれ知ってる人ですね。とりあえず場所がわかったのでそこに向かって後をつけます。完全に不審者だコイツ。

近くに着きました。どうやら路地裏にいますね。

とりま遮蔽物に隠れながら様子を伺います。

「こんな奴、アリナ的には a f f o r d <sup>余</sup> <sup>裕</sup> なんですけど。」

「そうやって慢心していると、いつか痛い目を見るわよ。でもまあ、怯えて戦えない子な

んかよりは、断然良いのだけれど…」

なーんでこの2人が一緒に居るんですかねえ…

やっぱり本編開始前に接触させたのが原因でしょうかね。

本編開始前に原作と違う展開になると碌な事にならないって、それ1番言われてるから。

まあ今後もつと原作から乖離かいりしていくんですがね！

そもそも神浜の魔法少女従わせるって時点でもうお察しでしたけども。

「というか、本当はアリナのcubeの中に閉じ込めてもつと痛めつけたかったワケ。」

「…あなたは魔女を憎んでいるかもしれないけれど、そうやって痛めつけている最中に魔力が切れたらどうするつもり？無用なリスクは避けるべきよ。」

「ハイハイ。」

この雰囲気から察するに、恐らく戦闘後ですね。魔女を追っていたらまたま居合わせた感じでしょうか？

一先ずやちよと別れたアリナを追います。

アリナが向かった先は…

里見メデイカルセンター！やったぜ。

それじゃ、満を持してアリナのもとに行きます。

すいませくん、リンネですけど。

「Whoa! リンネ!? ビックリさせないで欲しいワケ…。」

おっそうだな。(適当)

「まあいいケド。それで、何か *things to do* なるワケ… っ、ナニアレ。」

ん？上に何か…。

あつ、これかあ！

辺りが暗くなってきたので若干分かりずらいですが、病院の屋上が禍々しい事になってます。すつげえ黒くなってる。はつきりわかんだね。

アレは何かと言うと、説明するまでも無くういが集めた穢れです。

ので、急いで屋上に向かって全てを見届けましょう。

「穢れが…？それつてすつごく *interesting* なんですケド！アリナも行くワケ！」

それそうよ。

それでは建物の出っ張り等を足場にしながら屋上に向かいます。

少女移動中…

到着しました。3人がちゃんといますね。

「やっぱり…この量をどうにかしないと…」

「う…あああああ…!!!」

「ういー」

おいお前助けに来てやったぞお前。

それじゃ後はアリナに被膜を作ってもらって

って何故ここで操作不能ムービーが入るんですか？



「なんで3人とも…！」

「あなた達は…」

「リンネ… アリナ…」

病院の屋上に集まる3人の少女。しかしその3人は、もう既に「人間」ではなくなっていた。そのうち1人は「ヒト」ですらなくなろうとしていた。

とにかく。聞きたい事は山ほどあるが、まずはこの状況を何とかするのが先だ。

この黒い物体——ういに吸い寄せられている——穢れか？

「この黒いのもつて、unclean<sup>穢</sup>ness<sup>れ</sup>なワケ？」

アリナが聞いてくれた。

「うん、恐らくそうだよ。今、ういは穢れを際限なく回収し続けてる。」

「何故そんな事に!？」

「話すと長くなる。端的に言うのと、願いの影響だね。」

「願いつて。一体何を願ったらそんな事になるのよ。!。」

とりあえず、グリーンシードを使つてういの穢れを取り除こうと試みる。しかしダメだ。吸収してもすぐに穢れが溜まってしまふ。これで一旦の時間稼ぎつてのは無理か。兎に角、穢れの回収を止めないと不味い。さつき灯火は穢れを「回収」していると云つていた。ならここを外の空間と切り離す事さえ出来れば——

どうやって? 空間を完全に遮断するなんて、魔法少女の作る結界でも。:

待てよ、結界?

「アリナ、あなたの固有魔法つて、確か結界の生成とか、そんな感じよね。」

「? そうだケド。:。」

「なら、この周りに結界を作る出すことはできる? 外の空間から、一切隔絶された物を。」

「!! OK オーケイ アンダースタンド」

そう言うときアリナは、翠色のキューブを手のひらに生み出し、「まあ、この場合は結界と言うより被膜と言つた方が正しいカモしれないケド。:。」と言つて、そのキューブを展開。それと同時に、周囲にあつた黒いモヤは消滅。:。しない!

「う。:。うああああああ!!」



「Shit…」

「…間に合わなかった。」

「いや…諦念に飲み込まれるにはまだ早いよ。」

とは言うものの、ここからどうする？ういが背負っている穢れの量は多すぎるし、私の10個近いストックのグリーフシードも流石にこの量の吸収はできない。どうする？

「僕が何とかする…。一世一代の大博打。僕の物語を具現化させる!!」

「Storyの具現？」

物語の具現…つまり、思い描いた想像が現実になると言う事か？

「ういの魂を、その身体と切り離す。そんな物語を創造すれば…」

「人格や感情が無ければ、魔女にはならない…それは全て魂由来のもの…ならそうすれば、ういが助かるの？」

「ダメだよ！魂を抜き出しても、入れ物が無ければすぐに消えちゃう！」

成程。つまり、人格や感情の無い虚無の器が必要という事か？…そんな物、存在するの？

「それならここにあるよ。」

そう言つてねむむは、先程から全く動くことの無かった小さいインキュベーターのよう

な物を指差した。

「そうだ、私達が機能を奪ったこのキュウベえなら……！」

機能を奪っただと？…… 本当に、聞きたい事が多すぎる。

まあでも、これでういは一先ず助か——

待て。

「本当に大丈夫なの？ 魂を切り離す事とは、それ即ち——」

——ういの”存在”を切り離すという事よ——

そう言い放った瞬間、2人は驚愕する。

魂は因果の収束点だという事は、既に私の実験によって判明している。

そんな物を身体から切り離せば、ういという因果が消滅する。そうなれば、存在も恐

らくは……

「存在が消えるって、どういう事だい!？」

「話すと長くなるから今は説明するのは無理よ。」

「消えるって、本当なの？」

「恐らくは。存在が消えれば、消えたという事すらも確認できないから憶測になるけれど。ただ、少なくともかなり面倒な事にはなるでしょうね。」

「そんな……」







ああ、待てよ、確か、”半魔女”とか言うのだったけ？

そうだ。だんだん記憶がはつきりしてきた。こいつを使って魔女化の無い世界を作るんだっただか。

そしてあの2人は協力者だ。

ここに集まっているのは魔女化の無い世界を作り上げる為に集まった魔法少女。半魔女は完成した。後はこれを使ってシステムを完成させるだけ。

ようやく、私の長い長い計画は1歩を踏み出した。

---

特にガバる事も無くムービーが終わりました。

…  
けどなーんか不穏だよなあ？

計画ってなんだよ計画って。プレイヤーのあずかり知らない所さん!? でやばい計画が進んでるとかヤメロオ！（建前）ヤメロオ！（本音）

そんでは、ムービー終わって尺もキリも丁度いいので、今回はここまでです。ご視聴ありがとうございますました。

## Side | No. A2 | 独自性喪失

結局私は何の為に絵を描いているのか……分からなかった。

この1ヶ月、誰にも言わずに旅に出た。そうすれば何か変わるかもしれないと思ったから。

でも、そんな都合のいい事は起こらなかった。

審査員の手紙。あれに書かれていた事はきつと真実なんだろう。そうでなければ、ここまで悩む事はきつと無いはずだ。

しかしそれはつまり。

アーティストとしての命の終わりであり。

アリナ・グレイの存在意義の消失だ。

私が生きる意味は、作品を作る事にある。だが今の私は……どうだ？

作品を作る意味を見出せず、それを見つつけようと努力しても、何も変わらない。



——創作意欲を失った芸術家に、果たして存在価値はあるのか？いや、無い。

そう。つまり私がこの世界に存在する意義は、何ひとつとして存在しないのだ。私はもう、何も創りたいと思えなくなってしまったんだ。

それならば、私がすべき事はただ一つ。

創作を失った私は、この世界に生きる意味を見いだせない。ならば、最後に全てを終わらせて、私の最期を有終の美で飾ろうじゃないか。全ての作品を破壊し、自らを最後の作品に仕立て上げる…。とても素晴らしい“最後の仕事”<sup>ラストワーク</sup>をして見せようじゃないか。

あの馬鹿みたいに真<sup>御</sup>直<sup>園</sup>ぐな後輩も、私の1<sup>リ</sup>番大<sup>ン</sup>切<sup>ネ</sup>な親友も、私の最後の作品に、きつと喜んでくれるだろう。

そう、私は思っていた…。でも実際は違った。彼女は私を止めに来てくれた。そして私の作品を素敵だと言ってくれた。

その言葉は、とてもとても、とても嬉しかった。でも私は飛び降りた。私には、リン

ネという資格は無いと思ったから。

でも、それでも、命懸けで私を助けてくれた。その時私は初めて気付いた。リンネが私をどれだけ大切に思っていてくれたのかを。

私は病院で考えた。本当に私には生きる意味がないのかを。

： いや、ある。私は：リンネに必要とされている。そして、私もリンネを必要としている。何故だか、リンネに助けられた時から、急にそう思うようになった。

正直、もう芸術に対する興味なんて無くなってしまった。いや、最初からそんな物なんて無かったのかもしれない。思えば、私が作品を作る為のモチベーションというのは、リンネに私の作品を見せてあげたかったからだ。私がよりいい作品を作ろうとするのは、私がコンテストに作品を出展するのは、そこでいつも金賞を取れる作品を作り上げるのは、全部リンネに喜んでもらいたかったからだ。

私が本格的に作品を作り上げようとし始めたのは、リンネが色々な事を教えてくれたからだ。

いつもそうだ。私が何かをする時は、いつもリンネのことを考えていた。この前の映画だって、別に私も多少は興味があつたかもしれないが、一番はリンネが嬉しくして欲しかったからだ。

私は作品を世に広めたいから作っているのでも、自分の為に作っているのでも無い。リンネの為に、作っているんだ。彼女はいつも、私の作品を褒めてくれた。金賞を取れば、それがまるで自分の事かのように嬉しそうにしてくれた。

幼い頃……自分の作りたい作品が見つかった時。私は溢れ出るインスピレーションに従い、思うがままに絵を描き続けた。そうして出来た作品をとて素晴らしく感じたということは憶えている。

でもリンネは違った。作品が完成した時、私は嬉しくって、その絵をリンネに見せると、明らかに引いていた。ドン引き。

その時からか。リンネが本格的に私に絵を教えるようになったのは。最初は、「正直

に言つて教える事なんて殆ど無い。寧ろ私が教えて欲しいんだけど？」なんて言つてそこまで関わることは無かつたのに、急に教えるようになった。普段親から言われた事なんて殆ど聞いてないのに、リンネの言うことはとてもよく聞いていた。

そうしてリンネの言われるように絵を描いて出来た作品には、最初に描いた作品程の素晴らしさは無くなっていた。でも何故か私は満足していた。

その後も、時々リンネに絵を教えて貰っていたら、いつの間にか親友にまでなつていった。

話をしていくうちに、最初は気付かなかつた彼女の内なる優しさに気付いた。

リンネは普段は素っ気ないけど、なんだかんだ言つて、色んな人に優しいんだ。

……いや……優しかつたと言つた方が正しいか。

一年半ぐらい前から、急に他者に関する関心が無くなつた。私に対しての反応は変わらなかつたが、それ以外は本当に別人のような対応だった。心配して何かあつたのかと聞いたら、「友達が死んだ」と言われた。死因は分からない、不審死とも言われた。でも、恐らくリンネは知っていた。

多分だけど……魔女に殺されたんだろう。

初日に病院にお見舞いに来た子は、大体が魔法少女の指輪をつけていた。きっとリンネの友達はそのような人が多いんだろう。

なら不審死というのは多分、魔女に殺されたんだろう。

許せない。本当に。アイツらはリンネの幸せを奪って、人格まで変えてしまった。

魔女は人の意識まで操作出来るという。なら、リンネの両親が死ぬ事になったのも、コイツらのせいなのではないか？

あまつさえ、リンネの命までも狙っているんだ。

考えれば考える程、魔女に対する怒りが湧いて出てくる。

アイツらを生かしておく訳にはいかない。一匹残らず、殺し尽くす。

魔女を一匹づつ痛めつけて、苦しませてやるのもいい。

ああ、そうだ。私の結界に閉じ込めて、同族同士で殺し合わせるのも良い。

そして勝った奴は、結界を少しずつ縮ませていって、最終的にグチャグチャに潰して

やるのも良い。

… ツフフ。ああ、想像するだけで素晴らしい。ゾクゾクする。

「…：… ねえ、あなた、さつきからぼーつとしてるけど、話は聞いている?」

「え?…：… ああ、ちゃんと聞いているワケ。」

…：… 正直言つて全然聞いてなかった。まあ大丈夫でしょ。

「はあ…：… もう一度言うけど、魔女との戦いは命懸けよ。そうやってぼーつとしてるとすぐに死ぬわよ。」

「ハイハイ。」

「はい」は一回でいいわ。」

七海やちよ…：… リンネが私を心配して、私に戦いを教えるように頼まれたらしい。だからまあ、一応付き合っている。やちよは…：… あまり好きなタイプの人間では無いが、リンネが私を気遣つてくれたのは素直に嬉しい。

「着いたわよ。」

彼女はそう言つて足を止める。

一見すると何も無いように見えるが、ソウルジェムが何か反応している。ここで間違いないのだろう。

「結界に入ったら、いきなり戦闘になる事もよくあるけど、大丈夫かしら。」

「No problem。」

「そう… わかったわ。それと、危なくなったら直ぐに言うのよ。」

「そんなに心配しなくても大丈夫なワケ。」

私がそう言うと、やちよは魔法少女に変身する。それに合わせて私も。

そしてやちよ空間を槍で切り裂くと、そこに穴が空いた。私達はその中に飛び込んでいく。

そして空間を見渡すと… 私は驚嘆した。

「これは——」

まるで私の作品のようだ——と。

そう。間違い無く、以前の私ならこの空間の虜になっていただろう。

以前ならばね。今は違う。

「あの奥に大量にいるのが魔女なワケ？」

「いや、あれは使い魔ね。所謂、魔女の手下よ。」

「そう。なら——」

私は自分の武器であるキューブを周りに出現させ、レーザーの照準を絞る。

「全員殺してもいいヨネ？」

次の瞬間、私は全てのレーザーを放ち、使い魔を一匹残らず塵へと帰す。

——全てはリンネを魔女の魔の手から助ける為に。

——全てはリンネの幸福の仇討ちの為に。

私はコイツらを殺し尽くすと決めた。



## Part. 13 第一回神浜マジウス会議

現実改変を認識する実況プレイ、はーじまーるよー。

前回はマジウスが結成したところで終わりましたね。

操作不能になってたりしましたが、ガバは確認出来なかったのでヨシ！

そしてういの存在も消滅して交友関係や記憶に変化があると思われるので、確認をしておきましょうか。

交友関係確認中…

えー、変化があるのは灯火とねむですな。

キャラ一覧に何故か新規マークが付いています。このマークは普通新しく出会ったキャラにしか付かないので、何らかの変化があったと見て良いでしょう。

つまりはまあ、灯火達とはうい関連で知り合ったことになりました。もしか好感度調整は必要なかった…？

と一瞬思ってしまったが、確か記憶改変後の好感度・信頼度の初期値は改変前の

好感度・信頼度に依存するはずだったのでちゃんと今までの行為は意味があります。

で、問題は交友から消去されてる人です。これはつまり、ういがいたことで会うことになった人です。ちよつとスキショとかと照らし合わせて確認してみます。

まず消えてるのは二人ですね。一人はういなので実質一人消えてるということになります。

(重要キャラ消えてるとか) やめてくれよ…

…

…

あつ… (察し)

これ… 消えてるの… いろはですね… 環いろは。

ウツソだろお前www

いろはに戦闘知識教えてあげた意味どこ… ここ… ?

一方その頃画面の四人はというと、もう粗方今後の方針を決めたようですね。

「それで、とりあえず半魔女を作り出すことに成功して、更に被膜を神浜中に拡げて貰った訳だけど……わたくし達2人は良いとして、あなた達もまだ一緒に動いてくれるよねー？」

この台詞はプレイヤーへの信頼度が高いと発生するやつですね。プレイヤーがこの場にいた場合、マギウスになるか、ただの協力者になるかを選ぶ事が出来ます。信頼度が足りなければ強制参入になります。とりあえずここは協力者に……

「アリナはどっちでもいいけど……まっ、リンネがそうするんだったら、アリナもそうするワケ。」

ちよつと待てや。(語録無視)

とんでもない事言いませんでしたかコイツ。これもしかして最初っから選択肢なんて無いのでは……？

つまりアリナは、リンネがマギウス入りしないなら自分もそうする……ってコト!?

(TIKW)

今まで考えてた計画を崩す流れはやめてくれよ……(絶望)

当たり前ですが、アリナがマギウス入りしなかった場合、かなりストーリーが変わります。そういうのは避けたいので……

「一緒に動いてくれるんだね？助かるよー。」

「分かった。じゃあアリナもそうするワケ。」

はい。

… どうしよう。(困惑)

… それはそれとして、結成後の一番最初のマジウスの活動は今後の方針の話し合いです。とはいえまだ結成直後なのでそこまでガッツリとしたものではありませんが。

日にちは恐らく明日です。なのでこの後にどこで集まるかという話になり、大抵ファミレスか灯火の家に決まります。

そこです。

自分が率先して自宅を提案します。すると若干信頼度が上がります。この時に誰が提案するよりも先に言うのがポイントです。誰かの後にこれをすると思えば逆に信頼度が上がり好感度が下がります。コイツ移動するのが面倒なだけだろって思われるからです。まあ実際そうなんですけど。

そうそう、なんで裏切る予定なのに信頼度上げるのかですが、信頼度が高いと割と適

当な事やっても見逃されるんですよ。なんかやつてるけどアイツなら大丈夫だろ的な感じで許されます。

なので今後怪しまれる事を考慮して上げています。

とりあえず場所決めのおくだりになるまで適当に進行して…

「なるほど、取り敢えずの話し合いだね… となると場所は何処に——」

まずうちさあ、家… 空いてるんだけど… 来ない？（迫真）

「リンネの家…!? まあ、それで良いと思うワケ。」

「まあ、僕も特に異議は無いけど… 灯火はどうだい？」

「んー、わたくしもそれでいいと思うよー。」

工事完了です…

それじゃあ後は特にやる事は無いのでカットで。

あの後には解散して一旦帰宅しました。

とりあえずマギウスとして活動するにあたって必要な物をネットでポチります。

必要な物：・それは”非殺傷武器”です。

マギウスに加入すると、最初は大丈夫なのですが、活動の規模が大きくなっていくと敵対する魔法少女が出てきます。原作では第一部の中盤にとかなると大体の魔法少女が敵対してましたね。

そうなると勿論攻撃も仕掛けてきたりするわけですが、それで振り返りにした際の相手の怪我の度合いによって、周囲の信頼度が低下します。そうなると非つ常に面倒なの

で、出来ればあまり傷つけないのです。ちなみに最初からマギウスに加入したくなかった理由の1つがこれです。他にもありますが今回は割愛。

で、振り返りにする際は、殺害（SG破壊では無い）では無く、無力化でいきたいです。無力化というのは気絶とかそういうのですね。無力化だと基本的に信頼度は殆ど低下しません。なんなら上がる時とかあります。仲間が傷付けられてるのにより信頼されるとかこれもうわかんねえな？

で、非殺傷武器で代表的なのは”特殊警棒”と”スタンガン”です。どちらも本来は護身用具なのでダメージを必要最小限に抑えられます。

だから、この2つを買っておく必要があったんですね（メガトン構文）

特殊警棒はスチール製の物を、スタンガンは威力が一番高い物を購入します。

因みにナイフはこれでお役御免なのかと言うと、（そんな事）ないです。

ナイフはまだ、防御や危険時の咄嗟の攻撃、魔女戦、魔法少女と本気で殺り合う時など、まだまだ沢山使います。

それじゃあ、明日はマギウスの集まりがありますし、もう夜も遅いので夕食を摂って

眠りましょう。

オッハー！（クソデカボイス）

という事で後日です。3人を家に案内してきました。

両親がいない事は既に説明済みなのですんなり来てくれます。

入って、どうぞ。

「お邪魔するよ。」

全員入れたらリビングに行きます。そこで話をしましょう。

「… 相変わらず色々ある部屋なワケ。」

「確かにこの部屋の奥とかはちよつと騒がしいねー。」

「別にそういう意味で言ったわけじゃないんだケド？そもそも騒がしいとか言う程  
i n t e g r i t y<sup>統</sup>性が無い訳じゃ無いと思うケド。」

なんか早速言い合ってるんですけど。（困惑）

「全く2人も… あー、これって、リンネの趣味なのかい？」

「あ、確かに気になるねー。」

ねむが話題を変えてくれました。



えー、色々ありますが、大体が父親の趣味、一部リンネの趣味……あ、でも父親と同じ趣味もあるみたいなので半分ぐらい？ですかね。

「そうなんだね。じゃあ、あのウエポ武器ンラック掛もかい？」

あのエアガンが沢山掛けられてるやつの事を言ってますね。あれも父親とリンネの趣味らしいです。

「へえ……ちよつと見てみてもいいかい？」

「急に銃なんかに興味なんて出して、どうしたのかにやー？」

「いや、少し参考にしたくてね。次に書きたい話で銃の描写を入れたいんだけど、如何せん僕らはそういう物とは無縁な生活を送っているから。疎いんだよ。」

なるほど。てつきりねむも魔法少女ならぬ武装少女の仲間入りかと思つてガバだ！ガバだ！つてなつてました。

そういう事なら見ろよ見ろよ。

「ありがとう。それにしても沢山あるね……この銃は？」

それは……（メニュー確認中）

M9—ハンドガン—エアガン

ベレッタですね。ほむらが6話でキュウベエを射殺した銃です。  
「へえ。じゃあこれは？」

FAL—アサルトライフル—エアガン

FALですね。ほむらが叛逆で近代改修された物を使っていました。  
「やっぱりよく知ってるんだね… あ、じゃあこれは？」

HAWK・50—ハンドガン—実銃

デザートイーグルですね。ほむらがよく使ってるイメージが  
ちよつと待って！実銃が入ってるやん！どうしてくれんのこれ？

… いやマジで何ですかこれ。何でオモチャの中にチャカが平然と混じってるん  
ですか。

「え？あー、聞き間違いなら申し訳ないんだけど、今エアガンじゃないって… えー  
と… 冗談だよな？」

「… わたくしもそう聞こえた気がするけど。」



「ふーん…… そうだ！もしかすると、それが魔法少女になった理由に関係していたりするのかにやー？」

（そんな事聞かれても私にはわから）ないです。

「ふーん…… そうだ！昔からの付き合いのアリナは知ってるんじゃないかにやー？」

「いや、アリナも first heard なワケ。」

「へー。でもまあ、否定しないあたり、理由は大方そうなんだろうねー。」

なんか勝手に結論出されました。 まま、ええわ。

そんな事より本題あくしろよ。

「ああ、それもそうだね。僕達の理想の為に早くしないと。」

「…… そだね。それじゃあ、これからの事を説明するよー。まずは——」

さて、ここで灯火による説明が入りますが——カットします。（無慈悲）

まあ大したこと言っていないからね仕方ないね。（♂）

そんでまあ、半魔女の名前がエンブリオ・イブに決まったり、後は構成員であるマジウスの翼の事だったりが大体決まりました。そしたら今日の話し合いはこれで終わります。

終わり！閉廷！…… 以上！皆解散！

君達もう帰っていいよ！

「ちよつと待つて。最後にあなたの手帳を貸して欲しいんだけど… 良いかな？」

手帳ですか。何故そんな物を…？

まあ別に渡しても問題無いので貸しましょう。

「ありがとねー。魔女を使うにあたって、この“魔女調査書”が役に立つと思うんだ！だから少しの間貰うね！」

えっ何それは。(魔女調査書)

そんな物書いてた覚えは無いんですけど…

とりあえず渡す時に一瞬中身を見てみましょう。

これは… 魔女の絵と、その魔女の特徴やらなんやらが書いてますね… あっ(察し)

”そういうえば最近全然絵書いてませんでしたね。描かなきゃ(使命感)… って、まだ欲求度が減つてませんね。じゃあまた後でいいですか。” (Part. 11)

お前か。

いや、確かに何かおかしいと思つてたんですよ！全然絵かいて無いのに欲求減らないのおかしいなつて。

でもまさか裏でこんなものをかいていたとは… これも一族(biim)の呪いか。しかもこれ学者特質も混ざってますよね。なんだこれはたまげたなあ。

中身しつかりと見たい… 見たくない？

でも今貸しちやつたので見れませんね。ふぎけんな！（声だけ迫真）  
とりあえず返してくれるまで待ちましょう。

「そうだ、リンネ。すまないんだけど、あのエアガンを少し借りていってもいいかな。」  
駄目です。下手に実銃持って帰られたら面倒なので…

でも、確かリンネの部屋にもいくつかありましたね。それを渡しましょう。  
「本当かい？ どうもありがとう。」

それじゃあ1911とM556を袋に入れて貸しましょう。

「じゃあ、アリナも帰るワケ。byebye。」

あつそうだ。（唐突）

なんか最近、アリナが全然作品を作っている様子が無いんですね。一応聞いておき  
ましようか。

「あ… もしかして、アリナに作品を作っていて欲しいワケ？」  
いやそんな事も無いですけど。

「ふーん…」

…？

なんかちよつと様子がおかしい気がしますけど… まま、ええわ。

そしたら：．ここからまたちよつと暇になります。まだ魔女は強化されていないのでレベル上げも出来ませんし、これといってイベントもありませんし。一応翼の勧誘という目標はありますけど、動画映えが一切無い上にプレイヤー的にも単純作業なので面倒なんですよ。

「なのでオートで適当に進めます。イベントも無いので事故る可能性もほぼゼロですしおすし。」

「勧誘もオートの場合は成功率が50%以上の魔法少女を対象に行うので、原作で入らない魔法少女にはまず勧誘しませんし。」

オート進行中：．．

とりあえず1ヶ月ほど進めてみました。どうなったか見てみましょう。

「マジウスのメンバー数は：．．まあ、まだ少ないですね。（結成したばかりだから）ま、多少はね？」

別に事故ってる様子も無いんで、大丈夫でしょう。

ここからはオートを解除して進行して行きます。アザレアとかあるのでね。

ここからは「混沌さん」の動きに注意して行動して行きたいところですが、キリもないので今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございます。



半魔女は実現し、神浜の魔女化は二度と起こることはなくなった。  
これによってわたくし達は、神浜の中では魔女化という代償を気にすること無く、魔



魔法少女の力をいくらでも使えるようになった。後はこれを全宇宙に広げるだけ。

わたくしがこの宇宙の全てを知る時も、そう遠くない未来に訪れるって事だよ。

魔法少女。最初に知った時は驚いたよ。大体、わたくしがそんな御伽噺を信じられる訳がなかった。だから最初にリンネが言ってきた時なんか、思わず笑っちゃったよ。

そもそもその状況が本当に意味不明だったっていうのもあるけど。なんせわたくし達の病室に不法侵入してきたんだもん。それでいきなり突拍子も無い事を言ってきたんだから、仕方ないよね。

だから最初は全然信じてなかったけど、でも実際にその魔法とやらを見せられてしまったら、もう信じるしかないよ。

でも、その出会いはわたくしにとって、とっても有益な物になった。なんせ宇宙の全てを知る手段が得られたから。わたくしは嬉々としてキュウベえと契約した。

『私の家でいいわよ。』

リンネがこう言ってきたのには驚いた。思っていたよりも意欲があつて関心したけど、まあ、わたくし達にこの計画を提案してきたのが彼女だし、当然といえば当然かも？

：： まあ、その所為でわたくし達はこうやって待たされている訳なんだけど。

「なんか遅い気がするんだけどー?」

「まだ12時じゃないんだケド。」

「そうは言っても、もう後1、2分で12時になるけどね。最初に言い出した人間が遅れてくるのはどうかと思うよ。」

「だから、まだ12時じゃないってアリナは言ってるワケ。遅れる事が確定してないのに勝手に非難しないで欲しいんですケド?」

まあ確かにそうだけど、でも時間ピッタリに来るなんて事あるかにやゝ?

「あら、皆早いわね。」

来たよ。時間ピッタリに。

「早いんじゃないや無くてあなたが遅いだけな気がするけど?」

「時間通りに来ただけよ。皆いるし、早速行きましょう。親もいないから、その辺も気にしなくていいわよ。」

親がない：： それは家になのか、それともこの世界になのか。どっちでもいいけど。

\*

着いた先は、新西区の高級住宅街。やっぱり随分と裕福な家庭みたい。わたくし程じゃないけどねー。

中も基本は綺麗になつてた。一部趣味関連の物でごちゃごちゃしてるけど。

それ以外は別におかしなところは無い普通の家って感じかな。なんの問題も無く話し合いができそうって思った。

…ねむが余計な事を聞くまでは。

「…この銃は？」

ねむが今度書く小説の資料として参考にしたいと、この家にあるエアガンの事について少し聞き出した。まあ、それぐらいならわたくしも構わないんだけど…

「それは… M9ね。9mm弾を使う割とスタンダードなハンドガンよ。」

「へえ。じゃあこれは？」

「それはFALね。かなり昔のアサルトライフル…アサルトライフルってわかる？」

「いや…でもそういうのは調べられるから大丈夫。それにしても、やっぱりよく知ってるんだね。あ、じゃあこれは？」

次にねむが指したのは唯一壁に掛けられずに棚に置いてある銀色の銃。一際存在感があるね。

「別にそれ位は、銃がある程度知つてればわかる程度の知識だと思ふけど… まあいいわ。その銃はHAWK、50ね。50口径が撃てる、名実ともに最強の威力を持ったハンドガンよ。あとそれ、エアガンじゃ無いからあまり触らない方が良いわよ。」

…は？

いや、ちよつと待つて、どういう事？エアガンじゃない？じゃあ本物つて事？もしかして聞き間違えた？いや、わたくしがそんなミスをする訳…

「え？あー、聞き間違ひなら申し訳ないんだけど、今エアガンじゃないつて… えーと… 冗談だよな？」

「… わたくしもそう聞こえた気がするけど。」

とりあえず、真実を確かめよう。

「冗談なんかじゃないわ。本物の銃よ。ていうか、何そんなに驚いてるのよ。魔法少女は、こんな銃なんかよりも危険な武器を持つてるでしょう？」

… まあそうだけだよ。

「ふーん。まあ咎める気は無いけどねー。でもどうしてそんな物を持つてるのか気になるかな。」

魔法少女は自分の魔力を使えば簡単に武器を作れるけど、その銃はどこから入手しないといけない。それこそ、危険な人達と関わるとかじやないと。それはつまりリンネがそういう人達と関わりがあるって事になるんじゃないかなー？

何かあつてわたくし達にも迷惑がかかったら面倒だし、調べておかなくちゃね。

「どうして持つてるのか？ そうね、まずこれは私のものでは無い。私の父親の物よ。ただし、父親が反社会的勢力に属していた訳じゃない。」

「なら尚更なんでそんな物を持つていたのかにやー？」

普通の人間にはそんなのいらなと思うけど。

「父親はね。ただ…その友達がそういう人だったみたいなのよ。それに昔からの付き合いだったみたいで、とても仲が良かったみたいね。」

「…リンネとアリナみたいな関係だったってコト？」

「ああ、まあ、そうね。そんな感じよ。」

リンネは一呼吸置いてから言った。

「ただ、仲がいいからと言って、ずっと同じ道を歩めるとは限らない。私の父親は頭が良かったけど、その友達は違ったみたい。頭の良い学校には行けず、せつかく入れた所も中退して、人生行き詰まった所で…。」

…

「…行き詰まった所でどうなったの？」

「さあ？」

… 馬鹿にしてるのかな？

「さあつて… 知ってるんじゃないの？」

「そんな他人の人生なんて知ってる訳ないでしょ。これは私の父親が話してくれた憶測よ。最後まででは聞けなかったけど。」

「つまり、君はただの憶測をさも事実かのように語っていたと？」

「そうね。でも大体合ってるとは思うわよ。」

… なーんかムカつく言い方。

「ただ、仲がいいってというのは本当よ… 私の父親が社長だったって話はしたかしら？」

「いや。」

「そう。一時期、会社の経営が大分傾いた時があったのよ… その時に、ね。その友達が大量の額を寄付してくれたのよ。それが… 銃を持っている理由であり、私の両親が死んだ理由。」

あー、やっぱりもう死んでたんだ。大体予想ついてたけどね。

「つまり、その友人は違法な所からお金を持ってきたけど、その事が警察にバレて、何ら

かの理由で殺された。そんなところかやー?」

「好きに解釈するといいわ。」

「あくまでも否定はしないと。」

そしてこうやって言葉を濁すって事は、それはなるべく言いたくないと。

「それにしても警察ね……そうね。警察ならどれだけ良かったでしょうね。」

「……?」

笑っている。その相手はわたくし達か、それとも別の誰かか。

「……寧ろ逆よ。真逆の存在。」

「真逆?……まさか、その反社会——」

「いや、この話はもうやめにしましょう。これ以上話す事も無いし。」

あれれ?ちよつと強引に話を終わらせようとしてないかにやー?

「ちよつと待った。まだ銃を持つてるちゃんとした理由を聞いてないよー?」

「それは……自衛の為に貰ったのよ。」

「……貰った?」

「はい。これでこの話は本当に終わりよ。」

自衛の為に、貰った……引つかかる所も少しあるけど、また後ででいいや。

「ふーん……そうだ!もしかすると、両親の事……それが魔法少女になった理由に関係



していたりするのかにやー?」

「……どうかしらね?」

これも答えたくないよ。

「ふーん…… そうだ! 昔からの付き合いのアリナは知ってるんじゃないかにやー?」

「いや、アリナも *f i r s t* 初め *h e a r d* 聞 いた なワケ。」

おつと意外。てつきり親友のアリナなら知ってるかと思つたのに。

いや、寧ろ親友なら尚更言つてくれる確率は低いかも?」

「へー。でもまあ、否定しないあたり、理由は大方そうなんだろうねー。」

「…… そんな事を長つたらしく考察するよりも、さつさと本題に入つたらどう?」

イラッ。

「ああ、それもそうだね。僕達の理想の為にも早くしないと。」

何が”それもそうだね”なの? 元はあなたがを見たいなんて言つたせいじゃないのかな?

…… このイライラを押し殺さないよ。

「…… そだね。それじゃあ、これからの事を説明するよー。まずは——」

まずは如何にして穢れを集めるかの方法を。次に、魔法少女の救済を謳つて集める予定の、計画を円滑に進める為の人手、”マギウスの翼”、及びその統治者であり、わた

くし達のことでもある”マジウス”を説明。

「以上がわたくしの考えた計画だけど、どうかにやー？」

「そうね。いいんじゃない？それで。」

そりゃあ、わたくしの天才的な頭脳を持ってして考えた計画なんだから、否定する所なんて何一つ無いよね！

「で、話はこれで終わり？」

「そうだよー？」

「なら、これで解散ね。言っとくけど、私の家でゆっくりしていいとか言うつもりは無いわよ。」

…… 勝手に仕切らないで欲しい。

「ああ、それなら僕も大丈夫だよ。」

「ちよつと待って。最後にあなたの手帳を貸して欲しいんだけど…… 良いかな？」

「手帳…… 良いわよ。」

「ありがとねー。魔女を使うにあたって、この”魔女調査書”が役に立つと思うんだ！だから少しの間貰うね！」

この魔女調査書。前の魔法少女の説明の際に少し見せてもらった。

中には魔女の詳細な絵と、動きや使い魔達の特徴、何かしらの目的があつて行動して

いるかの推察：：一部の魔女には、願いや感情が、魔女になった際の行動や見た目に影響しているか等が書かれていて、とても役に立ちそうだった。何でそんなものを書いているのかは分からなかったけど：：でも理由を知ったところでたいして変わらないよねー。

「ねえ、アリナ。そういうえば、最近あまり絵を描いてないみたいだけど：：何かあったの？」

「いや、何も無いケド。あ：：もしかして、アリナに作品を作っていて欲しいワケ？」

「いや、別にアリナが作りたい時に作ればいいと思うわ。別に、私は好きなようにやってくれていれば良いから。」

「ふーん：：」

「話は終わったかな？それじゃあ、さよならー。」

\*

両親の話：：本当は全部話してしまっても良かったんだけど、何故かその時は、体が

話す事を拒絶した。

あまり思い出さたくない記憶だからか？

いや、それにしたって、あの感じは少しおかしい気がした。

… 何故おかしいと思うんだろうか。

… いずれ過去について話さなければならぬ時が来るだろう。とても隠し通せる

ようなものでは無いのだから。

だから、私はこの体に”拒絶反応”が起こらないように”耐性”を付けさせないとい

けないのかもしれない。

出来るのか。そんな事が。

## Part. 14 CROSS CONNECTION

途端にやる事が増えすぎて過労死する実況プレイ、はーじまーるよー。  
という訳で前回の続きからです。いろいろとやる事が増えてきました。

まず灯火に手帳を返して貰いたいですし、混沌さんも見つけたいですし、マギウスの仕事もやらないといけませんし、レベル上げも再開したいですし。

とりあえず、手帳に関しては灯火に直接言ってくるのが早そうですね。早速向かいましょう。

：．． と行きたい所ですが、現在時刻は24時！

割と睡眠に関しては健康的な生活を送っていたリンネにとっては、結構キツイ時間帯です。

どうやら先程まで黒羽根と活動していた様です。戦闘訓練とかやってたんですね。兎にも角にも、早く家に帰って眠りましょう。

” Pr rrr rrr : : : ”

おっと、電話ですね。羽根からのようです。

オツスどうしたか？

『もしもし、リンネさん?!』

… 何やら焦ってますね。

『大変です！突然、白い髪の魔法少女が襲ってきて…！それで、一緒に居た羽根が…

ああ、ヤバい… どうしよう…！』

白い髪…？対象人物が多すぎて、これもうわかんねえな？

とにかく安全な場所に行くんだよあくしろよ。あと逃げながら場所とか他の特徴と

かもオナシヤス！

『えっと… ば、場所は水名区！水徳商店街近くの路地裏です！それで、特徴は——痛

あ！』

あつ… (察し)

『やっと追いついた…』

『つ… が… あ… い、いや… やめ、て… こないで…！』

電話を落とす音が聞こえたので、多分攻撃されるか何かで転んだみたいですなクオレ

ア：

『さつき見た事は……誰にも言わない、から……！だから……お願い……！殺さないで……！』

『……名前は？』

『名前……？名前を、言えば……助けて、くれるの……？名前、は……”七菜”……！お願い、助けて……』

聞いたことない名前……ランダム生成のモブ魔法少女ですね。

『そう……七菜……私は”スズネ”。それから……』

『さよなら。』

『ツ!?やめ——!!』

……ガラスの割れるような音と肉を刺した音、それから血飛沫の音が聞こえて来ました。もう助からないゾ。

『……この電話……あなたは誰?』

話しかけられました。がこ→こ←は喋らないでおきます。ここで喋ると声を覚えられて色々とマズイです。

『……黙殺か。』

あ、電話を切られました。いや斬られたのか。

…さてと。

あつてはならない事が起きてしまった。

一先ず水徳商店街の方向へと急いで向かいます。

しかし、移動中何も無いので視聴者の皆様は退屈してしまうでしょう。なので…

みなさまのために

現在の状況について説明します。

まず電話の向こうの殺人犯の正体ですが、お察しの通り”天乃 鈴音”です。

彼女、元は善良な魔法少女だったのですが、とある出来事を経て現在は魔法少女キラールと化しております。

本来は神浜に来ることはありませんが、マジウスによって被膜が貼られてキュウベエバリアが敷かれると、キュウベエに、神浜つて街がヤベエぜ！つて言われてこの街にやってくるようになります。こないで。（懇願）



そして彼女がやってきたという事は……” CROSS CONNECTION”が  
発生したという事です。

本来このイベントで最初に狙われるのは、”栗根こころ”という魔法少女ですが、  
ハードだと全ての魔法少女が平等に狙われるようになりません。なので鈴音から守るの  
がだいぶ難しくなります。とはいえ、非常にわかりにくい前兆があるので、一応特定は  
可能です。今回はどっかの誰かがオートで進めたのでわかりませんでしたけど。はー  
っつかえ！

そして、最もまずいのは、このイベントで死人が出た事です。てかこれが一番やつて  
はならないガバです。こうなると結構面倒な事態に発展しかねません。

なのでそうなる前に最速でこのイベントを終わらせます。だからさっさと鈴音を見  
つけて――

——おっと。言ったら早速見つかりました。商店街近くの路地裏で、何かから逃げ  
るように急いで歩いていきますね。とりあえず指輪はポケットに隠しておきます。

そしたら肩をぶつけて話す機会を作り出します。

Bannon! (肩がぶつかる音)

「あ……めんなさい……」

大丈夫だつて安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

ところでその制服：：市外の間人です。ねこれは：：間違い無い。

「え？：：そうだけど：：」

この街クツソ危険だから気をつけろよな。

「あ：：：：ありがとう。」

そしたら去ります。

：：と見せかけてこっそり鈴音の写真を撮つておきます。この写真は後で使いますので誤つて削除しないように気をつけましょう。（3敗）

さて。先程の鈴音との会話に何の意味があつたのかと言いますと：：はい、これです。

スズネ？—魔力解析度 50%

鈴音の魔力を探知できるようにしていました。

魔力の解析ですが、魔法少女は全員がそれぞれ固有の魔力のパターンを持っています。それを解析する事で、その魔法少女の探知が出来るようになります。ちなみに解析度に依つて精度や探知できる範囲が拡がります。

解析方法ですが、基本的に魔法を使った際に出る魔力を解析するのが手っ取り早いで

す。が今回は無理だったので、身体に流れる微弱な魔力を何とか解析しました。

魔法少女は魔法を使わなくても、身体の維持のために常に若干の魔力を消費しています。今回解析したのはその魔力ですね。しかしこの方法だと50%までしかたまりませんし、何より何らかの理由で魔力を多く放出していない限りは、直接身体に触れないとそもそも解析が開始できません。

なので今回は肩をぶつけるという方法を取りました。これを使う事で話す機会も得られて、解析する魔力が足りなかった時でもまた触れることで再開出来るからです。あと声を聞く事でコイツが鈴音だとリンネにわからせるというのもありました。

そしたら探知が出来るようになったので、近くに鈴音の魔力が残っていないかを探します。戦闘があつたので魔力の痕跡が残っている筈です。

.....

.....

… 50%なのでまだ時間がかかりますね。あくしろよ。

… お。見つけました。思ったよりも近いですね。  
早速向かいますよ。

少女移動中…

お。まずは1人見つけました。既に死体になっていましたが。  
とりあえず死体を調べます。

まず目につくのは胸元の刺し傷ですね。恐らくこれが死因でしょう。近くに落ちて  
いるSGも真つ二つに割れていますので。

そしてもう1つ、両脚の火傷ですね。鈴音の魔法で脚を燃やされて転倒したのでし  
ょう。

念の為に一応写真も撮っておきます。殺人が起きた証拠になるので。

そしたらもう1つ反応があるので、そちらの方にもイキますよ〜イクイク…

ヌツ！（到着）

Oh... これは酷い。

死体が2つ。片方は外傷は無く、SGだけ砕かれています。もう片方は血塗れですね。左腕も切断されています。恐らく抵抗を試みたせいで、鈴音は一撃でSGだけを砕く事が出来ずに無駄に傷付けてしまったんですかね。

それではこの2人も写真を撮っておきましょう。これを傍から見たらヤベー奴。ネクロフィリアかな？

さてと、ここ←でやる事は終わりました。そしたら次は調整屋に向かいます。向かいたいんですけど... もう体力が限界です。そもそも調整屋も閉まつてるでしょうし。

なので今日は一旦休んで明日向かいます。

「調整が終わったわよ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

何時もの如く、「飛蝗」の手掛かりを探しながら、途中で見つけた魔女を狩り、そして調整を受けていた時の事。

彼女は突然やってきた。

「みたま！いる!?!」

「何時でもいるわよ。」

やや焦った様子で入ってきたのは、リンネさん。かなり前に協力関係になったもの

の、あれ以来殆ど会っていないかった。忘れられていたりしないだろうか。

「ちよつと不味いことが起きた。」

「例えばどんなく？」

「魔法少女同士の殺し合い。」

成程、穏やかじゃ無さそうですね。

「へえ……もしかして、東西間で？」

「いや。市外の魔法少女よ。そいつが突然襲ってきたみたい。」

市外の魔法少女……まさか縄張り争いで？

「あの……失礼ですが、それは本当に襲われたのでしょうか？もしかしたら、縄張りに侵入された事に激昂して襲った可能性も……」

「正当防衛、と言いたいんでしょうけど、恐らく違うわ。襲われた3人は皆そういう事をする様な性格じゃないと思うから。」

「え……ちよつと待つて下さい。」

「その3人は、あなたの知り合いだったの？」

「あー、ええ。一応は。」

いやみたませんそじじゃないです。確かにそこも重要ではありますけど。

「……今、3人と言いましたよね。その3人は別々に襲われたのですか？」

「いや、多分同時に襲われたわ。」  
なるほど。

——つまりその犯人は3人を同時に相手取って勝てる程の実力を持っていると。

非常に不味い状況。犯人の本当の目的が分からない上に、実力もある…

放っておけばまた新たな犠牲者が出かねない。

だからこうして相談しに来たと。そんな感じでしょうかね。

「そうだ、ななか。」

「はい？」

「せっかくだし、犯人探しに協力してくれないかしら？協力関係にあるんだし…い

いでしょ？」

「…わかりました。私も放つてはおけませんし。」

あれ？随分前の事だったのうろ覚えではありますけど、確か私が彼女を…人聞きの悪い言葉ではありますが、”利用”しようとしていた筈なんですけど。

…何だか、私の方が利用されてませんか？

「しかし、協力と言われましても…犯人について何か目星はあるんですか？」

「そう言われると思って…ほら、これ。」

「これは…写真？」



「あの、これは？」

「犯人の顔写真真よ。」

いや何でそんなものを持って…

「…まさか直接会ったんですか？」

「ええ。何か問題でも？」

”ええ” って…

随分危ないことをする物ですね…

「いや… というかこれって盗撮なんじゃないですか？」

「あら。だとするなら、あつちは殺人、器物損壊、銃刀法違反のトリプル役満ね。これは

あくまで、証拠の為に撮らせて貰っただけよ。」

そうですか。

「あともう一つ。彼女の名前はスズネよ。偽名の可能性はあるけど、この情報ももしかしたら役に立つかもしれないでしょうし。」

「手掛かりはそれだけですか？」

出来ればもう少し欲しい。

「生憎これだけよ。」

「そうですか…。」

しかし、たったこれだけの情報量で、尚且つこの人数——皆さんに手伝って貰ったとしても、たった5人で——この街一帯を探するのは流石に無理があるのでは……

「ただ、一応もう一つだけあるにはあるわ。ただし、これは私にしか使えない。」

「……と言うと？」

「彼女の魔力パターンを少しだけ調べてみたのよ。だから、私はそれをもとに探す事が出来る。」

なるほ——

いやちよつと待って下さい。それが出来るなら私要りますか？

「ただ、それも結構面倒でね。短時間ならまだしも、一日中つてなると魔力の消費も多くなるし、第一疲れる。見つけた時は、なるべく万全の状態で居たいのよ。」

確かにせつかく見つけたのに、疲れですぐに逃してしまつては元も子も無いですし、最悪戦闘になった場合に本来の実力を発揮出来ずに殺されてしまうなんて事になつたらたまつたもんじゃないですしね。

「だからあなたには昼間の搜索をお願いしたいの。私は夜間の搜索をするから。」  
なるほど。時間帯で分けるといふ事ですか。

「という事は……犯人は夜に活動する可能性が高いという事ですか？」

「ええ。あの子達も夜に殺られたし、それに動きやすい時間帯でしょうし。」

「：： 本当に大丈夫ですか？ 相手はなかなかのやり手ですよ？」

「心配しないで。 見つけたら連絡するから。 そしたら助けにきてくれるでしょ？」

その厚い信頼は一体何処からやって来ているんでしょうかね：：

「わかりました。 それじゃあ、私は早速その犯人の手掛かりを探してみますね。 それと、写真を送っては貰えないでしょうか？ 調査に使いたいです。」

「んじや送るわ。」

早速私の端末にさっきの写真が送られてくる。

「ありがとうございます。 とここでリンネさんは、昼間はどうするのですか？」

「私はとりあえず時間までここで休んでおくわ。 そういう事でみたま。 そのソファ借りるわよ。」

「え？ いや、自分の家で休めば：：」

「ななかは私の家を知らないでしょ？ だから何かあった時に私の所に来れないし、電話がかかってきても誰も起こしてくれないし。 ここの方が色々都合が良いのよ。」

まあ確かに合理的ではありませんけど：：

「：： でも、見たら分かると思うけど、ここ結構ボロボロだし：：」

「私は気にしないわ。」

「でも：：」

「良いわよね？」

「……わかったわ。」

なんか随分と強引ですね。気の所為でしょうか。

彼女に私の固有魔法は反応しなかった——つまり、彼女が騙しているとかではなく、とどのつまり純粹に協力して欲しいだけなのでしようね……

それに彼女は……どうやら私たちと同じく、暗い、悲惨な過去をお持ちの人。なら、私はしっかりと協力してあげないとですね。



ここでさつき撮った鈴音の写真が役に立ちます。

この写真を見ろよ見ろよ。

あと名前も聞かれるのでそれも教えて……

はい。とりあえず鈴音の情報はこれでokです。

したら今度はななかさんに昼間の搜索を頼み、自分は夜間の搜索をします。

「……本当に大丈夫ですか？ 相手はなかなかのやり手ですよ？」

大丈夫だつて安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

因みになんでななかさんに昼間の搜索を頼んでるのかですが、単純に信頼度維持の為に。鈴音は何かとんでもない乱数を引かない限りは基本的に夜間に活動します。なのでプレイヤー的には昼間は休んで夜間に搜索をしたいのですが、今回はななかさんに殺人が認知されてしまいました。その為昼間にも何らかの行動を取っていないとなかさんにマッチポンプだと思われるてしまうんですね。

なので”時間を分けて搜索する”という理由を付け、ななかさんが搜索している間に自分は”消耗を減らす為に休息する”という状況を作っていたんですね。

これをやる事で信頼度を下げること無く休憩をして戦闘に備えることが可能です。今回は成功したので大満足です。

因みに休む場所はここです。万が一にもななかさんに何かあった時にすぐ動けるのでね。

みたまさんはマギウスの援助を受けている為、断られてもちよつと粘れば受け入れてくれます。マギウス is God.

それでは最後に、みたまさんに鈴音の事を客を使って広めてくれと頼みます。これが本来ここに来た目的です。

これをやる事で少しですが被害が抑えられます。一日程度じゃほとんど効果は無いですが、3、4日もすると魔法少女以外にも噂として結構広がり始めます。そうして神浜に居ずらい環境を作り、鈴音を追い出します。

原作で美雨が蒼海幣を使ってやった方法と似たような感じですね。

そしたら後はやることも無いので休みます。Good night.

睡眠中：：

「：ネさん：：もど：：たよ：：起：：下さい。」

この声は：： ななかさんですね。リンネには起きてもらいましょう。

「起きましたか。それで犯人の手掛かりですが、残念ながら見つかりませんでした：：」

そう：：（無関心）

一先ずおかしな乱数を引いていなくて安心しました。ようやった。

「そうですか：：。しかし、気を付けてくださいね。予想が正しければ、ここからが本番でしようし。」

（心配）ないです。

それでは時間も惜しいので早速探しましょう。

今回は鈴音の魔力を探知しながら搜索します。ただ、どこに現れるのかが不明なので、ひたすらいろんな区をくまなく練り歩いて行きます。ここが一番面倒だって、それ一番言われてるから。

そんじやまその様子を超スピード!?でお送りします。

新西区！反応無し！次イ！

水名区！反応無し！次イ！



参京区！反応無し！次イ！

中央区！反応無し！次イ！

栄区！反応無―いや有るウ！奴はそこだ！のりこめ〜、

反応があつた地点にダツシユで向かいます。

：。 おや？なんかもう一人反応が出てきましたね。こマ？

もしかして只今襲撃中だったりします？

既プレイの皆様は知つての通り、鈴音は騙し討ちが基本です。なので一緒に居ることがとてもマズイです。最初は無害な振りをして、油断した所を一撃で殺すという手法を取っています。なのでベテラン魔法少女でも簡単に殺されてしまうんですね。なので今非常にマズイ状況です。

取り敢えずこの反応が誰かを：。 ってちよつと待つて！この反応アリナ先輩じゃねえか！なんでお前は何時もガバの要因となるのだ。

これは本気で不味いです。体力消費とか無視して全速力で駆け抜けます。あと保険としてななかさんに電話をして駆け付けてもらいます。

「見つけたんですか？。：。 成程わかりました。直ぐに向かいます。」

自分も急いで向かいます。

反応がだいぶ近くなつて…… お、見えてきた…… つてヤベエアリナ先輩が昇天5秒前だ。(絶望)

ちよ、ちよ、ちよつと待つて下さい！待つて！助けて！待つて下さい！お願いします  
！アアアアアアアア！(発狂)

「——さよなら。」

---

「お……いい感じの魔女を見つけたワケ。」

私はその魔女を自身のキューブに閉じ込める。

あともう一体魔女を見つければ、目的を果たせる。魔女同士を殺し合わせるという目的が。

……いや、違った。本来の目的は魔女の育成だったか。でも同じ事だよな？

魔女は魔法少女や一般人を喰らうことで、その体を強化し、使い魔を増やし、より多くの人間を殺せるようになる。だが、実は喰らうものは魔女でも良いらしい。魔女同士を殺し合わせている間に、何度も勝った奴が明らかに強くなっていたから、多分合っているだろう。

魔女でいいならそれに越したことはない。魔女同士を殺し合わせるのは愉快だし、わざわざ人間を襲わせてもつまらないし。

一つ不満があるとするとするなら、強くなった奴を殺せない事だろうか。

何度何度も勝ち続けて、とても強くなった所で、私の魔法に呆気なく殺されてしまう

のは本当に面白かったのだが。

でもリンネの言う事を無視する訳にも行かないから、仕方ないか。

「お：：カモを見つけた。」

その結界は、私が来たのに逃げる事無く堂々とその入口をこちらに向けていた。そんなに死にたいの？

ならお望み通りにしてあげよう。

私は結界に足を踏み入れた。

——が、中はすっかりカラツポ。使い魔は一体も見当たらない。先客が居たか？

確かめる為に奥へ進む。

しばらく進んで結界の最深部手前。そこにはやはり、先客が居た。

リンネとは少し違う雰囲気の白っぽい髪。オレンジ色の、例えるならカッターの様な見た目の大剣を携えた魔法少女。

「あなた、この魔女をK i i r i しに来たワケ？」

「…」

若干の沈黙。

かと思えば途端に笑顔になる。さつきまでの仏頂面は一体何なのか。

「そうだよ。あなたも？」

「へえ。なら今すぐにそれをやめて欲しいんですケド。」

「…え？あ… グリーフシードなら譲る。だから…」

グリーフシード？そんな物は関係ない。

「違うそういうのじゃないカラ。この魔女は別の魔女と戦わせるワケ。」

「別の魔女…？どういう事？」

「そのままの意味なんですケド。固有魔法でこうやって結界を作れるワケ。だからその中に魔女を捕まえて、別の魔女と戦わせるワケ… 面白いと思わないカナ？」

「そ… そう。」

あまり理解出来てないのか、やや遠慮気味に頷く。なら見せてあげよう。

早速結界の最深部、魔女のいる下へ足を踏み入れる。

そこに居た魔女は… はつきり言って微妙。強くも無いし弱くもなさそうでイマイチ面白みに欠ける。

まあ別にいいだろう。それならさつきの魔女の養分になってもらうだけだ。

さつきの魔女を捕まえた結界を解除する。

〈KOKOWADOKO OMAEHADAREDA〉

〈KONOBASYONIKITA KONOBASYONIKITA NANDE  
NANDE KOROSU ANATAWO WATAIWA〉

「魔女同士が：：殺し合ってる？」

「そう！面白いヨネ！滑稽だと思わない？」

「いや：：それは：：」

まだ分からないか？

いや：：感性は人それぞれだし、分からない人間もいるか。でも大多数はきつと私と同じ感想を持つだろう。

「最高だヨネ！」

と。

それから魔女の戦いはすぐに終わり、やはり元いた魔女は負けた。勝った奴を結界に戻し、魔女の結界も消滅した。

そしてキューブを仕舞う。にしても彼女の武器は特徴的だ。やけに印象に残るビジュアルをしていてとても目立つ。

「さっきの魔女のグリーンシードはあなたが持っていていいワケ。」

「ん……ありがとう！」

もうここにも用も無いし、また別の魔女でも探しに行くかなんて思つて魔法少女を解除しようとしたら、呼び止められた。

「あなた、名前は？」

名前？そんなの聞いて何になるんだろう？

「……まずそつちから名乗つたらどうなワケ？」

「私……私の名前はスズネ！」

また彼女は笑顔になつて言う。

そういえば彼女は武器を仕舞わないな。まだ魔女を警戒している？だとするならば、ただだけ用心深いんだ……

——ん？今視線が下に？

「スズネ……アリナはアリナ。アリナ・グレイ。」

「アリナ……ね。」

待てよ。まさか胸元を見てる？セクハラか……？

「名前、ありがとう。」

……胸元？

「それじゃあ——」

なかなか仕舞われない武器——変身を解除させない——  
違う。彼女が見ているのは私の胸ではない。彼女が本当に見ているのは——

「——さよなら。」

——ソウルジエム!!

彼女はその武器を私に振る。

気付くのが遅すぎた。

彼女が武器を仕舞わないのは、用心深いからではなく、最初から私を殺そうとしていたから。

変身を解こうとした時に声をかけてきたのは、指輪になったソウルジエムは攻撃し難いから。

気付ける要素は幾らでもあった。なのに私は魔女を殺し合わせた後の興奮で……!

彼女にさつきまでの笑顔は無く、あるのは目の前の存在を殺すという絶対の意志を持ったその冷めきつた瞳だけ。

彼女は一切の躊躇をせずに、私の魂目掛けてその刃を振るう。

その動きはやけに遅く感じる。でも、私の身体も動かない。



——避けられない。

ああヤバいこれ本当に死——

——横からの衝撃。予期していた物とは別の衝撃に、私は逆の方向に倒される。

それと同時に、金属にとてつもない衝撃が走った様な音が聞こえる。

それは鋼鉄で出来たナイフと、魔力で出来た大剣による物だった。

——生きてる？

衝撃のあつた方向を見る。するとそこには。

「リン、ネ……？」

私の1番大切な……私の生きる意味である人が……いた。助けてくれた。もう一度私の事を。

……いや……よく見ると何かが違う。その顔が、表情が、何時ものソレとは決定的に。「……あなたは誰？……名前は何？」

「殺す。」

リンネがそう言い放った次の瞬間、リンネはナイフで受け止めていた剣を逸らし、2発発砲した。銃口の向きは顔面を指していた。

スズネはその2発を大剣で即座に防ぐ。

なるほど。どうやらリンネは……とても怒っているみたいだ。だからあんな顔を……当然か。私を殺そうとしたから。

なら、スズネは殺されたとしても、それは自業自得ってやつだよな？

リンネがまた銃のトリガーを引くと同時に、二人の“殺し合い”は始まった。



って突然の自動操作やめろ。(戦慄)

リンネ思いつきり殺意剥き出しにしてんじやねえか!? やめロツテ! (激寒)

銃弾を2発撃ち込んで…

おお、鈴音は防いでくれました。当たってたらちよつとヤバかった。

って何またもう一発撃って… っでここで操作権戻るの!?

開戦だけしといて後は丸投げとかヤメロオ! (建前) ヤメロオ! (本音)

取り敢えず鈴音戦は本気でやらないと殺されるからいろいろとヤバいので早速本気で戦わずに今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございます。